

士頗る多く、詩人として一家をなしたるもの、數ふべからず、中にも李白・杜甫の二人最も名あり。而して唐に在りては意象既に過ぎて、修辭頗る盛んにして、李商隱は杜甫を學びて、典麗博大の處を得たりしが、其の特色は艶靡華麗にありき。又杜牧の詩は豪放にして而かも艶あり、氣概あり、世人小杜甫と稱したり。

斯くて唐代三百年の文運は、實に支那文學史上の極盛時代なりき。然れども依然として魏・晉・六朝の餘風を受け、特に律語は前後無比と稱せられたり。散文は其の間に於て漸次復古の氣運を見るに至りしと雖も、遂に及ばざりき。然らば何が故に詩は唐に於てかくも隆盛を極めたりしか、歷朝の天子之を嗜好せしは其の理由の一なるべけれど、更に大なる主因は詩その物が一種の採士法となりしに依れるなり。加ふるに開寶の前後隆昌の時代に在りては、兼ねて又名士の玩弄物となり、太平の裝飾品となれりき。唐代の文學をして跋足的發達を遂げしめしもの、寔に故なきに非ざるなり。而して五言の一體は六朝の間に於て既に其の變を極めたるを以て、七言の新體一般に行はれたるが、之れ又時代の變遷に従つて其の變化を極め、以て支那律語の極盛を織り出

せり。

唐代に於ける詩の盛昌なりしは、實にかくの如しと雖も、只遺憾とすべきは前述の如く、其の發達が只單に形式に止まりて、其の内容に於ては更に特別の刷新を見ざりしことなり。其の原因は漢族の實際的傾向、累をなし、以て文學の獨立的價值を認めざりしが故なり。されど又當時の社會狀態の影響も與つて力ありしは論を俟たざるなり。蓋し六朝の後に唐あるは恰かも戰國の後に漢あるが如く、閩國統一の大勢は偶々國民に休息の時期を與へしのみなり。

開寶前後國運の隆勢なるは武帝時代と同じく、外は武を四境に輝かし、内は奢を宮掖に盡くし、以て物質的の饒に満足を求めつゝある間は、更に精神的方面の生活に活きんとするの意あらざりき。四傑沈宋の七言近體は、司馬相如一派の辭賦と恰かも其の揆を一にし、其の咏題も甚だ類似せり。

加ふるに兩漢より六朝を通じて儒家が唯一の事業と心得し訓詁註疏なるものは、太宗の代に顏師古が繆闞の離正と、孔穎達が義疏の撰定とを以て終局となし、茲に儒教に

全く凝滞し、佛道二教は依然として互に上下し、後に宋代理學の勃興を見るまでは、三教並存の結果、人をして撰擇に惑はしめ、之を一般に謂へば未だ信仰を確立せしむるに至らざりき。之が爲めに詩人も文士も理想に乏しくして、其の見地極めて低く、其の賦する處のものは大抵即興の作にして、遂に詩の位置を高めしむるに至らざりき。されど天寶の亂は、漢族千古の運命を轉向せしめし一大事變にして、之より五代の末に至るまで、殆んど二百年間其の亂離の甚だしきこと又六朝に過ぐるものありき。此に於てか興亡盛衰の感、榮枯消長の思、自ら詩に現はれ、之をして沈鬱悲壯ならしめ、魚龍百變、幻怪極まらざるの盛觀をなさしめ、曩に漢・魏・六朝を経て五言古體の上に及ぼせし、同一の變化を唐の一代三百年に於て全く成し盡くさしめたり。唐詩の百世に冠たる所以、寔に偶然にあらざるなり。

されば唐代を通じて上は臺閣の名臣より、下は山野の隱士に至るまで皆な詩人ならざるはなく、其の典據たる乾隆御撰の全唐詩は、全部九百卷に達し二千三百餘家、四萬八千九百餘首を収録せり。然れども此書は千年後に成りしものにて、其の間に湮滅せ

るもの少なからざるべきを疑ふ。

唐の詩文は頻りに大家を輩出せしめしと雖も、小説は未だ一新時期を劃する能はざりき。然れども斷片零冊は固より多く、唐代叢書・五朝小説等に收むるもの無慮數十部に及びたり。就中最も世に現はれたるは開元天寶遺事にして、玄宗、宮掖の遺聞を叙し、西京雜記・漢武故事等と科を同じうし、五代の時、太原の王仁裕之れを作れりと云ふ。然れども支那小説發達の考察に資すべきものは、會真記・遊仙窟に及ぶものならず。會真記は元稹の手に成りしものにして、司馬相如の美人賦と殆んど相似て、亦自己の閱歷を述べたるもの、如く、其の文亦誦すべし。遊仙窟は名を張文成に托し、或は前者に倣ひしものと云ひ、神仙に托して情事を述べたり。篇中稍々卑褻に失する所ありて、後世淫者の俑を作りしを疑ふ。然れども文辭頗る絢爛にして、花月の光華その中に充ち満ちたり。

又詞は唐に初まりて五代に行はれ、兩宗に瀾漫したる極めて多變なる支那律語の一體なり。詞に定格あり、字に定數あり、韻に定聲あり、彭孫遹の三百篇より以下、漢

魏・六朝に至るまで律語の體制多端なりと雖も、大別すれば先づ二様に別ち得べく、即ち句格の整、不整是れなり。其の後沈約四聲を論ずるに際して、律語の整なるものは之れ律絶となり、律語の不整なるものは應て詞となれるなり。梁の武帝の江南弄、沈約の六憶詩の如きは聲調圓美にして、正に絶好の好詞として推賞するに足る。

然れども普通詞の濫觴となすものは、李白の清平調・憶秦娥・菩薩蠻及び張志和の漁歌子を推すなり。其の源たるや頗る古く、詩と並行して發達したるを知るべし。されば汪森は古詩の樂府に於ける、近體の詩に於ける、並馳の先後あるに非ず、詩降つて詞となること云ひ、詞を以て詩の餘となすは通論に非ずと云へり。

李・張の數家は僅に風氣を開きしのみにて尙言ふに足らざるが、白居易には花非花・憶江南・如夢令・長相思等あり。又溫庭筠には南歌子・荷葉杯・蕃女怨・訴衷情・定西番・思帝鄉・玉胡蝶・女冠子・木蘭花等あり。五代に至りては新調愈々多からんとす。又科學の發達は到底之れを支那人に望むべからず、醫學の如きも絶て進歩なく、只記述するに足るべきは天文・曆法の沿革のみ。西漢には唐都・李尋あり、又東漢には蘇

伯朗・雅光あり、共に天文學の大家なり。而して張衡は渾天儀を製し、次いで侯風地動儀を造れり。此器は精銅を以て鑄、員徑八尺、合蓋隆起して形、酒樽に似たり。而して鳥、獸、龜等の形を飾り、中に鄰柱ありて傍行八道に別れ、關を施し、機を發し、外に八龍あり、若し地動けば樽振ひ、龍機發して丸を吐き、之れに依つて地震を測る、即ち一種の地震計なり。又西漢の時大章車ありて、路を往く間に里數を知る様にせり。

秦の世、建亥の月を歲首となし、且つ月名を改めず、十月は年の初めとして九月は年の終りなり。漢の初め尙ほ此れに依りしも、武帝の時、太初曆を作り、夏正に依りて正月を歲首となしたり。其の後成帝の時三統曆を作り、平帝の時四分曆を作り、靈帝の時乾象曆を作り、かくて四度び改めたり。三國時代に吳・蜀は漢曆に依りて夏正を用ひたりしが、魏は正朔を改めて建丑の月を正月とせり。之に次いで東晉の時、虞喜は歲差を論せり。蓋し古來の曆法にては三歲三閏、十七年に七閏、日月星辰の運行に出入なく同一となるを一章と稱せしが、尙ほ些少の差異あり、數年の後冬至に日のあるところ同じからず、之れ即ち歲差なり。虞喜は此れを計算して五十年に一度の差ありとなせり。

然れども宋の何承天は百年に一度の差ありとなし、隋の劉焯は七十五年に一度の差ありとなせり。其の眞何れにあるか詳かならざれども、唐に至りて李淳風は曆法を更新して名あり。

又書は李斯の小篆、程邈の隸書に次いで、漢代には初めて楷・行・草の書體現はれ、字を作ること頗る簡易となれり。此の時代には又筆・墨・紙世に廣まされり。然れども印刷術は未だ知られざりき。隋の文帝の開寶十三年十二月、詔して廢像遺經を悉く板に彫らしむ、之れ典籍に見たる印書の初めなり。然れども唐代には未だ廣く行はれざりき。五代の時、唐の明宗は太子、賓客馬綽に命じ、詳勤九經官に充て、諸道人中に於て寫し、匠に托して彫刻し、又漢の高祖の乾祐年中に馮道初めて周禮・儀禮・公羊・穀梁の四經を刻み、周の太祖の末に尙書左丞田敏は、印板の五經を獻せしことあり。其の後印書の術は百餘年を経たる宋の中世に至りて隆盛を極め、其の技愈々精巧の域に進み、かくて古今の群籍みな上梓せらるゝに至れり。

三 李白・杜甫

唐の開元・天寶は玄宗の治極盛に達し、今や將に衰運に變せんとする時にして、歴史は茲に一大轉回期を爲せしなり。而して唐詩は太平の澤に濕ほひ、俄然隆興して其の極點に到達せり、就中その優と稱せらるゝは、李・杜の二人即ち是れなり。

李白は字を太白と呼び、隴西成記の人なり。或は蜀の人なりとも、又山東の人とも云はる。幼にして逸才、志氣豪放なりければ、飄然として既に超世の心あり。始め岷山に隠れけるが、益州の長史蘇頌之を見て早くも常人にあらずとなせり。

天寶の初め長安に至りて賀知章と見ねけるが、知章は其の文章を觀るに及びて感嘆止まず、玄宗に奏して金鑾殿に召し以て一篇の頌を奏せしめたり。此に於てか帝食を賜ひ詔して翰林に供奉す。されど白は尙ほ市井に出で、その徒と酒を酌み交はせり。或日帝は沈香亭子に坐し、感ずる所ありて白を喚び、以て樂章を作らしめんと欲したり。既にして白酔ひて文を成るや、婉麗精巧なりしかば、帝其の才を愛し、屢々宴席に招きたり。之より白は常に近侍し、之を官に入れんとせしが、楊貴妃沮んで即ち止む。白は自ら親近に容れられざるを知りて山に歸らんことを願ひたり。此に於て帝は

金を賜りて送り還せり。其の後白は諸國を浪跡して終日酒に浸りけるが、安祿山の變に際し、永王璘、江陵の都督となるに及び、其の僚佐となれり。已にして璘、亂を謀りて其兵敗るゝや、白は罪に坐して夜郎に長流さる、されど赦されて復た還るを得たり。かくて代宗即位するに當り、左拾遺を以て召さんとせしが、白既に死したりき、其集三十卷は今尚ほ傳はれり。

白の産地は詳ならずと雖も、幼少の頃より蜀に在りければ、彼地の感化を受けしは争ふべからざるなり。其の人と爲りは飽くまで才人的の性格を有し、熱血に富み、功名の志、たるや老ゆるも尙燃ゆるが如く、個黨にして縦横を喜び、任侠を以て任じ、數人を手刃し、財を輕んじ、施を重んじ、産業を事とせず、さながら戰國時代の人物の如し。之が爲め魯仲連、張良の人と爲りを慕ひしと傳へらる。嘗て書を安州の裴長史に上せて曰く、五歳にして六甲を誦し、十歳にして百家を觀、經を横へ籍に枕し、製作常に休まず、必ず四方の志ありと。乃ち劍に杖いて國を去り、親に辭して遠く遊び、南は蒼梧を極め、東は溟海に接すと。其の晩年に及んで永王璘の幕下に參じたる爲め、罪を得て

夜郎に流されしも、亦此の念の爲めに誤られしものなり。

然れども到底其の志を遂ぐるに能はざるを看破するや、去つて道家の説を尋ね、強いて自ら功名心を抑へ、其の性をして洒落豁達ならしめ、以て浮世の苦艱を忘れんと欲せり。前者の即ち功名的野心と、後者の即ち出世的願望とは、氷炭も雷ならざるものとして、其の一身は實に矛盾の凝固體なり。此に於てか胸中の煩悶を拂はんが爲めに、酒を縱にし、杜甫をして『李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣。是曰中仙』といふに至らしむ。而して其の一生を通じて常に此の如かり

而して白は一片の仙骨を有し其の性豪毅にして其の才は實に天授とも云ふべし。功名の心急するの時、或は家國興亡の感を述べしことあれども、其の詠する處は、主に天然に在り、風月草木に在り、神仙虛無に在りき。故に氣韻を以て他の詩人に勝れり。筆力縦横、到らざるなく、而かも期せずして法に協ひて、森嚴犯すべからざる規度あり。而して白の詩は詩の及ぶべからざる神識超邁の氣、飄然として來り、忽然として去り、

章句に屑々たらず、鏤心刻骨に勞々たらず、自ら天馬空を行いて羈勒すべからざるの趣あり。其の沈刻なる點より見れば杜に如かず、又其の雄なる點より見れば韓に如かず。れど、杜、韓を以て比較すれば一は力を用ひて痕迹を免れず、一は力を用ひずして觸手即ち春を生ず、之れ仙人と人との別なりと。

李白の詩は既に氣韻を主とするものなるが故に、意を對偶等に用ひず、近體よりも古體に於て其の長を擅にせり。樂府は其の最も得意とする所にして、集中約五十首の多きに上れり。

白の古樂府は縦横に變化して、才人の妙を極む。遠別離、蜀道難、梁甫吟、鳥夜啼、鳥棲曲、將進曲、襄陽曲、鳴皋歌等最も其の妙を表はせり。又五古は古風五十九首を以て第一とし、阮籍の詠懷、陳子昂の感遇と共に其の科を同うし、才に驕らず、氣を使はず、風格俊上と稱す。次に七古は神氣自ら伸びて情文並に高く、想は天外より落ち、局自ら變、生ず。大江風なくして波浪自ら湧き、白雲空に浮び、風に從つて變威し殆んど天授の業にして人の及ぶべきに非ざるなり。次に律詩は其の數極めて少く、五

律七十餘首、七律十首に過ぎざれども、自から巧麗にして其中に一種英爽の氣を含める所最も及び難きものあり。若し夫れ其の絶句に至りては、其の擅場を推すべく、眼前の景、口頭の語、而かも絃外の音は人をして心身恍惚たらしむるものあり。要するに李白の詩に於けるは莊周の文に於けるが如く、古今稀に見るの天才の作品なり。他の賦及び文に於て又觀るべきものあるなり。

白の巨星と影を聯ねて當時の詩界に輝映を放せしものは杜甫なり。杜甫は字を子美と云ひ、襄陽の人審言の孫なり。天寶の始め進士に應じて第せず、後ち三大禮賦を献するに及び、玄宗大に之を奇となし、召して文章を試み、京兆府兵曹參軍を授けたり。安祿山京師を陥れ、肅宗位に靈武に於て即くや、甫は賊中より逃げて行在所に赴き、左拾遺に拜せられしが、房琯を論救せしを以て、出されて華州司戶參軍となれり。關輔饑亂にして同州同谷縣に寓居し、自ら薪を負ひて露命を繋ぎたり。稍ありて召して京兆府功曹に補せられしも、道阻なる爲めに赴任せず。嚴武の成都に鎮するに及び、奏して參謀檢校工部員外郎となし、緋を賜へり。武は甫を厚く待遇し、此に成都浣花里に於て竹

を植ゑ、樹を植ゑ、江に臨んで盧を結び、酒を縦にして其の中にて嘯歌せり。

其の後武の卒するに及び、甫は依る所なく、偶々東蜀に赴きて高適に寄らんとすれば適既に死したりき。此の年蜀帥は互に攻殺し大に亂れければ、甫は一家を携へ、亂を逃れて荆楚に赴き、扁舟に乗じて峽を下りたり。然るに江陵も亦亂れければ、又湘流を遡りて衡山に遊び、耒陽に寓居して卒したり。年五十九。元和中偃師の首陽山に歸葬す。其の集詩文合はせて六十卷あり。杜甫の人物は全く李白と同じからず、北人的にして世間的情に於て極めて厚く、君を忘れざる思誠は世上稀に見る所なり。天寶以後は諸方に流寓し、其の間君を思ひ國を憂ひ、偏狹躁急、遂に其の性をなすに至り、常に不平を絶たず、慷慨淋漓、時事を悲しみ、兼ねて自己の不遇を哭せり。故に其の作は詩史と呼ばれ、當時紛亂せる社會内面の事情を審にするを得べし。

杜甫は天才に非ずして其の詩は専ら思力を以て得たるものなり。其本領は「語るも驚かず、人死するも休まず。」の一句最もよく窺ふに足る。其の筆力の豪勁なる又以其の才思の至る所に副ふに足る。要するに經營慘澹、千錘萬練の後に成れるものにし

て、句法、字法、章法、篇法に於て、あらゆる變化を曲盡し、且つすべての姿趣を描出せしに因り、古今の詩を集めて大成せしものと呼ぶる。

而して其の五古は博識にして力量の大なる古今獨歩と謂はれ、又七古は大海の水長風波を鼓するの概あり、盛唐諸家に列して獨り大家と謂はる。又五律は氣局濶大にして其の曲切到底、企て及ぶべからず。而かも意に任せて錯綜、變化を嚴密の間に寓したり。次に七律は最も得意とする所なりき。杜は博學にして氣盛んに、才大に又格の變化に富むを以て特徴とせり。然れども絶句の一體は、粗率の譏を免れず、李白に比すれば、格段の區別ありき。之を要するに古詩に於ては李白兩人共に長じ、近體に於ては杜の律、李の絶天下に冠たり。而して其の集に見るに、五言にては赴奉先、北征、七言には洗兵馬、七律には秋興、諸將、詠懷、古蹟等最も特色を發揮せるものと謂ふべし。

李白・杜甫は恰も時を同じうして詩壇に現はれ、而かも親しき交誼を結びながら、其の性行其の思想及び其の詞章を異にしたるは又實に奇觀なりき。李白は仙人の如く、杜甫は聖人の如く、彼は田園的にして此は世間的。彼は理想派にして此は實際派な

り。而して彼は道教の感化を受け、此は決して儒教の見地を離れず。彼れは氣を以て勝ち、此は精に於て篤く、彼は一氣呵成にして、此は苦心經營、彼は自然の間に放吟し、此は時事に感慨す。彼は時に樂天的なれども、此は常に悲觀的なり。彼は放縱にして此は狹窄に、彼は縹緲空靈の趣を以て其の勝を擅にし、此は沈鬱頓挫の致を盡くせり。之を要するに彼は海にして此は山に譬ふべく、才に於ては李、力に於ては杜なり。二家作詩の遲速を比するに、李白は一事にして詩百篇、筆飛ぶが如く語々皆豪を極めしに反し、杜甫は刻苦經營尋常ならざりし。然れども製作の遲速は必ずしも作品の價値と關係せず、之を要するに兩者決して優劣を論ずべきに非ず、凡そ偉人は自己の何者たるを知る同時に、天空海濶の雅量を以て容易に他の美に服する者にして、二家の交情亦頗る親密なりき。李白の晩年に至つて夜郎に流さるゝや、杜甫は夢に李白の一首を作りたり。

四宗 教(佛教・道教・諸外教)

佛教が初めて支那に輸入されたるは、實に後漢の明帝時代なりし。而して又西方諸國

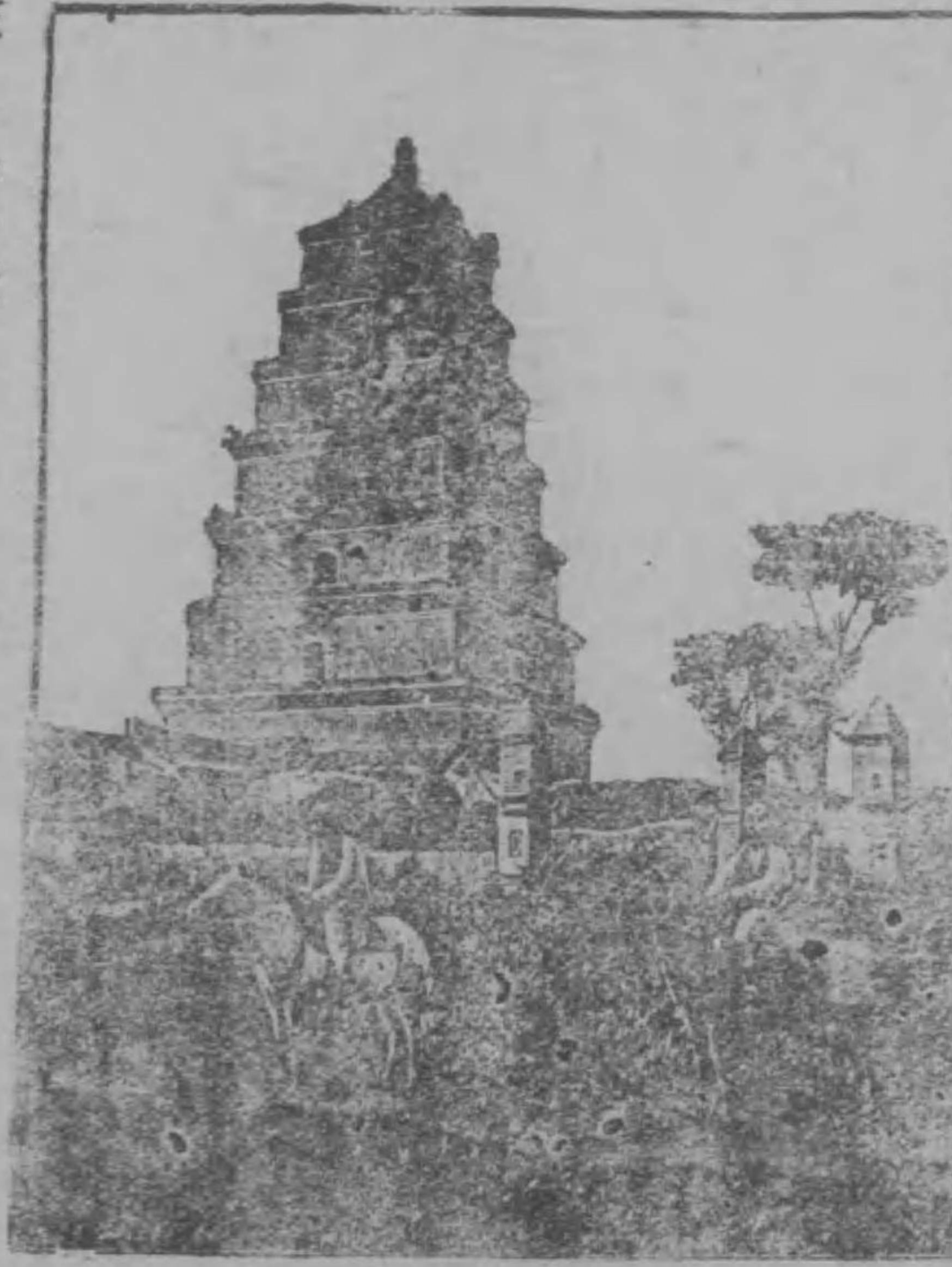
との交通開くるに及び、魏・晋以降諸外教も漸く傳來し、唐代に於ては道教・佛教以外更に祇教・摩尼教・景教・回教等も盛んに行はるゝ。至り、斯て東西の交通を促せり。道教は老子より出でたるものなれども、其の實秦・漢時代に方士の徒輩が附會せるものに外ならざりき。然れども其の所説は愚民を迷はすのみか、遂には帝王を惑はすに至り、かの後漢の張角の如きは、此の道教を振り翳して黃巾の衆をば集め得られたる程の勢力を有するに至れり。されば魏・晋以來其の勢力殊に盛大にして、清談の徒を輩出せしめ、梁の太武帝及び周の武帝等は、餘りに過信したる結果、遂には佛教を抑壓するに至りたり。

唐の勃興するに當り、國姓の李は老子の李と同一なる爲め、道士等は老子を唐の遠祖と崇め、高祖は廟を建て、之を祀り、高宗は之を太上玄元皇帝に崇拜したるが、殊に玄宗は道教にかぶれたる結果、家毎に道德經を一卷宛所藏せしむるの制となし、遂には科擧に之を試むるに至りしより、其の頌政の一に數へらるゝに至りたり。肅宗・憲宗の時代は、佛教盛んなりしも、武帝の時代に至つて又道士趙歸眞信仰を得たれば、道教は



愈々盛んにして、爲めに佛教は頗る振はざりし。

佛教は明帝の時代に公然と支那に傳來してより、西方諸國の外教にして支那に入るもの次第に増加し、印度の竺佛朔、安世高等は經を譯し法を傳へたり。魏・晋以來清談



塔 雁 大 の 寺 恩 慈

の流行するに従つて、佛教も亦流行し、後趙の石勒・石虎は、印度の僧侶ブドホチンガを崇拜して軍國の事までも議に與らしめ、また秦の苻堅は道安に師事して、鳩摩羅什を迎へ、舊譯諸經の誤謬を正さんとし、後秦の

代に鳩摩羅什の新譯三百卷成りたり。宋の文帝・梁の武帝・後魏の宣武帝の如きは、皆

な佛教にいたく歸依したり。既に西域僧侶の渡來と共に、法を求めんが爲めに支那より印度に歴遊する者も少なからず。法顯は十二年の長日月を費して、三十餘國を遍歴し、獅子國(セイロン島)に至りて青州に漂着し、佛國記を著はせるが、之れ實に後世に於ける歴史・地理學



玄の研究者に貢献したる資料、頗る大なるものありしなり。唐に入りては佛教は益々盛大となり、太宗の代に玄奘は印度に入り、十七年を

費して百餘國を遍歴し、六百五十餘部の經論を齎して歸り、新譯千三百餘卷を作り、又義淨は高宗の代に海を越て印度に入り、廿五年にして四百部の佛典を齎らして歸り

たれば、佛教の研究は日に増し盛んにして、玄宗の時には寺院の數四萬に増加し、僧尼の數實に數十萬の多數に上れり。かの玄奘の西域記及び義淨の南海歸寄傳は、俱に當時の旅行記にして、之れ又後世歴史・地理學上に大なる貢獻をなしたり。而して佛敎隆盛の結果は、茲に宗派の分裂を生じ、遂に八宗に分裂したり。即ち唐代の八宗と云ふは之れなり。

宗名 所據

- (一) 三論 (中論、百論、十二門論)
- (二) 法相 (唯識論)
- (三) 律 (戒律)
- (四) 華嚴 (華嚴經)
- (五) 天竺
- (六) 眞言 (密敎)
- (七) 禪

支那の元祖

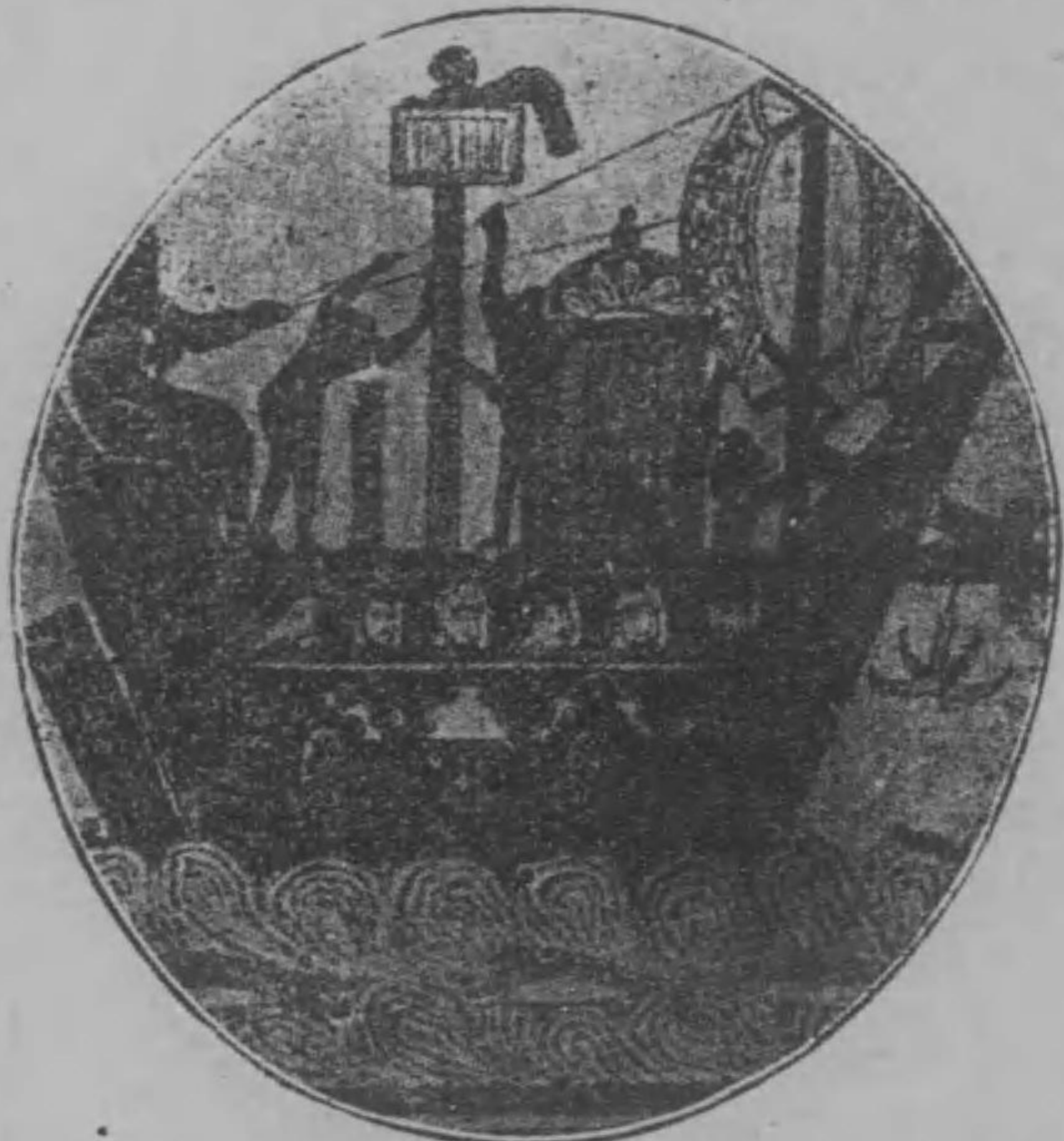
- 鳩摩羅什 (後秦)
- 玄奘 (唐)
- 法苑・道宣等
- 法順 (唐)
- 慧文 (東魏)
- スバカラシンハ (唐)
- リチラホトヒ (唐)
- ボチドハルマ (達磨) (唐)

日本の元祖

- 高麗僧惠灌
- 道照・智通・智達
- 唐僧鑑真
- 良辨
- 最澄
- 空海
- 臨濟は榮西
- 曹洞は道元

(八) 淨土

慧遠 (唐)



船商のンセラサ

斯くも隆盛を極めたる佛敎は、武帝の代となるや道教又貴ばれて、佛敎痛く排撃せられければ、此の事は魏の太武帝及び周の武帝の迫害と共に、佛徒は所謂三武の禍と稱せり。

又古代ペルシアに勃興したる所謂天體を拜する拜火敎即ち祆敎なるもの、南北朝の頃に始めて支那に入り來り、唐の始めには祠を長安に建て、世に行

はれたりき。又摩尼敎と云ふは、ペルシア人のマニなる者がササン朝時代にザラツストラ敎と基督教とを折衷し、それに佛敎を加味したるものにして、玄宗時代に支那に入り來りしものなり。又景敎は五世紀の頃希臘の僧正ネストリウスなるものが開きしものなり。

のにして、ネストリウスは新義の爲めに放逐されて、西亞細亞に流されけるに、其の地にて又之れを廣めネストリウス宗と稱せり。其の後ペルシアより中央亞細亞に跨りて流行し、唐の太宗時代に其の僧オロベンが支那に之を傳へたり。支那にては之を景教と稱し、太宗・高宗・玄宗等皆之を信仰し、寺院を諸州に建て、大秦寺となし、大に盛んとなれり。又回教はサラセンのムハメットが七世紀の始めに創めたる宗教にしてイスラム教と云ひ、徳宗の時入唐して廣東地方に廣まれり。斯の如く外教の入り來るありしより、自から貿易も開け、サラセンの商船の如きも、屢々南方諸港に往來したり。

*This book belongs to Yamamoto.*

### 第十三編 五代史

#### 第一章 五代

國名	始祖	國都	領域	興亡年代
後梁	朱全忠	大梁	河南、關内、河東、河北、山南等	九〇七(二代)
後唐	李存勳	洛陽	河南、關内、河東、河北、山南、隴右	九二五(四代)
後晉	石敬瑭	大梁	同上、内十六州はヒタイに失ふ	九三六(二代)
後漢	劉知遠	大梁	晉と同じ	九四七(二代)
後周	郭威	大梁	漢と同じ	九五〇(二代)
後梁				九六一(二代)

唐の衰亡を招きし所以は、前にも述べたるが如く外夷の侵略に非ず、又群雄の割據に  
もあらずして、朝威漸く衰へ、藩鎮割據して版圖を分割せしに因る。而して漢・晋のそ

れに異なる所は、安史の亂後相次いで帝室を危くし來れる藩鎮は、遂に勦滅するに至らずして、其の潜勢力の鬱積せる結果、勃發して遂に此處に至れるものなり。當時の藩鎮は其の勢盛んにして、殆んど列國と異なる處なかりき。而して唐の滅亡以來五十三年間は、後梁・後唐・後晉・後漢・後周の五代相繼ぎて中原に覇を稱し、此の外に十二國割據せり。されば此の時代を五代十二國の世と稱するなり。此の時代は君臣の義を重んずるの風は全く忘れられ、唐末の亂を合算すれば、約八十年間に亘りて、民は塗炭の苦を嘗めければ救ふ人だにあらば、其の節義の如きは更に問ふ處にあらず、かの憑道の如きは機を見て盛に就き衰を去り、前後四朝十君に仕へけるが、民の爲めに圖ること大なりければ、其の名盛んに稱道せられたり、以て如何に人心の腐敗と、當時の形勢とを知るを得べし。

五代の中晋 梁二國は最も大にして、相仇敵視すること年久しかりき。之より先き朱全忠、唐の禪を受けて位に即くや、諸方の藩鎮は梁の強大なるを畏れて其の門に降りけるが、獨り河東・鳳翔・淮南は、天福の年號を奉じて最も唐室に忠なりき。斯くて蜀

王建は吳の楊渥とともに檄文を諸道に廻して、岐晋の二兵と共に兵を合はせて唐室の復舊を謀らんとせしが、梁の威を畏れて又應ずるものなかりき。此處に蜀王建は、晋に書を送りて各々帝たらんことを請ひ、晋の諾を得て王建遂に蜀帝の位に即けり。かゝる間に梁の太祖は馬殷を楚王となし、綏纒を吳越王とし、高季興を荆南節度使となし、王審知を閩王となしたり。又幽州の劉仁恭は其の子守光に囚はれ、太祖は守光を燕王となし自ら帝と稱せり。又嶺南の劉隱死して、其の弟は後漢帝と稱し、所謂南漢となる。

梁の國威は必ずしも強大なりしには非ざりけるが、帝位を承けたる關係上最も聲望あり、加ふるに契丹又使を遣はして修交を求めたり。是れより後五十六年間は所謂五代十國の世にして其の争鬪の激甚なること、五胡十六國の昔を偲ばしむるものあり。而して此の時代は實に唐・宋二朝の統一に踏れる過渡期たるなり。

二 後 唐

これより先き晋王李克用は存孝及び存信の二養子ありたりしが、存孝は最も驍勇に

して戦功を樹てけるに反し、存信は病身にて兄弟の間好からず、遂に存信の爲めに陥ら  
れければ、存孝は禍を懼れて叛旗を翻せり。此に於て李克用は征伐して之を捕虜とな  
し連れ歸りけるが、其の才を惜み、刑場に臨まじ、何人か其の命乞をなす者出づるべき  
を想像したりき。されど案に反して一人の請ふ者あらざりき。

是れより李克用の兵は次第に弱く、唐の末葉には屢々梁の爲めに敗られ、既に數州を  
失ひ、其の城下晋陽には敵の迫ること一再ならざりき。克用は必死に防禦に努めける  
が、殆んど力盡きて逃げんとせる時、其の子存勗出で、之を止め、朱氏は既に暴逆の限  
りを盡して天人共に怒れば、必ずや近き將來に於て衰滅來らん、其の時期を俟つて徐ろ  
に我が忠貞なる家運を挽回すべし、今輕々しく自ら沮喪し、望を部下に失はしむべきに  
非ずと進言せり。李克用は之を聞きて大に悦び、意氣大に昂りて防戦したる結果、敵は  
遂に退軍せり。其の後梁の開平二年に至りて克用病に罹りければ、群臣に謀つて存勗  
を立て、嗣となさしめ、諸將に之れが教導を托して卒す。時に存勗は年僅かに十七な  
りき。

時に梁兵は晋の潞州を圍みければ、存勗は諸將と謀り、不意を討つて梁兵を大敗せし  
め、潞州の圍みを解きたり。存勗戰勝に誇つて賞を行ひ、州縣に命じて賢才を擧げ、租  
税を寛大にし孤窮を檢し、冤濫を伸べ、姦盜を禁じ、宇内漸く治まりたり。

又士卒を訓練し騎兵をして敵を見ざる中に馬に乗ることを禁じたるなど軍政を布き  
蜀岐と兵を併せて梁の雍州を攻めたり。其時梁の忠武節度使劉知俊をして之を防がし  
めけるが、知俊は梁王の猜忌に觸れて心安んせざる折柄なりければ、遂に部將を率ゐて  
岐に附し、更に兵を遣はして華州を襲ひたり。梁王大に驚き鎮定をして之を討たしめ  
んとせしが、鎮定も亦梁に叛きて晋王を立て、共に舊主とし、兵を合はせて梁を攻めた  
り。此に於てか梁將王景仁等軍を柏郷に進めたり。

晋の將軍、周德威・史建德・李嗣源等は、三千の精兵を率ゐて梁の壘門を壓したれば、  
王景仁等大に怒りて激戦を交へけるが、遂に梁軍敗北し、首を斬られたるもの無慮二萬  
級に及びたりと云ふ。

之れより先き梁主朱全忠病を得ること年久しかりしが、柏郷屢々不利を招きし爲

疾を押して戦線を巡視し、却つて戦敗して洛陽に還るや、疾愈々篤く、嗣を定むるに當り、長子は早世し、次子友珪ありしが、妻子友文は最も寵愛されければ、太子となさんと欲したり。此に於てか友珪大に怒りて亂をなし、深夜關を破つて寢殿に押入り、遂に梁主朱全忠を弑したり。かくて友文を殺し謀逆の罪を正すと爲し、金帛を出して文武百官に賜ひて悦を取り、喪を發して即位せり。友珪既に位に即くや、淫に荒みて内外の憤怒を招きければ、其の弟なる東都指揮使の均王友貞は兵を擧げて遂に之を誅し、大梁に位に即きたり。此に於て復た天下梁に歸せり。

斯くて晋・梁は兵を交ふること愈々甚だしく、梁の貞明元年に魏博節度使賀德倫は晋に降り、其の翌年に梁の劉勣は晋の魏州を攻めて故元城に敗れ、將士七萬人溺殺せり。かくて河北の地は皆晋の領域に加はれり。

幾何もなくして晋王は大舉して梁の討伐を謀り、周德威をして幽州の歩騎兵三萬餘を率ゐ、李存審・李嗣源及び王處直を遣はし、各々一萬餘の歩騎兵及び諸部落を率ゐ、

河東魏博の兵をも併せて、麻家渡に陣を布く。之に對して梁の賀懷、謝彥章は濮州の北に陣を取りて相對峙したり。晋王は自ら輕騎を率ゐて敵陣に入り戦を挑みければ、王處直等は書を上りて之を諫め、又李存審も之を止めたるも、王は容易に肯んせず、一日又存審の不在に乗じて數百騎を率ゐて梁の陣營に斬つて入り、敵に包圍されて頗る苦戦し、漸く命を全ふして歸ることを得たり。

梁の龍德三年に至り、晋王李存勗は壇を魏州牙城の南に築き、四月壇に上つて祭告し遂に帝位に即きて國を大唐と號し、元を同光と改めたり、是れ即ち後唐の莊宗なり。母の曹氏を尊んで皇太后となし、嫡母劉氏を皇太妃となし、魏州を興唐府となし、東京を建て、又太原府に西京を建て、又鎮州を眞定府とし北都を建てたり。其の時唐の有する所は十三節度、五十州に及び、其の曾祖以下を追尊し、考晋王を太祖武皇帝と稱し、晋陽に宗廟を建てたり。

かゝる間も梁と晋との交戦は常に絶わて、梁王は招討使の王彥章を遣はして唐の徳勝の南城を攻撃して之を拔き、更に進んで楊劉を攻めたり。鎮使李周は死力を盡くし

て防戦しければ、彦章勝つ能はずして兵を城南に引返す。唐王兵を引いて之を搦ひ、梁兵の退く所を又攻めしめ、唐王自ら陣頭に立つて梁兵と一戦を交へて大に之を敗り進んで中都に迫れり。かくて彦章は馬墜いて捕はれ、其部將等皆斬られて梁は亡びたり。此に於て梁は太祖帝位に即きてより二世十七年にして亡びたり。

其の時恰かも蜀は國內に亂起りて盜賊蜂起せしかば、唐王は魏王繼等を兵に將として蜀を討伐せしめたり。蜀王は利州に在りけるが、唐兵の來襲を知りて大に驚き、王宗勳等をして三萬餘騎を隨へて防戦せしめたり。然れども蜀軍大に敗れければ、蜀王の敗報を耳にするや否や、直ちに西に走りたり。かゝる間に三招討は互に謀議を凝らしたる結果、歎を唐に通じたれば、蜀王は如何ともする能はず、遂に軍門に降りて蜀亡びたり。今や唐は旭日の勢に乗じて梁を滅し、蜀を屠り、殆んど天下を三分して其の二を保ち天下一統の大業將に成らんとせしが、莊宗の驕恣は之を禍しぬ。

唐王は幼少の頃より音律を善くし、時には粉墨を施して優人と共に庭に戯れ、以て劉夫人を喜ばしめたり、されば諸伶人は掖庭に出入して縉紳を侮り、群臣誰れ一人として

憤怒せざるはなかりしが、又口に出す者なく、或は却つて之に附託して恩澤を媚ぶる者あり。四海の鎮藩は争つて賄賂を結び、其の最も甚だしきは伶官、景進なりき。

時に郭崇韜なるものありて智謀に富み、夙に帝を輔けて大業を遂げしめ、蜀を亡ぼして戦功ありければ、宦官之を猜み專横の振舞ありと讒言したれば、皇后竊かに魏王繼笈をして之を殺したり。天下皆其の故を知らずして、皇后竊かに帝を弑せんとすとの噂傳はるに至り、民情愈々驚けり。

次いで唐王は自ら鄴都を討たんとするの志あり、大臣等之を諫めて李嗣源を征討の將に推しければ、嗣源即ち命を受けて出征し、鄴都城の西南に至れり。然るに其の夜將士等大に騒ぎて其の營舎を焼きければ、嗣源驚き、其の何故なるかを訊したり。然るに彼等は主上の爲めに奮戦し、遂に天下を取りたるにも拘らず、今貝州の城兵歸るを願うて許されず、吾等素より叛志なけれども、今より主上に乞うて河南の帝となし、公をして河北に帝たらしめんと欲するなりと述べたり。嗣源之れを懇に諭しけるが將士等結束して肯かず、即ち白刃を抜き嗣源を擁して城に入る。斯くて嗣源は相州に赴きて

反をなせり。莊宗は變を聞くや大に驚き、衛兵を率ゐて之を討つ、時に亂兵門に迫り、城内に入り唐王は遂に流矢に中つて斃れたり。かくて莊宗は在位僅に三年にして嗣源位に即きたり、之れ即ち明宗皇帝なり。

三 後

晋

明宗の叛を勸めたる李從珂、石敬瑭は、共に戰功を樹て、聲名ありき。明帝はもと胡人にして晋王克用の養子となり嗣源と名附けたり。梁を亡ばし大功を樹てたる爲め、遂に推されて帝位に即きしものなり。性來猜忌の念なく登極の時既に六十の坂を越ければ、内に聲色なく、外に遊覽の氣なく、毎夕宮中に於て香を焚き天を祝して、某は胡人なるが亂に際して衆に推されて帝位に即けるものなれば、願くは天早く聖人を生じ以て生民の主となせと祈れり。斯くて帝は政を宦官に委ねず、内藏庫を廢し、廉潔の吏を賞し、書を知らずと雖も行ふところ皆道に合ひ、年々豊作なりければ、五代中此の時代は僅かに小康を保つを得たりき。

明宗に次いで次子宋王從厚位に即く、之れ即ち閔帝なり。

閔帝は學士を召して貞觀政要・太宗實錄を讀ましめ、治國平天下の道を講ずるの志ありき。然れども悲しい哉其の要を知らず、徒らに寛柔にして果斷に乏しければ、左右の中には早くも亂を想像し居たる者もありき。

石敬瑭はもと沙陀の人にして明宗の養子となる。初め敬瑭は潞王と勇武並び稱せられ、俱に明宗に仕へけるが、素より相善しからず、此の時潞王(從珂)は位に即きしも、亦久しからざりしかば、敬瑭止むなく河東より來朝せり。然るに亦河東に還されしかば、窃かに自全の計をなすに至れり。時偶々契丹邊境に來寇しけるが、敬瑭は之を忻州に防ぎければ、朝廷即ち使を遣はし軍士に夏衣を賜ふて軍旅を慰撫したり。然るに士卒にして萬歳を呼ぶものありければ、敬瑭懼れて之れを斬らしむ。此に於て朝廷は大に敬瑭の行動を疑ふに至れり。一方敬瑭は又唐王の意を試みんとして表を上り、他鎮に移りて病を養はんことを乞へり。帝乃ち執政と之を謀り、遂に敬瑭の請を容れて天平節度使となし、鄆州に移らしめたり。此時敬瑭は既に意を決して表を上り、唐王は養子なれば祀を受くべからず、位を許王に傳へよと云へり。されば唐王は大に怒り、兵を發



して之を討つ。

此時敬瑭は使を契丹に遣はして契丹の臣と稱さしめ、且つ父の禮を以て事へんことを請ひ、戦勝の曉は盧龍其の他の諸州を割きて與へんことを約したり。契丹の太宗徳光は之を見て大に喜び、其の年九月五萬騎を率ゐて陽武谷より南進して晋陽に至り、更に虎北口に陣し、一方敬瑭も亦知遠を將として馳せ加はらしめ、大に唐兵を破りたり。味方の大敗と聞くと、唐王の驚愕一方ならず、詔を下し諸軍を親ら率ゐて洛陽を發し、懷州に出陣せり。此時唐軍は急進、溫和の二派に分れて策戦思ふに任せざりければ唐王は意氣沮喪して日夜自暴、酒に親みて憂悶を散らせり。

此時契丹王は石敬瑭に向ひ我れ今三千里の道を遠しとせずして難に來る、而かも成功の望み十分なり。然るに今汝の器量を見るに、真に中原の主たるの相あり。されば我れ汝を援けて帝位に即かしめんと、乃ち敬瑭を立て、大晋皇帝となせり、是れ即ち後晋の高祖なり。此に於て敬瑭は十六州を割きて契丹に與へ、又年々三十萬匹の帛を納むることを約せり。

斯くて晋王は契丹王と共に兵を率ゐて大に唐兵を敗り、唐王は戦不利なるを見て洛陽に還り、更に河陽に向はんと欲せり。晋王は唐王の西走を慮り、契丹の兵千餘騎をして遂に之を扼さしめければ、今は逃れじと覺悟し、唐王は太后及び皇后其他の近侍と共に國寶を携へて玄武樓に登り、自ら火を放ちて死せり。此日晋王は洛陽に入り、かくて唐は莊宗より四帝十四年にして滅亡せり。

晋の高祖は契丹の援けに頼つて既に國を得たりければ、契丹に仕ふること頗る懇懇至らざるなく、之れを父皇帝と稱し自己を臣と呼び、使者到る處に之を別殿に招きて盛宴を張るの外、多大の貢を納め、尙太后・元帥等に至るまで皆多大の贈物を致せり。若し聊かにも意に満たざる所あれば、來つて之を責め、不遜の語多かりければ、朝野何人にも之れを耻辱と思はざるはなかりき。然るに晋王は恬として依然省みる所なく之に事へて更に飽きたる氣配も見わざりき。成徳節度使安重榮は、非常に之れを耻ぢ居たりければ、使者の來る毎に必ず之を慢罵し、時に或は私かに之を殺したることすらありき。然るに其の後重榮漸く心驕り、遂に山南東道節度使安從進と謀を通じて反

旗を擧げ、數萬の饑民を集めて鄴都に入朝せんと、噂高かりければ、朝廷は杜重威を遣はして之を討たしめ、榮重を捕へて之れを斬りたり。

其の時劉知遠は安重榮の勢力を殺がなが爲めに、其の將郭威を使はして吐谷渾の酋長白承福を招納し、晋王は疾を得て遂に卒し、出帝位に即く。

出帝位に即くや、表を致して哀を契丹に告げんことを議しけるが、景延廣は書を認むるに際して、孫と稱して臣と稱せざりければ、契丹大に怒り使を遣はして來り責めしめたり。其の時延廣は又不遜の語をなじりければ、遼主(契丹)大に怒り晋に代つて中國に帝たらんとするの野望を抱くに至りたり。時偶々遼の使者見ねければ、延廣は大言し、先帝は北朝の立つる所にして、臣と稱して表を奉れるが、今上は即ち中國の立つる處なり。然るに志を北朝に降す所以のものは、正に敢て先帝の盟約を忘れざるが故のみ。されば隣となりて孫と稱すれば足る、何ぞ臣と稱するの理あらんや、汝還らば能く其の主(の)に語れ、若し怒らば來つて戰を交へられよ、孫に十萬の磨劍ありと。

此に於てか遼主大に怒り、南進の志を決す。桑維翰は屢々帝に勸めて契丹に謝せ

んことを説きしも、延廣常に之を沮みたり。此の時劉知遠、河東に在りしが、高祖の遺命に依つて召し還され、政を輔佐せしめたり。時に知遠は延廣が必ず兵を擧ぐべきを探知したるも言はず、只益々兵を募り、既に十餘軍を増置して遼に備ふる所ありき。

晋の開運元年遼兵を發して、貝州に迫りければ、晋王は自ら兵を將ゐて澶州に屯し、劉知遠等をして備ふる處ありき。斯くて遼兵は步卒萬餘人をして壘を築きけるが、晋兵進んで其の壘を抜きければ、遼兵大に敗れて溺死する者數千人に達し、之れより敢て復た犯すことなかりき。然るに其の後遼主又自ら十餘萬の大軍を率ゐて澶州城の北に出陣し、晋王亦之れに自ら兵を將ゐて應戰す。かくて遼は精騎を以て左右陳を略しけるが、晋兵又動かす、互に萬弩を發し飛矢を放ちて戰ふ程に兩軍の死者數ふべくもあらず、遼兵遂に戰利あらずして北に歸れり。是れより晋は劉知遠を以て行營都統となし、杜重威を招討使となし、十三節度使を督して遼に備ふる所ありたり。

此年遼は又大軍を率ゐて晋に來襲し、其の翌開運二年正月には相州に至りけるが、志を得ずして還れり。此に於て晋は諸道に命じて兵を徵し、以て大梁を發したるが、

遼兵既に都排陳使符彥卿の爲めに敗られたる後なりければ、又兵を引いて大梁に入る。此の如く晋は毎年遼の侵畧を蒙りて殆んど奔命に疲れ、邊境の民亦塗炭の苦に陥りければ、和を爲すに如かじと、晋王先づ使を遼に遣はして過を謝して臣と稱したるが、遼に和意なきを知つて中止せり。

六年十月晋は杜重威を將として遼を撃たしめけるが、戦利あらずして還るや、遼は又大舉して晋を侵し、晋の營を圍み攻め、晋將王清は戦死せり。此の時晋の陣營は既に糧食盡きて又如何ともなす能はず、重威は二十餘萬の部下と共に軍門に降りけり。遼主はそれより南進して大梁を陥れ、兵を其の王宮に進めたり。時に晋王宮中に火を放ち自ら劍を携へて後宮を驅つて火に赴かんとしけるが、果たさずして軍門に降り、延廣又捕へらる。それより遼は晋王重貴を負義侯に封じて黃龍府に移す。此に於て晋は高祖より二世、十二年にして亡びたり。

斯くて遼主は兵を率ゐて宮城に入り、諸門は皆兵をして嚴重に守護せしめ、晋の群臣に告げて曰はく、今日以後は用兵を收め賦を軽くし、役を省くべければ、天下泰平ならんと。乃ち中國の衣冠を新に制して百官の起居皆舊の制に復し、晋の藩鎮は悉く降り。此に於て遼主は廣く四方の貢賦を受け、大に酒を縦にし、樂を作り、又胡騎を放つて四方より掠奪せしめければ、東西兩畿を初め數百里の間財蓄殆んど盡きたり。加ふるに遼主は近親子弟をして悉く節度刺史に任じけるが、皆な政を知らず、人に欺かれて怨聖漸く激しく、時に嚴誅を用ゆるに至れり。されば民皆な生を安んぜず、内外共に怨憤の聲益々高く、遼主を逐はんとするに至り、到る處に群盜蜂起したり。遼主は之を見、中國の容易に治め難きを知り、暫く上國に赴かんとして大梁を出發せり。其の時晋の文武百官從ふもの數千人、宮女宦官等數百人にして、悉く府庫の寶を萬載して去れり。かくて途々掠奪暴虐到らざるなく、遂に臨城に入るに及びて遼主疾を得て卒す。此に於て世宗位に即き、自ら天授皇帝と稱し、太后を幽し、中華の風俗を慕ひて多く晋臣を用ひ、而かも酒色に荒み、諸酋長を輕慢したれば、國人歸服せず、諸部落屢々叛して南侵に暇あらざりき。かゝる間に劉知遠は太宗が汗を去るの一月前、晋陽に位に即き以て、後漢の社稷を創めたり。

劉知遠は沙陀の人にして、素と晋祖石敬瑭に事へて戦功最も多かりき。されど出帝の爲めに猜忌されて、北面行營都統に貶せられたり。されど之れ却つて知遠の爲めに好機を與へたるものにて、知遠は之れより廣く士卒を募り、吐谷渾を招納し、後には其の酋長白承福を殺して其の一族を併せ、其の財産を没收しければ、兵力既に五萬を越え、頗る富強を極めたり。

これより先き晋王の遼と戦を交ふるや、知遠は其の危うきを察知すれども未だ諫めず、遼の深く晋土に入るに際しても、晋を援くるの意なきのみか、遼主の汴に入るを待つて表を上つて臣と稱したり。此に於て遼主はいたく悦びて厚く之を褒賞し、大臣の禮遇をなせり。既にして河東の將佐は知遠に勸めて尊號を稱して四方に號令せしめ、知遠自ら帝位に即きたり、併ながら未だ晋國を攻むるに及ばずとて、更に天福十二年と稱せり。聽て晋陽に歸り、遼主北還せし後は、兵を率ゐて洛陽に入り、遼將蕭翰の擁立せし唐の許王從益を殺して大梁を取る。是れより晋の諸藩鎮は、相次いで降を乞ひけ

れば、復た汴州を以て東京となし、國號を漢と改め、次いで大兵を以て杜重威を降服せしめ、恒州の將、何福進、李榮が遼將を逐うて來降せしを容れ、又將軍王景崇等をして關中を經略せしめたり。されど帝は在位僅かに一年にして歿し、皇子周王承祐繼いで位に即く、是れ即ち隱帝にして幾もなく杜重威は誅に伏せり。

斯くの如く遼・晋互に干戈を交へ、中原の兵戰に苦しむの時、南方の閩は忽ちにして滅亡の悲運に陥れり。始め王知審の後延鈞帝位に即きしが、國小にして且つ僻地なりければ、國內稍々少康を得しも、出帝の代に至りて内争起りて自滅するに至れり。

隱帝の位に即くや、同平章事、楊邠は機政を總轄し、樞密使郭威は軍事を司り、侍衛指揮使史弘肇は宿衛を司り、三司使王章は財賦を掌り、内外の治漸く成らんとせしが、次第に漢王の左右嬖臣等事を用ひ、親戚政に干渉するに至りたり。されど大臣等は常に之を裁抑しければ、漢王甚だ平らかならず、遂に左右の讒言を容れて邠・弘肇章等を殺し、又密詔を下して郭威を鄴に殺さんことを謀れり。

是れより先き何中・永興・鳳翔の三鎮朝命を拒みければ、諸將を遣はして之を討たし

めたるも、更に其の功なかりしより漢王は郭威を西而招慰安撫使に任じ、諸將を督して李守貞を河中に圍んで之れを討つ。時に蜀と南唐とは兵を出して應援しけるも功なかりき。此に於て郭威は戦功に依つて鄴都留守となり樞密使を兼ねるに至れり。斯くて郭威は諸將を召し、郭等の既に宛死を遂げたるを告げ、王の左右群小の所爲爲すなきを謀るや、諸將亦之れに同じ、彼等をして志を成さしむるに忍びざれば、宜しく朝廷を清掃して國家の安きを謀るに如かずと、即ち兵を率ゐて進んで澶州に至りたり。時に漢王は自ら出で、其の軍を犒らひけるが、諸軍北軍に降る者相次ぎ、漢王は僅に三相及び數十人の從官と辛うじて逃げ、宮殿に還らんとして入るを得ず、更に轡を返して西北趙府に至れり。時に追手の兵來りければ、漢王は馬より降りて民家に隠れけるが、遂に亂兵の弑する處となれり。此に於て郭威は百官を率ゐて太后に申して國を監し、次いで自ら位に即き、周室の後裔なりと稱して、國を周と改めたり。之れ即ち後周の太祖なり。此に於て漢は中原に王たること僅に四年に滿たずして亡びたり。

五 後 周

後周の太祖は在位三年にて歿し、次いで晋王榮位に即く。元來太祖は實子なかりければ、太祖の妻の兄柴守禮の子を養子となせり。榮は周の初め節鎮を領し、聽て開封に尹となり晋王に封せられけるが、太祖の臨終に際して政を聽かしめ、次いで位に即かしめたり。

時に北漢の世祖は、太祖の計を聞きて大に喜び、兵を遼に乞へり。此に於て遼は楊衮を將として萬餘騎を隨へて赴かしめ、世祖は自ら三萬騎に將として來援す。時に周王は自ら出で、之を防がんとし、漢は我が大喪に乗じ朕の年少を輕んじて來寇す、されば朕は自ら出馬して我が強力を示さざるべからず、彼の敵を破るが如きは是れ山の卵を壓するが如きのみと。時に群臣皆之れを諫めけるが、獨り王溥は其の行くことを勸めたり。

かゝる間に北漢の兵は既に高平に進出したれば、周の前鋒は撃つて之を退けたり。時に周王は敵軍遁れ去るべきを慮りて、窺かに進軍せしめたり。然るに未だ後軍の到らざるに先ち、周右軍の將樊愛能・何徽等先づ逃れ其の歩軍千餘人は甲を脱いて

軍門に降りたれば、周の右軍全く潰れて形勢頗る苦戦に陥りたり。此に於て周王は自ら親兵を指揮し、矢石を犯しつゝ奮戦す。時に宿衛の將、趙匡胤は主の危うきこと此の如ければ、一族枕を並べて戦死するより外に道なしと嘆じ、又禁兵の將張永徳は賊氣驕りたれば破るに易し、宜しく左右の兩軍を組織して之を撃つべきなり、國家の安危實に此の一舉に在りと、即ち各二千人に將として進んで戦ふ。匡胤は即ち士卒に先ちて敵陣に切つて入り、縦横無盡に斬り捲くりければ、北漢の兵大に敗れたり。時に遼將楊衮は敢て之れを救はんともせず、又世祖は晝夜兼行北に馳せ、僅かに晋陽に入るを得たり。戦終つて周王は樊受能及び何徽以下の軍使七十餘人を喚びて之れを責め、汝等戰ふ能はざる所以のものは、之れ劉崇に附かんと欲せるが爲めなるべしと、乃ち悉く之を斬殺せり。之れより驕將惰卒等も始めて怖るゝ所を知り、爾來姑息の政を行はざるに至れり。張永徳は頻りに趙匡胤の智勇を稱し、殿前都虞侯たらしめたり。周王は侍臣に告げて曰はく、兵は精なるを選びて多きを望まずと、即ち大に諸軍を簡にし又諸道に詔して天下の壯士を募りて闕に至らしめ、其の尤なるを撰びて殿前諸班となしければ、士卒精銳にして向ふ所敵なかりき。

れば、士卒精銳にして向ふ所敵なかりき。

斯くて周は北漢を攻めけるに、其の民皆つて糧食を以て迎へ、其の勞を犒らひ、又中には劉氏の賦役重きことを泣いて訴ふるもありて、降るもの頗る多かりき。始め周は北漢を併呑するの志ありけるが、既に周に降るもの多かりければ、更に進んで晋陽に攻め入りたりしが、戦利あらずして歸る。一方北漢の世祖は、高平の戰に破れてより憂憤の結果疾に罹り、大小の國事は其の子承均に委ね、間もなく歿したり。遼は承均を冊して帝となし、名を鈞と改めしめたり、これ即ち孝和帝なり。

帝は孝勤にして政事に精勵、民を愛し士に禮しければ海内殆んど治まりけるが、遼には男と稱して事へ相提携して周に當りたり。

周の太祖は恭險にして國政を増修すること多く、世宗の代に至りては實に五代の間稀に見るの英主たりき。其の位に即くや高平の寇を破りて英武の名を轟かし、號令嚴明にして敢て犯す人なかりき。敵に對し城を攻めて矢石左右に落下するも、泰然自若、機に應じ策に動じて人の意表に出で、又政を勤め姦を發きて聰明神の如かりき。暇あ

れば即ち儒者を召して史を讀ましめ、大義を明かにし音樂を嗜まず、常に朕は喜に因つて人を賞し、怒に因つて人を刑せずと稱したり。故に文武兩道共其の能を盡くさしめければ、人皆な其の明に畏れて其の惠に懐かざるはなく、爲めに戰に臨んでは能く敵を破り、地を廣め、向ふ處殆んど敵無かりき。

太祖は又宰相に告げて曰く、朕政治の事は一日も忘れざれども、未だ以て安んずるを得ず、宜しく近臣に命じ「君たり難く、臣たるも易からざるの論」と「關邊策」各一篇づつを著はさしむべしと。帝は又勅して天下の寺院にして勅額にあらざるものを悉く撤廢せしめ、私に僧尼を度することを禁じ、僧帳を作りて死亡又は歸俗する者あれば、時に隨つて開落せしめられたれば、廢寺院實に三萬餘に達したり。

其の後南唐は周の軍門に降りて、江北の地悉く周の領となり、今や南方の十四州六十縣は、既に周に入りければ、世宗は更に轉じて北方を經略せんと欲し、顯德六年自ら將として遼を伐ち、關南の地悉く周域に入る。かくて進んで幽州に赴きしが、病を得て引返し、瓦橋關を雄州とし、蓋津關を霸州として守備兵を置きて還りけるが、二ヶ月餘に

して歿し、其の子梁王宗訓年漸く七歳にして其の後を繼ぐ、即ち恭帝なり。

而して趙匡胤は世祖に従つて各地に奮戰して大功を樹て、士卒其の恩威に服しければ、更に淮南を平定し、又遼を伐つ。帝崩する當時は、殿前都點檢となり、更に恭帝即位の初めには檢校太尉を兼ね、歸德軍節度使を領有したり。此時北漢は遼と合併して入寇したりければ、即ち匡胤に詔して兵を率ゐて之を討たしめけり、其の時君主未だ幼少なりければ、中外共に疑念を挟み密かに匡胤を推戴するの意ありき。かくて愈々出陣し陳橋驛に宿營したる際、將士共に謀をなし、主上幼弱なれば假令死力を盡くして敵を破るとも、誰れか又これを知らんや、知らず點檢を冊して天子になさんとし、而して後北征するも遲きに非ずと。即ち黎明を待つて將士等、匡胤の寢所に迫りて擁立す。衆即ち萬歳を叫びて馬に乗せて汴に還る、時に匡胤轡を取りて曰はく、汝等富貴を貪らんと欲せば我が命に従へば可なり、然らざれば汝等の主となる能はず、太后主上は我が北面して事ふるものなれば、犯すを得ず、公卿は皆な我が比肩なれば、侵凌するを得ず、朝市府庫は侵掠するを得ず、若し命を用ふれば重寶を取らすべく、用ひざれば罰す

べしと。衆皆な應諾しければ、遂に隊を組み沐に入るに及びて周の將相等皆な降れり。此に於て朝臣等匡胤に乞ひて崇元殿に至り、禪代の禮を行はんとし、百官を召して即位の式を行ひ、宗訓を奉じて鄭王とし、符太后を周太后として西宮に遷し、大赦、改元を行ひ、其の領地たる歸德軍は宋州に在るを以て國を宋と號したり、之れ即ち宋の太祖なり。かくて周は三帝、九年にして滅亡せり。此に於てか使を遣はして遍く郡國藩鎮に告げしめて官を加へ爵を進めたり。これ實に西曆九百六十年なり。

### 第二章 十二國

#### 一前 蜀

國名	始祖	領域	興亡年代	併合者
前蜀	王建	山南西道、江南、隴右等	八九一（二代） 九二五（二代）	後唐
岐	李茂貞	山南諸州の地	九〇四（一代） 九一四（一代）	後唐
吳	楊行密	淮南、江南二道の地	八九二（四代） 九三八（四代）	南唐

### 二 國の表

燕	劉仁恭	河北幽滄十餘州	九〇九（二代） 九一四（二代）	晉
南漢	劉隱	嶺の南北四十九州	九〇五（五代） 九七〇（五代）	宋
南平	高季興	歸峽二州	九〇七（五代） 九六三（五代）	宋
吳越	錢鏐	浙の東西十三州	八九五（五代） 九七八（五代）	宋
楚	馬殷	嶺南一帶の地	八九六（六代） 九五二（六代）	南唐
閩	王審知	閩地全體	八九二（六代） 九四六（六代）	南唐
南唐	李昇	江以南廿一州	九三七（三代） 九七五（三代）	宋
後蜀	孟知祥	劍門以南、山西道四十六州	九二四（二代） 九六五（二代）	宋
北漢	劉崇	太原以北十州	九五二（四代） 九七九（四代）	宋

唐室の衰滅を招きしものは、晋・漢の如く外夷の侵入に非ずして、又群雄の割據にもあらず、實に藩鎮互に割據して版圖を分領せしに基因す。即ち安祿山の亂以來藩鎮は尙ほ地方に割據して未だ全く剽滅されず、其の潜勢力を養ひたる結果は遂に唐末に至りて互に跋扈して五代十二國の世となり、争鬪日も是れ足らず、爲めに唐室の社稷茲に



傾くに至れるなり。

前蜀の王建は四川の節度使なりしが、自ら蜀王と稱し、吳の楊渥と檄を諸道に飛ばして岐・晋二王と兵を併せ、専ら唐室の復興を謀りたり。當時天下は晋・梁二國の勢最も盛大にして、朱全忠は唐の禪を受けて帝と稱し、諸の藩鎮は大抵梁の威に怖れて其の正朔を受けし際なりしかば、王建等の檄に應じて來り集るもの殆んどなかりき。此に於て王建は更に晋に書を送り各一方に帝たらんことを希へり。即ち李克用之れに答へ誓つて節を守るべきを約したれば、王建遂に蜀帝の位に即けり。

王建の晩年に至りて蜀は振はず、高季昌の來襲を退げ南紹の入寇を防ぎしが、建卒するに及びて太子宗衍立ちて位に即き、北巡して岐を冒せしが利あらず、勉て成都に還り皇后高氏を復し章妃を嬖し、且つ驕奢淫樂に耽りて錦を着飾り晝夜名香を薫じ、酒色を漁りて暴淫到らざるなかりき。かゝる間に後唐の莊宗位に即き、吳と共に蜀は晋王の爲めに併吞されたり。

唐王は蜀の王衍が酒色に溺れて國政を顧みざることを耳にしたれば、魏王繼及び郭

崇韜を遣はし兵を率ゐて蜀を伐たしめたり。同化三年十一月崇韜は散關に至りけるが、諸將等皆蜀の地險惡にして長驅すべからざることを力説す。崇韜即ち李愬の計を用ひて進みけるが、之より先き李紹探は蜀の威武城を攻め、其の敗卒一萬餘人を放つて逃れしめけるが、蜀主は當時利州に在りて威武の敗卒に會ひ、初めて唐兵の來襲を信じければ、王宗勳以下の三將に三萬の兵を率ゐしめ以て邀へ伐たしめたり。されど戦利あらずして蜀兵敗走しければ、蜀主之を聞いて西に走り、王宗勳等の三將復た款を唐に通じければ、蜀主は成都に走りて遂に殺され、前蜀は二代三十五年にして亡びたり。

二 岐

李茂貞は鳳翔の節度使にして岐王となる。莊宗の代に楚王・吳越王等と共に唐に入朝したり。莊宗都を洛陽に遷し、長安を以て西東京兆尹となしたる時、茂貞も亦秦王に封せられたり。

三 吳

楊行密は淮南の節度使にして吳王となる。時に徐溫頗る權勢あり、梁軍を撃退して

軍國の庶政を掌り、陳彥謙を擧げて政事を委ねければ、江淮の地内治の功擧がりたり。時に又徐知誥は政を輔け、吳王に事へて恭を盡くし士大夫を撫するに謙を以てし、衆を御するに寛を以てし、身を約するに險を以てし、賢才を求め規諫を容れ、姦猾を除き請託を退けたれば、士民の心自ら歸し、宿將亦悦服せり。

かくて江淮の間は曠土愈々開け、桑拓野に充ちて國益々富強となれり。時に吳王楊隆演は、尙ほ唐の節度使なりしが、徐温は之に勸め、梁の貞明五年を以て國號を建て、元と改め、帝位に即かしたるなり、吳越王錢鏐は之れを伐ち、互に勝敗ありしが、其の年また和を講じたり。

これより先き吳の徐知誥は、金陵に鎮して歸老すと雖も、禪を受けんとし自ら大元帥齊王となり、後晋の天福二年に至りて遂に禪を受け、吳王楊溥を奉じて讓皇とせり。知誥は素と李氏の子、徐温に養はれしものなりしが、自ら唐の後なりと稱し、國を唐と號し、次いで姓を李に復したり。之れ即ち南唐なり。此に於て吳は楊行密が揚州に據りてより凡そ四王四十六年にして亡べり。

四燕

劉仁恭は盧龍の節度使にして燕王となる。されど其の子守光に囚はれ身となり、梁の太祖は守光を以て燕王となしたりしが、次いで仁恭自ら帝と稱せり。

時に晋・梁二國は中原に覇を争ひて兵火を絶たず、守光の代に晋將周德威は燕に來襲し、幽州城下に迫りければ、守光は即ち救を梁に求めたり。此に於て梁主は自ら往きて之を援けたり、時に晋將史建瑭及び李嗣肱は三百騎を變裝して梁軍の旗幟服色に倣ひ、樵夫を雜行せしめて暮色に紛れて營門に至り、梁軍に火を放ちければ、梁軍は不意を討たれて狼狽極りなく、梁主身を以て僅かに逃れたり。然るに夜陰の爲め道を失ひ、百五十里の道逃げ延び、愠憤の結果遂に病重りぬ。後ち幾何もなくして晋の大軍は幽州に入り、晋王自ら諸軍を督して四面城を攻圍して之を陥れ、燕帝劉守光及び其の父仁恭を捕へ、歸つて之を斬殺す。此に於て守光は梁の太祖乾化元年、僭號してより僅に三年にして亡べり。

五南

漢

南漢の劉隱は清海節度使なり。劉隱の卒後弟巽之れに代りて後漢帝と稱す、これ即ち南漢なり。

六 南平

南平の高李興は朱全忠の將にして、南平王たりしものなり。

七 吳越

吳越の錢鏐は鎮海の節度使なり、吳と戦つて勝敗決せざりしが、後ち和を講じて兵を休め民を息めければ、殷富を誇るに至れり。其の後晋天下を統一して後唐の莊宗として帝位に即くや、吳越王は自ら唐に入朝し、又は使を遣はして貢を納めたり。

八 楚

楚の馬殷は武安の節度使にして、唐の舊臣なり、梁の太祖の時楚王に封せらる。

九 閩

遼・晋互に相争ひ、中原兵戈に苦しめる時、南方の閩は忽ち滅亡の衰運に向ひたり。閩の王審知は威武の節度使にして、王審知の後に延鈞帝位に即きしが國小にして而か

も地僻なるを以て常に四隣に苦しめられ、國內稍々安康を得しも其後間もなくして内争起り、弑虐を恣にせり。出帝の代に至り延政は殷帝を建州に稱し、閩將朱文進は自立したれば、延政之を討つ、時に閩人は文進を誅して首を殷に傳へたり、殷即ち改めて閩と號せり。然るに南唐王李璟は、將を遣はして攻めて建州を抜く、延政出で、軍門に降りて、閩亡べり。

一〇 南唐

南唐の李昇は吳の臣なり。顯德二年周の世宗は李穀等十二將に命じて南唐を討たしめたり。時に南唐は李昇の後李璟位に在りしが、性軟和にして文弱を好み、人の己れに柔順なるを悦びければ、阿る者日々に多く、政事愈々亂れたり。既に南唐は建州に捷つて閩を亡ぼし、馬氏を併せ湖南を領せし後は、益々驕りを極めて天下を呑むの志あり。嘗て周の初に於て李茂貞、慕容彦超等亂をなせし時、皆之れが爲めに師を出だし、又使を遣はして周師を壽州に防いで之を敗れり。

其の翌即ち顯德三年に至り、周主自ら將として大に唐兵を正陽に破る。唐將皇甫

暉・姚鳳等の諸流、關に守りて防ぎけるが、周主は趙匡胤に命じ道に要して之を襲はしめ、暉・鳳等を擒にし滁州を占領し、進んで楊・秦・光・舒等の地を領せり。然るに唐の軍は復た秦州を逆襲して之を略しければ、周主は趙匡胤に命じて六合に屯せしめたり。時に唐兵來り攻めけるが、奮戰數刻にして破れぬ。其の時匡胤は大に部下を督勵し、將士にして奮戰せざるものは、之れが笠に刀痕を附け置き、戰終つて後一々其の笠を檢して、刀痕あるものは一々之を捕へて斬罪に處し、其の數數十人に達したり。されば皆な其の威に恐れ敢て死を盡くさざるはなかりき。

程なく周主大梁に還り、兵を留めて壽州を圍めり、時に唐兵は江北諸州を復し、周の守將は皆棄てて去れり。幾何もなく周主復た自ら將として壽に赴きけるが、唐人開城して降る。周主大梁に還り、間もなく又自ら將として濠泗を攻めて之を降し、進んで楚州を攻め、楊泰を取る。既にして唐王李璟使を遣はして悉く江北の地を獻し、周の諱を避けて名を景と改め、帝號を去つて周の正朔を奉じたり。

一一後蜀

後蜀の孟知祥は後唐の四川節度使なり。初め吳の丞相徐溫死し、楊溥、帝と稱して使を唐に遣はせしが、唐受けず、此に於て楚と連和せり。天成三年に荆南の高季興死するや吳は其の子從晦を立て、之に代らしめたり。されど從晦は唐に近くして吳に遠き地理的關係なりければ、唐に罪を謝して貢を納めければ、荆南節度使に任んせられたり。其の翌長興元年に至り、兩川節度使董璋・孟知祥兵を併せて反亂す。此に於てか其の官爵を削り、天雄節度使石敬瑭をして之を討たしめたり。既にして知祥の兵は遂州を陥れ、知祥の軍破れ兵糧盡かざりければ、止むなく營舎を燒きて逃げ歸れり。西川の兵追ひて和州に至り、其の城を陥る。已にして唐王兩州の將吏を遣し、還つて本鎮を論さしむ。孟知祥は董璋に勸むれども聽かず、此に於て遂に怨敵の間柄となる。璋は兵を起してより成都を襲はんとし、先づ漢州を攻めて勝ちたり。知祥も亦兵を發して之を邀へ撃ち、大に破れり。璋は府に還るや部下の爲めに弑せらる、知祥即ち請はれて東川を兼領す。唐王之を聞き供奉官を遣はして詔を賜ふ、知祥詔を受け上表して罪を謝し、之れより又藩と稱せり。然れども彼れは益々驕慢なりき。

一一一 北 漢

北漢の劉崇は後漢の臣なり。周の太祖歿して世宗位に即くや、北漢の世祖は其の計を聞きて大に喜び、兵を遼に請へり。遼は將楊褒を遣はし、一萬餘騎を隨へて來援せしむ。世祖亦三萬人に將として相會し、一方周は世宗自ら軍に將として防ぎたり。北漢の兵は高平に出陣したるが、周の前鋒の爲に擊退さる、周軍之を追撃して後軍と連絡を斷つに至りしが、合戦幾何ならざる中に、周の右軍の將樊噲能逃げて右軍潰れければ、周王は自ら軍兵を指揮し矢石を犯して奮戦し、遂に北漢の兵大敗し、世祖は晝夜兼行北に走り、辛うじて漢陽に入るを得たり。

周王の北漢を征伐するや、北漢の民は皆泣いて劉氏の賦役の重きを説き、周軍に對して食物を提供し、喜び迎へたり。此に於て周主は北漢略奪の志を貫徹せんとして、先づ晉陽を攻めけるが、戦利あらずして引返したり、北漢の世祖は又高平の戦に一敗地に塗みれて以來、憂憤の極疾を發し、國事を其子承鈞に委ねて歿す。承鈞其の後を襲ぎて帝位に即き、孝和帝となる。帝は民を愛撫し政治に極めて忠勤にて遼と結びて周に對

抗したり。

周の世宗逝きて恭帝位に即くや、北漢は遼と兵を合はせて周に入寇す。此に於て周主は趙匡胤に詔を下して之を討たしめたり。然るに征旅の途中に於て、匡胤の軍反旗を掲げ、周主を鄭王となし自ら國號を宋と號して帝位に即けり。之れ即ち宋の太祖にして太祖は使を諸方に遣はして官を加へ爵を進め、遍く郡縣に告げしめければ、北漢も亦兵を引いて還り、遂に宋の天下とはなりぬ。

願れば唐の中葉に當り河朔三鎮の争亂起りてより以來、節度使は自ら位號を僭稱し、軍士之を廢立すること依然として變らず、法を犯す者ありと雖も敢て向ふものあらず、天子を擁立すれば將士皆超遷を得、軍士又賞賜掠奪意の儘にて、藩鎮は非常に跋扈し、上を壓するの弊風は唐・宋の間毫も異なる所なく、時に兵其の形を變せしのみなり

斯の如く軍人勢力を得て、其の將を替へ、其の主君を變へ、規律全く立たずして號令また行はれず。加ふるに藩郡の將吏は皆な武人にして暴利濫殺を恣にし、租税を苛徴

し貨財を掠奪せり。されば民は皆な塗炭の苦に陥りて、開闢以來の一大逆運と呼ばれたり。然るに一代の英主を以て聞わたる宋の太祖は、帝權伸張を策して軍人を鎮壓し、根本的の革新を斷行し、其餘弊を一掃して四海統一の大業を遂げ得たり。

五代の中梁は盜賊より身を起し、唐・晋・漢は胡族より出でたれば、純粹の漢族は頼り周あるのみ。而して宋の之れを承けたるなり。

又十二國の中、吳・前蜀・楚・閩の四者は、宋の勃興以前に既に亡び、又南唐は既に帝號を去りしも尙ほ存在し、宋の太祖即位の當時、尙ほ六僭國存在したり。ひとり藩鎮の獨立するものに李氏の岐あり、劉氏の燕あり、此等を總括すれば、十八國鎮五十七主の交替にて、漢族の極盛は既に一朝の夢と化し、東亞爭衡の局に大變化を生せしめたり。又遼は裔夷を以て諸夏を凌駕し、儼然たる一大帝國を建て、屢々漢族を苦しめたり。

宋は既に帝號を稱し、宇内の統一を圖りたるも、統一の實績を擧ぐるには尙ほ十年の日子を要したり。而して對遼の策は、往々にして遺算あるを免れず。此に於てか子孫後世は常に北顧の憂をなし、次いで游族對ツングス族の交渉は、翻つて蒙古族の勃興に

絶好の機會を與へ、遂に併吞せらるゝに至り、其餘勢の及ぶ所、健馬の鐵蹄は、遠く東部歐羅巴の野を蹂躪し、世界史上他に其の比を見ざる一帝國を建設したり。而して其の國家たるや、假令永續せざりとは云ひながら、其の絶大なる偉績を揚げ、震天動地の大活躍を試むるに至れり。

### 第三章 契丹の患

#### 一 契丹の太祖

周の武王の時肅慎弩矢を獻せしことありしが、其の後二千年を経て南北朝の頃に至り、ツングス族の一種が聚散せるもの相寄つて國を作りて靺鞨と稱せり。此の地は京師の東北六千里に在りて、東は海に至り、西は突厥に接し、南は高麗に境し、北は室韋に隣り、即ち今の滿洲一帯の曠土なり。國內數十部に別れ、各部に酋師ありて或時は高麗に附き又或時は突厥に附屬したるが、黑龍江の附近に在りし黑水靺鞨は最も勁健にして常に隣境に患ひせり。又松花江の附近に在りし粟米靺鞨も強剛の名ありき。

元來契丹は東胡の一種にして、鮮卑の別種なり、漢河の南、黃龍の北に居りて、後魏の頃より自ら契丹と稱し、魏の太和三年には魏に附屬し、唐の貞觀中には又唐に從屬せり。而して唐は之を松漠都督に任じ、李氏の姓を賜りしが窟哥の孫蓋忠に至り、同族の孫萬榮と共に武氏の時に來寇して營州を攻めたり。

蓋忠の死後は萬榮代りて國を治めけるが、突厥・契丹に來襲して其妻子を奪ひ去りければ、萬榮即ち衆を率ゐて突厥に攻め寄せたり。唐は狄仁傑を魏州の刺史となしけるに、萬榮の軍は潰れて部下に殺され、契丹は唐に降りたるが、中には又突厥に降れるもありき。

これより契丹は反覆常なかりしが、玄宗の頃又屢々入寇し安祿山の如きは、時に之を利用して兵を用ひたることあり、唐の衰運に際して、遂に獨立するに及びたり。

契丹は最初八部に分れ、各部に大人ありて其中一人を推して王となし、旗鼓を立て、諸部に號令し、三年に一回交替するの制を取れり。耶律阿保機、王となるに及びて最も剛勇にして奚・室韋・韃靼等皆附屬し、阿保機は其の強を恃みて交替を肯せざりき。

されど七部の強要さるゝに際して之を誦し、請ひて種族を率ゐて古漢城に據る、其の地は地味豊沃にして鹽地の利ある爲め、遂に七部を撃滅し北の方室韋、女眞を犯し、西は突厥の故地を奪ひ、東北の諸夷皆畏服せり。開平元年に至り三十萬を率ゐて雲州を侵し晋王と連結せしが、誓約に背きて梁に従屬せり。これが爲め晋王は契丹を恨むこと甚だし。

其の後貞元二年に至りて阿保機は自ら皇帝と稱し、神冊と改元して百官を置けり、之れ即ち契丹の太祖なり。皇后述律は亦勇決にして權變多く阿保機は衆を御し後は常に其の謀議に與り、嘗ては阿保機の出征中室韋の來襲に遇ひて之を撃退し、其の勇名夷族の間に轟けり。漢人韓延徽の智謀に富めるを知り、之を阿保機に薦めて謀主となせり。延徽即ち勸めて府を開き、城廓を築き、市里を立て、荒田を開墾せしめければ、爾來漢人逃亡するもの極めて尠なく、契丹の諸國を威服するに與つて力ありしなり。

阿保機は晋を攻めて新・幽諸州を侵し、又屢々兵を支那に用ふると同時に、後唐の天成元年には渤海を攻めて、其の扶餘城を陥れ、渤海最後の王溼譔を降し國名を東丹國と

改め、其の長子をして鎮撫せしめたり。其年太祖歿して太宗位に即き、述律皇后主として國事を裁決せり。

契丹は太祖の時室韋・女眞を侵し、西は吐谷渾・黨項の諸部落を略領し、又東渤海を滅しければ、沙漠以東に大領土を有するに至り。晋の天福元年には晋を援けて後唐を滅し、約に依つて幽以下十六州と、毎年帛三十萬匹とを晋より受け、晋をして臣屬の禮を執らしめけり。

然るに後晋の出帝の時に至るや、孫と稱して臣と稱するを耻たりしかば、太宗大に怒り、數々河南・河東に入寇し、更に開運三年には大舉して晋を襲ひたり。晋將杜威は衆を率ゐて軍門に降り、太宗遂に大梁に入りて晋亡びぬ。

これより先き契丹は天福二年に國號を遼と改め、諸種の制度は皆漢土のそれに倣ひて漢人を參用せり。かくて大梁に據るに及びて漢土に君臨せんと稱し、先づ兵を從へて大に掠奪を行ひ、士民の錢帛を徵發するに及び、内外怨憤して始めて遼を患苦し、皆之を放逐せんことを希へる結果、遂に黨族所在に群棲せり。太宗は民心の歸趣せざる

を知り、望を斷ちて北に歸り、遂に疾を得て歿せり。次いで世宗位に即く。

二 遼 起 る

晋の高祖は契丹の力に頼つて國を取りたりければ、契丹に事ふること甚だ篤く、表を奉じて臣と稱し、遼主を謂ふに文皇帝の尊稱を用ひたり。されば遼の使者到る毎に即ち別殿に於て詔勅を受け、歳々金帛三十萬を輸納する外に、吉凶慶弔に際して莫大の贈物をなし、其の使者常に道を斷たざる有様なりき。かくて太后・元帥・太子・諸大臣に至るまで皆夫れ々の贈物をなし、少しく意の如くならざることあれば、來つて之を責讓し、不遜の語多かりき。されば朝野皆耻辱なりと謂ひ合へり。

然るに晋主は之れに事へて毫も倦む處なかりしかば、成德節度使安重榮は遼に臣たるを耻辱なりとし、其の使者來るを見れば、必ず之を罵倒し、或は密かに道に要して之を殺せしことすらありき。

天福六年六月に重榮は遼使を捕へ、驍騎を派して幽州の南境を掠め、上表して吐谷渾等各部の衆を率ゐて歸屬し、黨項等又共に契丹を討たんと欲すと云へり。晋主之を受



けたるが、重榮は強兵を握りて制する能はざりければ、甚だ之を患ひ、即ち劉知遠を北  
京留守となして之を制せしめ、自ら鄴都に赴きて重榮を諭す處ありき。されば重榮は  
是れより愈々心驕り、山南東道節度使安從進と共に謀を議し、其の年十二月遂に反旗  
を擧げたるは既記の如くなり。其の時劉知遠は安重榮の勢力を殺がんに爲めに、其の  
將郭威を遣はして吐谷渾の會長白承福を招納して内地に移し、遼主は使を遣はして迎  
へたり。晋主此れが爲めに憂色あり、遂に疾を得て歿し、出帝位に即く。

出帝即位の始め、大臣表を奉じて哀を契丹に告げんことを議したるが、景延廣は事を  
用ひて書中に孫と稱して臣と稱せず、されば遼主は大に怒り使者を遣はして之れを詰  
問せしめたり。然るに延廣又不遜の語を以て之れに答へたり。此に於てか遼主は晋に  
代つて中國に帝たるの野心勃々たりける折柄、又天福八年九月に晋は遼の使者喬榮を  
捕へ、且つ遼人にして晋境にあるもの、殺害されて、財貨を奪るゝもの頻々たりけれ  
ば、遼主は大に怒りて南して中國を侵すに至れり。時に桑維翰は契丹に謝するの得策  
なるを屢々主張したるが、常に延廣の爲めに遮られき。

晋の開運元年遼は兵を發し、其の前衛は既に貝州に戰勝を擧げたれば、晋主も又自ら  
將として澶州に陣し、劉知遠等をして兵に將として備ふる所あり。其年二月遼兵河を  
渡つて進む、晋は李守貞等を遣はし、道を分ちて撃たしめ、一進一退容易に勝敗の數決  
せず。かゝる間に晋兵進んで其の壘を抜きければ、遼兵大に敗れて溺死する者數千人  
に達し、俘虜となるもの亦數千名を數へたり。其の後三月に至り遼主は又自ら軍に將  
として十萬の兵を率ゐて澶州の城北に出陣し、晋主亦陣を出て、對陣せり。既にして  
戰數刻に及び飛矢空中に鳴りて物凄く、忽ちにして南軍の死傷者數ふべくもあらず、其  
の中遼軍は兵を引きたれば、晋は劉知遠を行營都督に任じて遼に備へたり。

此年遼は復た大擧して晋を侵しけるが、志成らずして引返したり。かくて遼は毎年  
南侵して中國爲めに奔命に疲れ、民は塗炭の苦を嘗め、一方遼も亦人畜いたく死傷して  
國人戰禍を呪ふに至りければ、兩國初めて和を講ずるの志あり。晋主先づ使を派し  
て表を奉じて臣と稱して過を謝す。されど遼主の怒り未だ解けずして、語氣怒りを含  
みし爲め和議破れたり。

三 遼の強大

三年十月晋は杜重威をして兵を率ゐて遼を撃たしめけるが、戦利あらずして還る。此に於て遼主は大舉して晋を侵し、晋の營舎を圍みたり。晋將王清討死し、晋軍の糧食盡きて亦如何ともする能はず乃ち重威は二十萬の兵と共に降下せり。遼主即ち南進して大梁を略したり。

それより遼主は兵を引いて宮に入り、諸門皆な兵を以て守備せしめ、中國の冠を服し、四方の貢獻を受け、酒を縦にし樂を作りて遊興に耽り、又胡騎をして四方より財物を掠奪せしめ、暴政到らざるなかりければ、東西南畿を初め數百里の間殆んど財畜盡きて、老弱道に死するもの頗る多かりき。遼主は又子弟近親を節度刺使となしたるが、皆な政治の何たるかを解せざる者のみなりければ、人に欺かれて慾望漸く甚しきに至れり。既にして盜賊諸方に起り、國內漸く亂れければ、遼主は初めて中國の制し難きを知りて大梁を發す。晋の文武百官數千人と宮女・宦官等數百人之に従ひ、悉く府庫の寶を載せて行く。かくて遼主は臨城に至つて疾を得て歿す、此に於て國人其の腹を剖き、

鹽數斗を入れて載せて北に歸れり。

時に諸臣相謀り、遼主の遺制を宣べて世宗位に即きしが、酒色に荒み、諸酋長を輕蔑して、國內治まらざりき。

これより先き契丹の聖宗が澶淵に宋を屈して歸るや、國勢愈々隆盛にして旭日昇天の有様なりき。而して遼西は幅員千里に及び、且つ大山深谷多かりければ、天嶮に據つて自ら固むるに足り、唐の初めに饒樂都督府を置けるより、此に都を建て、中京と稱したり。宋の大中祥符二年蕭太后歿したるが、此の年高麗の穆宗は康肇に弑せらる。時に聖宗は之れ大逆なりとして、康肇を誅せり。次いで高麗も亦契丹に降りて臣と稱せり。

斯くて契丹は東西二方の患除かれたれば、兵を西に出して甘州を攻め、肅州を破りたり。次いで渤海の地亦契丹に入る。

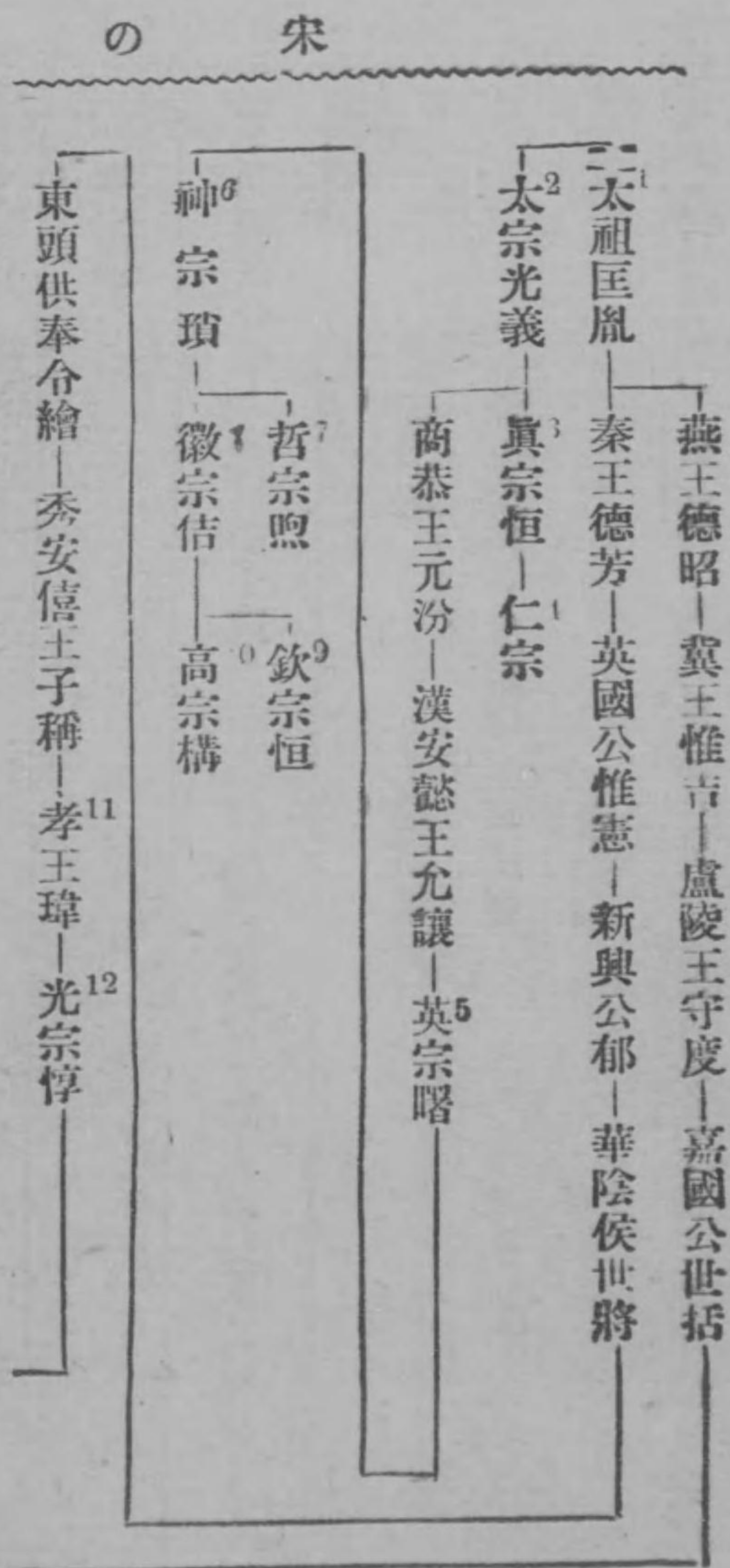
此に於てか契丹の版圖は東は日本海に至り、西は金山即ち天山に連り、北は外蒙古に達し、南は白溝を以て宋の境を壓し、幅員既に萬里に及び、臨潢を上京とし、遼陽を東

京とし、大定を中京とし、雲州大同を西京とし、今の北京を山京として五京備はり、外に六府、百五十六軍城、二百九縣、五十二部族、高麗以下屬國六十、當時東洋の最大強國たり。

# 第十四編 宋朝史

## 第一章 宋の勃興

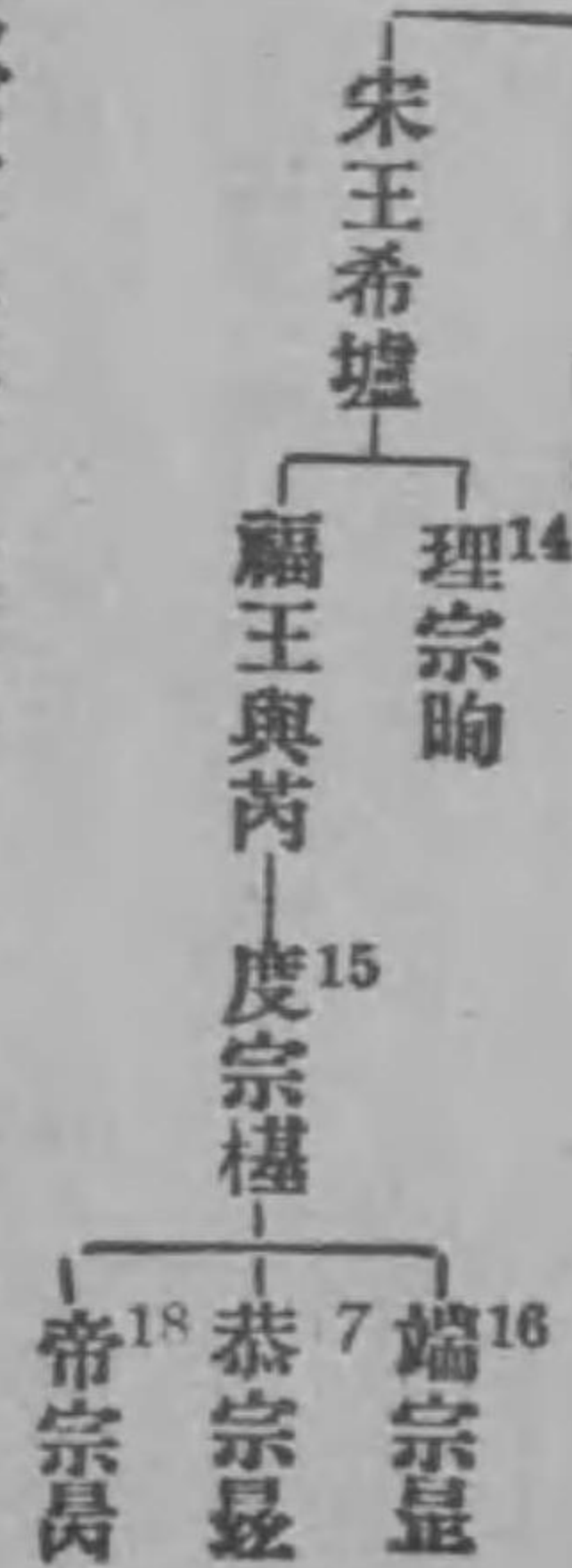
### 一 太祖



寧宗擴<sup>13</sup>

世系

房國公令稼—修武郎子爽—贈大師益國公伯件—贈大師益國公師雅



宋の太祖趙匡胤は後周の宿將にして、世宗に従つて屢々戦功を樹て威望頗る著はれたり。恭帝立ちし頃匡胤は僅かに歸徳の節度使たりしが、時に北漢及び遼が南寇を謀りければ、匡胤は命を奉じて能く之を禦ぎ、河南省開南府の東に當れる陳橋驛に出陣しけるが、軍隊亂を爲し、遂に匡胤を推して主となすに至り、汴に入りて帝位に即けり。而して歸徳は宋州なりければ、國號を宋と改めたり。併し當時天下は未だ全く統一されず、宋は僅かに直隸・山東・河南・湖南・陝西に跨る地を領するのみにして、其の他は

七ヶ國の割據する處なりき。

唐の中葉以降藩鎮の節度使は、兵馬民政の二大權を掌握し、租税を徵收して上供せず五代十二國の興亡、君主亦た部下に擁立されしに依り、其の權力は甚だ軽く、地方は愈々朝廷を蔑視して自衛の道を圖り、軍國權力の中心は全く兵士に歸したり。而して其の君主を存廢する所以は、一に重賞を得んが爲めに外ならざりき。

後唐の明宗は賢君と稱せられたる人物なるが、其の推薦せる趙在禮を滄州節度使となし、皇甫暉を陳州刺史となせり。周の太祖も亦明君の聞に高かりしが、其の推す所の王峻・郭崇を節度使となし、又兵士を賞するには絹錢を以てし、又時には掠奪をも許せりと謂はる。歴代の君主皆斯の如く、宋主が殿前都點檢より一躍して九五の位を得たるもの、亦實に兵士の力に依れるなり。されば流弊は依然として何等變る所なかりき。故に子孫の爲めに謀り長久の基を定めんとせば、自然根柢より此の弊害を一掃せざるべからず。既に兵士より推されて帝位に即き、今又翻つて其の權勢を殺がんとす、英主の明斷に依るに非ざれば決して能はざりし所とす。

太祖位に即くや將相群司は皆周朝の人々を登用せり、只趙普は軍府の舊僚なりしが爲めに、専ら密議に預り、石守信、王審琦等は皆帝の舊友にして戰功ありしが爲めに、禁衛の兵を掌りたり。時に趙普は屢々帝に告げ、彼等は皆な統御の才に非ざれば、其の下を制伏する能はざるべしと。帝悟り或日宴席に於て守信等に諭し、人生は白駒の隙を過ぐるが如し夫れ富貴を欲する所以のものは、多く金錢を積みて自ら多く享樂し、子孫をして貧ならしめざらんが爲めなり。卿等何んぞ兵權を解き去り、出で、大藩の守となり、思ふが儘に田宅を撰び、子孫の爲めに永遠の業を立て、歌兒、舞妓を侍して酒を飲み、以て天壽を全うせざるか、朕は又卿等と約して婚姻をなし、君臣の間猜疑の心を去り、以て彼我安んずることを爲さんと。此に於て兩人厚く謝し、翌日直ちに疾と稱して典兵を罷めんことを請へり。宋主は即ち之れを許し、皆な節度使となせり。

帝は又趙普に問ひ、天下の形勢は唐の末葉より數十年間、帝王凡そ八姓を變へ、戰亂休むことなく、民は皆な塗炭に苦しむ、されば今より國家百年の長計をなさんと欲すと。時に普の答はこれ他なし藩鎮の勢力非常に強大にして、君は弱く臣は強きが故のみ、故に今に於てこれを治めんと欲すれば、宜しく其の權力を奪ひ、其の勢力を殺がざるべからず。さすれば天下自ら安泰なるを得んと。蓋し五代諸侯の強盛なるは、朝廷之を制する能はざるに依るなり。宋主即ち趙普の謀を用ひ、漸く其の權を削り、或は其卒去に因り、或は遷徙、致仕に因り、或は遙に他職を領するに因り、皆な文臣を以て之に代らしめたり。次いで詔して通判を諸州に設け、凡そ軍民の政皆之を統治し、節鎮所領の支郡をして皆な京師に直隸せしめて、自ら事を奏するを得せしめれば、節度使の權初めて輕減せられたり。

太祖は又税制の整理を行ひたり、即ち唐の天寶以來、藩鎮は夫れく多數の兵を屯して重税を賦課せしめ、五代に及びては部曲をして場を掌らしめ、斂を厚くして己れに入らしむることを講じければ、租税の如きも非常に重り行きて、民の苦痛殆んど測り知るべからざるものありき。宋主又趙普の言を聞きて諸州の度支經費以外に金帛は悉く汴都に送らしめ、以て着服することなからしめ、又藩鎮の將缺くる時は、假りに文臣を以て之に當らしめ、又轉運使を置て財務を掌らしめ、節度、防禦、團練、觀察諸使

及び刺史と雖も皆な金穀の籍に預るを得ざることをせり、かくて財利は初めて中央政  
府に歸せり。

是れより先き宋主は殿前侍衛の二司に詔して其の所管の兵を閱し、其の驍勇なる  
を撰びて上軍とせり。かくて諸州の長吏に命じて本道の兵の驍勇なるを撰びて都下に  
送り、以て禁旅の闕を補ひ、又強壯なる卒を撰びて諸道に分送し、以て召募教習せしめ  
其の訓練成るを待つて闕下に送り、復た更戍法を設けて禁旅及び邊僻の城を守らしめ、  
道路を往來して艱苦を習ひ、其勞を平均せしめたり。是れより將は其兵を専らにする  
を得ず、而して士卒亦驕惰に流れず、兵備の完全を期するを得たり。

是れより五代に於ける武斷の弊は漸く革りて、生民蘇生の思をなし、遂に天下一統  
の基を作すに至り。太祖は周の世宗に仕へたる頃より將士を服従せしめ、又世宗が  
軍人專横の權力を除かんとしたる際與つて力あり、而して今又趙普の計を用ひて兵制  
の刷新を謀れるなり。帝は又英斷にして重望ありければ、能く群臣を籠絡して反逆の  
心を起さざらしむるに力め、俸祿の制を設けて厚祿重賞を以て兵士の心を總攬し、横暴

の氣を抑へたるが如きは、蓋し其の手腕巧妙なりと謂はざるべからず。加ふるに時尙  
は外敵の來寇熄まざりければ、兵士をして其の衷心より國家に奉公するの念を起さし  
め、全然茲に積弊を去りたりと雖も、他方には又歲賂を増加する傾あり。従つて國民よ  
り重税を徵收して、遂に政黨の分争となり、内憂外患交に至り、後に南渡の厄起るに  
至る。然れども太祖は稀世の英主にして、趙普は又一代の名臣なり、其の劃策する所着  
々功を奏して、群雄相次いで歸服したり。

太祖は仁孝豁達にして大度あり、陳橋の變に衆より推されて京師に入るに及び、或日  
便殿に坐して鬱々として樂まざるものあり。左右其の何物なるかを問へるに、汝は、天  
子たること容易なりと思ふべけれども決して然らず、偶々快に乗じて一事を指揮すれ  
ば即ち誤る、此の故に樂まざるなりと。嘗て近臣を紫雲樓下に侍せしめて民事を論及  
し、藩侯は慰撫せずとも菽麥を分たすとも、愚下の民は慰撫せざるべからずとて、勉め  
て苛政を避けしめたり。開寶の初め京城及び大内を修理し、殿直の士に厚賞をなし、妄  
りに訴ふる者を斬罪に處したり。帝常に語つて曰はく、後唐の莊帝は英武にして天下

を定めたるが、而かも國を享くこと久しからざるは、之れ二十年間河を挾んで戦争したるが爲めにして、誠に兒戯に均し、朕今士卒を撫養し、賞爵を吞まされど、苟くも我が法を犯せば、只劍あるのみと稱せり。

されば帝の政を執るや専ら民力の涵養に勉め、貢賦を罷め、寢殿には青布を以て葦籬の縁を取り、常に洗ひ晒しの衣を纏ひたり。

晩年に至りては、盛んに書籍を涉獵しけるが、堯舜の世には四凶の罪ありたるが、今日にては近世法網頗る密なるを嘆じて、刑法の改正に力を注ぎ、折杖法を定めて流徒杖、笞の刑を減じ、大辟を犯すものは諸州をして案に録して聞奏せしめ、刑部に附して群覆し、情理深害なるものに非ざれば、努めて寛恤に従ひ、只貪墨の罪を重んじ、又新刑統を頒りて差役法を定め、版籍・戸帖・戸鈔を作りたり。

帝は又人材登用の道を拓き、親ら進士の試験を行ひ、屢々國子監に行幸し、又天下に詔して遺書を求め、又は時政を記し、又は日曆を撰ばしめ、其の制度は頗る條理ありき。宋の文治の美此時より既に花を結べるなり。

然れども太祖の治績は皆趙普の建議に出でたるものなり。普は沈毅にして果斷の性に富み、而かも謀略ありて天下を治むるを己れの任務なりと心得たりき。されば帝も亦いたく普を重用せり。舊相・范質等三人位を避けんことを希ひければ、帝之を許し普を同平章事とせり。然るに雷德驥なるもの普を讒し、講武殿に至りて、普が盛んに收賄をなして第宅を買ひたりと奏せり。帝大に怒り、普は吾が社稷の臣なるを知らざるかとして、讒者の前齒二本を抜かしめたることあり。以て其の信任の厚きを窺ふに足る。

然れども普や宰相たること前後九年にして、政をなすこと頗る専横なり。而かも私怨の爲めに人を誣ひ、死を論ずる場合もあり、又貨物を好みければ、帝次第に疑を挟み、參知政事を置きて普の副たらしめけるが、制を宣せざりしより、故に政事堂に上らず、普も亦内心快かざりければ、乞ふて政を罷めたり。

開寶九年帝洛陽に赴きて先祖の安陵に詣でたり。帝は洛陽に都せんことを欲しけるが、群臣皆之を諫めたり。既にして帝は、又長安に都せんと欲せり。されど晋王光義は

德に在つて險にあらざる旨を奏せり。かくて帝は大梁に歸りしが、其の年十月萬歲殿に崩せり、此に於て皇弟なる晋王光義位に即く、之れ即ち太宗なり。

二七 國平定

是れより先き太祖は周祚を移して建隆と改元するや、周の諸藩鎮は皆服屈したるが、獨り昭義節度使李筠のみ従はず、周の太祖の畫像を壁にかけ、涕泣して止まざりしが、遂に北漢と連絡して兵を擧げ、檄を飛ばして宋主の罪を數へたり。宋主乃ち石守信を遣はし、次いで自ら大軍を率ゐて討伐に向ひ、筠の軍を澤州の南に敗り、次いで州城を包圍せり。此に於て筠は力盡きて火を放ちて城を焼き、自ら火中に投じて死せり、北漢主も亦大に怖れ、兵を引いて還る。次いで荆南を亡ぼして十四州二監六十縣を得、湖南又平定せり。

其の翌年蜀は北漢と約して宋を犯さんとせり、此に於て忠武節度使王全斌を遣はして之を伐たしめたり。全斌は蜀の興州に入り、其の招討使韓保正を擒にせり。蜀人其の精銳を盡くして逆襲し、大敗して潰走せり。

三年正月全斌は降卒の言に従ひ、兵を別つて來蘇の路に赴かしめ、更に自ら大軍を率ゐて川を渡り劍門を陥れたり。是れより先き蜀主孟昶は大に懼れ、金帛を出して兵を募りけるが、劍門既に奪はれたりと聞きて逃げ歸る、乃ち蜀主は謀を左右に問ふ、老将石斌は死力を盡くして固守するに如かざることを説けり。されど蜀主は我が父子は豊衣美食を以て士を養ふこと多年なれば、敵に會ふも敢て東向して一矢を發する能はざるべしと。幾程もなく全斌進軍して魏城に陣す、既にして全斌は風を望んで出で降り、蜀主も亦遂に宋に下り、宋は六十有餘日にして四十五州百九十八縣を得たり。宋は既に湖南、湖北、四川の全土を略し、其の南は直ちに南漢と境を接するに至りたり。南漢は廣州に都して以來、其地理的關係上、南陔に在りしを以て、中原の爭亂より遠ざかり、劉隱の子儼、帝となりしが其弟の子銀位に即くに及び、宦者を任用しければ國政漸く亂る、に至れり。

開寶三年、宋主は潘美をして南漢を討たしめ、美連戰連勝して遂に韶州に次せり。此に於て南漢主は李承渥を以て都督に任じ、象に十數人宛を乗せ、軍容美々しく整へ、



勁弩を以て之を射る。然るに象は或は走り或は跳きて、乗者爲めに墜落しければ、反つて其の軍大敗し、韶州忽ち陥りたり。此に於て南漢主は屢々降参せんとせしが、郭崇岳之れを止めたり。然るに宋軍は大風の夜、陰に乗じて其の柵を焼き、崇岳遂に敗死せり。翌日に至り、美は軍門に降りければ、其の宗室官屬を俘虜として、悉く汴に送れり。かくて宋は六十州二百四十縣を得、南漢は劉隱、廣州に據つて以來、凡そ五主、六十五年にして亡びたり。宋主即ち美に山南東道節度使を加へ、南漢の宦者龔澄樞、李托等を殺し、劉鋹に侯爵を恩賜したり。

又梁末に至り、交州の土豪曲承美は、中國の戦亂に乗じて十二州の地を據有せしが、南漢主は李知順をして承美を攻めて之を捕へ、交址節度使を置けり。乾徳の初め節度使吳昌文死し、内亂起り、璉位に即くの時、南漢亡びしかば、璉は宋に貢をなせり、此に於て宋は璉を靜海軍節度使となし、璉を授けたり。

又南唐は周の世宗に江北の地を略されてより、其の勢力頗る振はず、宋に仕ふるに謹慎をことし、宋に嘉慶吉凶ある毎に必ず人を遣はして貢獻弔賀せしめ、外は畏服を

示して其の實武備を固めたり、南漢の滅亡せるを見て畏るゝこと甚だしく、其の弟從善を遣はして表を宋に上り、國號を去り印文を改めて江南國王としたり。宋主之れを討たんとせしも名目なきに苦しみ、即ち人を遣はして入朝を諭さしめけるが、江南王族と稱して來らず、此に於て開寶七年の秋曹彬・潘美等に命じて之を撃たしめたり。斯くて彬は急に金陵を圍みければ、江南王は人を派して入貢せしめ、師を緩うせんことを請へり。金陵既に包圍さるゝこと十ヶ月に及び、頗る危態に陥り、遂に陥落せり。此に於て宋は十九州百八十縣を得、南唐は李昪僭號して以來三世三十一一年にして亡びたり。

此の戦争に吳越王錢俶は宋を輔けて功あり、開寶九年に至りて俶は其の妻子と共に入朝したれば、帝は邸宅を賜ひて之れに居らしめ、親ら其の邸に幸して宴を俱にし、歡待頗る勉めたり。かくて俶を封じて淮海國王とし、宋は十三州八十六縣を得、南方漸く平定して只北漢を餘せるのみなりき。

北漢は開寶元年に劉鈞死して養子繼恩立ちしが、郭無爲之を弑して其の弟繼元を立

てたり。故に宋は曹彬等に命じて北漢を討ち、次いで親ら出征したるが、遼の景宗賢は新たに立つて北漢を援けたり。太宗立つに及びて帝自ら將として北漢を伐ち、諸軍を督して太原を圍めり、此時漢は外援到らずして城中頗る畏れ、遂に繼元出で、降を乞へり、帝即ち之れを彭城郡公に封じて、宋は十一州四十縣を得たり。かくて北漢は太祖が周の禪を受けてより凡そ二十年、五代の争亂は漸く其の局を結ぶを得たり。

此の時諸の降王には邸宅を賜ひて京師に居らしめ、以て富貴を保たしめ、其の子弟舊臣等には、職を州郡に分ちて兵民の事を掌らしむ。かくて太祖・太宗は度量宏大にして聊かも猜疑する所なく、以て海内を一統せり。

## 第二章 宋遼の戦

### 一、太宗の敗戦

太宗は即位四年にして北漢を挙げ、太祖の遺業を完うし更に大に地を外に拓かんと欲せり。然れども當時宋の四境には皆勁敵の繞れるあり、即ち北には遼あり、南には交



宋遼對抗の形勢

趾あり、西には夏國あり、東には高麗新に國を建つ、遼は五代・唐・周の頃より頻りに中國の患をなしたるが、宋とは

境域相接して最も利害關係深かりき。此に於てか太宗は北漢を降せし後、太平興國四年六月に遂に意を決して遼を伐てり。時に諸將等皆な之に反對したるが、獨り崔翰は之れを賛し、乘すべきは勢なり、失ふべからざるは時なりとし、遼征伐を勧めければ、帝乃ち軍を率ゐて先づ幽州を圍みたり。時に遼は太祖・太宗より世宗・穆宗を経て景宗賢に至り、即位已に十年に及びけるが、宋の征伐軍を迎へて高梁河に陣して戦ふ。時に遼の軍頗る銳く宋は大敗して死者萬餘人に達しければ、宋主は敗軍を引いて歸り、茲に遼との好みは斷絶せり。

其の後間もなく遼は南京留守韓匡嗣及び耶律沙・耶律休格をして鎮州に入寇せしめ周との合戦に敗走せり。此に於て遼の景宗は自ら將として宋を撃ち、瓦橋關を圍みたり。時に耶律休格は精騎を率ゐ、水を渡つて戦ひければ、爲に宋軍大敗し、休格の軍は逃ぐるを追いて莫州に至る。十一月太宗は自ら軍に將として、之を防ぎ、關南の諸將また遼兵を破りたり。かくて宋遼二國は屢々兵を交へ、河北の地之れより戦亂の巻とはなりぬ。

遼既に斯の如く、交趾の南に於ける、夏の西に於ける、又皆な後日の患をなせしものなり。譙州刺史丁部領、交趾の帥となり大勝王と號したるが、其の子璉は宋に貢を納めて交趾郡王に封せられ、璉の後其の弟璠嗣いで立ちしが幼なかりければ、大將黎桓權力を恣にし、黨を樹て、制すべからざるに至る。而して璠を私邸に幽閉し、自ら代つて衆を統べたり。此に於て帝は蘭州訓練使孫全興に兵を興へて討伐に向はしむ。瓦橋關役の年に、交州の行營、賊を白藤江に破りて戦艦二百を獲たり。時に仁實は軍を率ゐて前進し、全興等は進まざりしより、仁實等戦死し、炎暑の爲めに士卒死する者頗る多かりき。後ち淳化四年に至り、黎桓、使を遣はして來貢し、併せて丁璠の讓表を上る。朝廷前敗に懲りて之を許し、桓を以て靜海節度使となし、交趾郡王に封じ、次いで南平王に進めたり。古への南越の地は之れより外區となりて、長く服従せざるに至れり。又夏は唐の定難節度の後にて、以前吐蕃の盛んなる折は、難を避け唐に附き、唐の太宗の時拓跋赤辭なるもの李の姓を賜りて靜邊等の州に居りたり。唐の末に至り拓跋思恭と云ふもの夏州に鎮し、五州の地を統べ、黃巢を討つて功ありき。五代の間は其の

子孫鄂爾多斯の南に據り、定難節度を領し、近傍の諸州を併せて中國に來貢せず、太平興國七年に至り仁福の孫繼捧は、其の一族を率ゐて入朝せり。

朝鮮半島は唐の始めに新羅之れを統一し、文武王の後、神文王を経て聖德王に至り、大に内治の實を擧げ、次いで孝成王・景德王等皆な明德を以て聞け、學術を獎勵し東方の文化漸く振はんとせしが、惠恭王は淫亂にして虐殺を敢てし、遂に弑せられたり。其の後元聖王・哀莊王・憲聖王を経て興德王に至り、其の政稍々稱揚すべきものありしが遂に國運を傾倒するに至れり。王の死後は内亂屢々起り、其の後數代の間は叛賊絶わざりけるが、君臣は共に詩賦管絃の逸樂に耽りて毫も警戒する所なかりければ、上下の腐敗は最も甚だしきに至れり。

斯くて憲康王より定康王を経て眞聖王に至りけるが、女主にして内行更に修まらず、淫亂謂ふに忍びざるものあり。美少年を宮中に入れて之れに要職を授けたる程なりければ、綱紀日々に弛亂して殆んど拾集すべからざるの状態に陥り、時人之を憤慨して路に標榜して譏るものもありき。其の時冤を受けて隱者王巨仁は、獄に下されけるが、巨

仁又大にそれを憤慨し、詩を壁に賦して呪へるに、其の夕一天俄かに掻き曇りて雷鳴轟き雹降りたれば、女主大に怖れをなして之を赦せり。かゝる間に濟賊は四方に起り州郡は貢賦を輸せず、國用は益々窮迫して新羅の衰運日々に迫りて危機に瀕せり。

此の時憲安王の庶子弓裔は、兵を北京(江原道原州)に起して自ら王と稱し、國號を泰封と改稱したるが、佛を信じ過ぎて却つて不徳のこと多く其の妻康氏之を諫めたるに、却つて虐殺されたり、茲に於て王建は其の左右に居るを快とせず。即ち又諸將之を推して王となし、國を高麗と號し天授と改元せり。此時新羅にては眞聖女主既に歿して、景明王位に即きしが、高麗の太祖王建は松嶽に都を定めて、八關の戒を設け、以て民を統治せり。されば新羅は懼れをなし、殆ど對等の禮を用ひたるが、其の後幾何ならずして高麗は、鮮半島の統治權を握るに至り、其の勢ひ漸く盛んなり。

高麗の太祖王建既に國內を統一し、使を遣はして晋主石敬瑭の即位を祝せしめ、又大に佛教を信じ、役分田を定め以て五百年の基を開けり。又太祖の時、遠は使を遣はして贈物をなさしめけるが、太祖は仁義の國にあらずとして其の使者を海道に流したりけ

れば、爾來高麗と遼とは相善からず。

宋は又四境殆んど皆な敵なりければ、先づ自國の爲めに謀り、交趾は遠く嶺外に在り高麗は遙かに遼東以往に在りて、最も憂慮すべきは夏と遼なれども、夏は尙謂ふに足らず、此に於てか東方の諸國に向ひては勉めて之を懷柔し、即ち遼交近攻の策を執り、以て専心一意遼に當らんことを期せり。かくて渤海を誘へども來る者なかりければ、又詔を安定國王に賜ひ、一方女眞も亦使を遣はして來貢せり、然れども其の後女眞は遼を討たんことを請ひしも許さざりし爲め、復た入貢せずして遼に屬するに至れり。斯の如く宋は諸國と離隔し、且つ遼は諸國皆な其の害を蒙り居れども、國勢隆んなりければ容易に之れに當らんとする者なく、爲めに宋は益々悲境に陥れり。

宋の太平興國七年、遼主景宗賢歿して、其の長子梁王隆緒位に即く。之れ聖宗なり。帝時に年僅かに十二なりければ、母蕭氏を尊んで太后となし、國號を大契丹と改めたり。太后政治の道に明達して善と聞かば行はざるはなく、賞罰を明かにしければ、將士能く命を用ひたり。時に夏の李繼遷は漸く強大となり、西人多く歸服したるが、繼遷又

契丹に降り定難節度使となりたり。

其の時太宗は高麗と聯合して契丹を伐ちたるが、契丹の將耶律休格智謀に富みければ、宋は思ふが儘の威力を振ふ能はず、宋の大舉の計既に破れけるが、時に女眞亦叛いて契丹に屬したり。

かくて太祖は國內の政を爲すに専ら心を注ぎければ、未だ外に及ぼすの餘力あらず、而して太宗は能く天下を併定せしが、其の疆外經略は何等の見るべきものなく、隋・唐の初期に比すれば固より及ばざること遠し。

其の後咸平二年に至つて契丹入寇し、都部署康保裔之を防ぎしも敗死しければ、眞宗皇帝は自ら將として之を防ぎたり。景德元年九月に至り、契丹の聖宗は其の母蕭氏を奉じて入寇し、德清軍を陥れ澶州を圍む。既にして和議成立し契丹は兄禮を以て帝に仕へ、兵を引いて歸れり。

其の翌二年正月契丹との講和成立せし廉に依りて大赦を行ひ、河北諸州の壯丁を農に歸らしめ、邊境に詔して境を出で、掠奪することなからしめ、契丹の牛馬を得れば之

れを放ち、互に市場を開放しければ、河北の民漸く業に安んずるを得たり。斯くて四百餘州の治化は、正に其の極に達し、唐の中世安史の亂より五代十國の世を経たる大動亂は、茲に一旦其の局を結びて、太平の光澤に浴するを得たり。

二 仁宗の治

次いで仁宗位に即くや、劉太后は朝に臨みて軍國の政を掌りたるが、號令嚴明にして恩威初めて海内に輝けり。即位の初め天書を除き學殿を給し、六科を置いて京朝官の被擧及び應選の者を待ち、武擧を置いて方略智勇の士を待ちたれば、眞宗の晩年に於ける弊政は漸く改められたり。

時に泰平既に年久しく、兵籍益々廣くして吏員益々衆く、上下財に苦しみたれば、三司使は無用の浮費を省かんことを請ふ。此に於て帝は其言を容れ乃ち計置司を立て張士遜、呂夷簡、魯宗道を以て之を領せしめ、主として茶法の利害を考へたり。

宋の天下は開闢以來内外頗る多事なりき、太祖太宗より眞宗、仁宗に至るまで歴代の帝王は皆な英明の資を以て賢相良將に任じ、以て廢唐五代の宿弊を一掃せしと雖も、

専心之れに力を傾注したる結果、國力の富強を計るの暇なく、故に南は交趾に北は契丹に西は夏に對外の政策は悉く皆な失敗を重ね、結局歲弊の増加とはなれり。斯くて内には俸祿の多きあり、國庫の支出は年と共に増加し、財政の困乏愈々甚だしかりき。されば唯一の政策は重税を國民に課するにありて、政治上の紛議は常に絶わす。

是れより先き軍隊の勢力を殺ぎたる結果、主として民間の輿論を重んじ、以て下情を通ずるの風を生じたり。されば宋の一代を通覽するに、天下は決して遊惰に流れず、善く政治に盡瘁し、宰臣の進退は其の意見の許否に依りて決し、民間の學者亦政理に通じ、適切なる議論をなせしもの少なからず。されど専制政治を以て國を建つるもの、其の究極は天子一人の意見のみ。此に於て政論の自由を奨励せし結果は、自から黨派の別を生じて忿怨解くべくもあらず、其の争鬪激しきに當りて、却つて外患を忘れて愈々國運を危態に陥れんとせり。慶曆一度禍を開いてより、後は朋黨の抗爭歴代絶わす、かくして社稷南渡の厄は早くも既に萌せり。

仁宗の生母は李氏にして、劉太后之を子とし、因つて立つを得たり。太后朝に在つて

政を聽きし間は、李氏は黙々として先朝嬪御の中に在りけるが、人亦后を畏れて敢て言ふ者なかりき。又太后は帝を愛すること殆んど實子の如く、帝も亦孝養至らざるなかりき。かくて太后は朝に在ること十一年、政は宮闈に出でしと雖も、號令嚴明にして恩威天下に加はり、左右近臣と雖も、毫も假借する所なく、内の賜與凡て節ありき。かくて太后崩じければ帝始めて政を親ら視たり。其の當初は宰相の交迭頗る頻繁なりき。而して帝は天下の弊政を革めんと欲し、諫官の員を増し、歐陽修、王素等を以て智諫院とし、余靖を右直言となす、次いで韓琦、范仲淹を召し還して樞密副使となしたり。其の時呂夷簡は既に罷めければ、范仲淹は參知政事に遷り、富弼は樞密副使となれり。時に帝は銳意内治を求め、仲淹等を拔擢して進見する毎に必ず太平を以て之を責め、天章閣を開きて筆札を給せり。此に於て范仲淹等恐懼して十事を列表せり。即ち其の一は黜陟を明かにし、二には僥倖を抑へ、三には貢舉を精密にし、四には官長を擇び、五には公田を均うし、六には農桑を厚うし、七には武備を修め、八には徭役を減じ、九には恩信を守り、十には命令を重んぜよと。帝乃ち信用して悉く其の説を用ひたるが、只武備府兵を復せんと欲するの一説は、宰相不可とせり。

仲淹は才文武を兼ねて大節あり、常に曰く、士は天下の憂に先立つて憂ひ天下の樂に後れて樂しむべしと。此に於て弼と共に日夜弊政の改革に力を注ぎ、先づ磨勘法を立て、朝官より郎中少卿に至るまで、清望官五人の保任を待つて始めて遷るを得せしめ、又蔭子法を更立したり。

仲淹は又天トの州縣に皆學校を建て、考試採用の道を講じけるが、其の爲す所規模徒らに濶大にして衆心爲めに喜ばず、爲めに仲淹等も自ら安んぜざりしが、適々契丹が夏を討つと聞き、遂に請ふて仲淹は陝西河東宣撫使となり、富弼は河北宣撫使となる。其の後文彦博老いて官を退き、幹琦宰相となり、富弼は母の喪を以て位を去りて曾光亮宰相となり、歐陽修は參政となる。かくて琦は首相の椅子に座し、法令典故は公亮に問ひ、文學のことは修に問ひ、三人協力して政を輔佐し、百官法を奉じて理に従ひ、朝廷治を稱せり。かくて仁宗は在位四十二年にして恭儉民を愛し、國內泰平にして事少く、名臣を得ること多き實に古今に冠絶せり。然れども吏治徒らに懦弱に流れて兵

備振はず宋の威徳も遂に漢・唐の盛時に及ぶ能はざりき。仁宗は子なかりければ、太宗の曾孫宗實を養うて皇子となし、崩するに及びて位に即く、英宗即ち是れなり。

### 第三章 宋、西夏の關係

#### 一 西夏の入寇

仁宗は即位の初めより財政の整理を勵行せんとしたるが、朝令暮改にして遂に其の効を見ざりき。其の間眞宗の遠に於けると同じく屢々夏の爲に破れたり。時に趙德明は其の子元昊をして甘州を襲うて之を取らしめ、明道元年宋は明德を夏王に封せり。されど幾程もなく徳明卒しければ、太子尙書令兼中書令を贈り元昊に三使を授け西平王に封じたり。其時契丹も亦使を遣はして元昊を夏國王に封じたり。

是れより先き元昊は、父を諫めて宋の臣となることを思ひ止まらしめたり。かくて元昊判を襲ぐや、中國に倣ふて文武の班を置き、蕃漢の學を樹て中書令宰相樞密使より以下皆分つて蕃人に命じて之を爲さしめ、衣冠の彩色を以て貴賤庶士の別をなし、

兵を擧ぐる毎に必ず部長を率ゐたり。景祐二年衆を率ゐて環慶に寇せしも敗れ、次いで猫牛城を攻めしも、容易に降らざりし爲め詐つて和を講じ、門戸を開きたるに乗じて殺戮を恣にし、續いて諸城に寇せしも却つて大敗せり。時に士卒河に溺れて死する者甚だ多かりけるが、元昊は毫も屈せず、其の翌三年附近の土地を領有し、興慶府にありて河に據り山に依りて堅固の備をなし、大慶と改元して十六司を置き、以て庶務を統べしめ、又十二監軍司を置きて會長に委ねて分統せしめければ、其の軍兵實に五十萬に達したり。かくて出兵せんとすれば銀牌を與へて部長を召し、自ら蕃書を製したり。かくて遂に自ら大夏皇帝と號せり、是れ夏の景宗なり。此に於て景宗は書を宋に贈りて隣好の宜を結ばんことを請ひければ、仁宗大に怒りて其の官爵を削り、國交遂に斷絶せり。

康定元年元昊は延州に入寇し、邊將劉平及び石元孫は戰つて討死せり。此に於て夏竦を陝西經略安撫使となし韓琦・范仲淹之れが副となりたり。かくて元昊は三川の諸砦に寇し、渭州に寇したれば、韓琦・范仲淹等は皆な貶せられたり。元昊は又更に豊州



を陥れたり。

此時契丹は聖宗の後に興宋を経て仁宗位に在りしが、兵頗る強く、國富は宋に及ばざること遠しと雖も、其の武力は甚だ盛んなりき。而して澶淵の盟をなせし後は、兩國久しく兵を動かさざりしが、興宗は元より南侵の志ありたれば、宋が夏の入寇に際して、周の世宗の爲めに略復せられし瓦橋以南十縣の地を取らんと欲し、使を遣はして書を送り故、地を復し師を興して夏を伐たんとせり。されど仁宗は土地を興ふることを欲せざりければ、毎年賂を増し又は婚を結んで和を講せんと欲し、使を送りて和戰の利害關係を反覆力説し、祖宗の爲めに國を守るものなれば、土地は妄りに興ふること能はず。されど戰を交へ兩國の赤子を殺すに忍びざれば、止むなく己を屈して幣を増し、以て土地に代へんのみ然るに飽くまで土地を得んとならば之れ即ち盟を敗るものにて、爲めに戰起るも其の罪は我れに非ずと。此に於て歳々銀絹各十萬匹兩を増し、是れより修交元の如くなれり。

是れより先き元昊は鎮戎軍に寇し、副總管葛懷敏防ぎ戰ひて敗死したり。かくて元昊は屢々戰勝の好果を修めしと雖も、戰ふ毎に死する者頗る多く、加ふるに財力伴はずして國中不如意に陥りければ、謠を作つて怨めり。此に於て元昊は講和の策を定めたり。

仁宗も亦兵を西邊に用ふること年久くして、既に戰に倦みけるが時偶々契丹の徒が元昊の歸歎せんことを通じければ、密かに詔を發して之を召せり。慶曆四年に至つて和初めて成り父子の禮を結ぶ。其の後四年を経て元昊卒して寧宗位に即く。時に契丹は宋を脅して歲幣を増し、又西夏を制せり。至和二年に至り興宗は秋山に入りて疾を得、翌日卒し、長子道宗位に即く。此時に當りツングス族の女眞は新に興りて疾を振はず、宋の運命も亦茲に傾きて悲運これより甚だしきに至らんとはするなり。

### 第四章 宋の中世

#### 一 王安石の改革

神宗の代は實に宋の世を通じて最も政局轉換の時期なりき。此年西夏の英宗没し

て、其の子惠宗位に即きけるが、之れより先き契丹は國號を復して遼と稱せり。  
惠宗は年幼くして位に即きしが、夙に雄志を抱きて大に四夷を拂ひ、祖先の遺烈を恢  
復せんとの志を抱き、即ち兵を養ひ武を揮ふは、先づ財政を豊にせざるべからずと  
し、顧みて朝臣を通覽しけるが、何れも舊慣に囚はれて其の事に當るべきの適材なきに  
苦しめり。



王安石

時偶々帝は安石の名を聞く。英宗の世  
屢々安石を召せども出仕せず、而して帝  
の代に至りても亦召に應せず、此に於て  
帝は輔臣に向ひ、安石は先朝の時より  
如何に召せども應せざるは不恭なり、果  
たして病めるにやと問へり。時に曾公亮  
は安石が眞に輔弼の大任を負ふに至るべ  
き大材なるを稱へけるが、參政吳奎は安

石を排斥し、彼れを用ふれば必ず綱紀を紊さんと謂へり。此に於て帝は吳奎の言に耳  
を籍さず、曾公亮の言を容れて安石を用ふることとし、又韓琦の勸めに依りて翰林學士  
となし、遂に王安石を召し出せり。

熙寧元年安石は朝に入つて帝に調し、治を爲すには何より先きにすべきかとの勸問  
を受けたり。安石は即座に術を擇ぶを先きとすべしと答へたるに、帝は又唐の太宗は  
如何にやと問へり。然るに安石は堯舜を法とすべく、何ぞ太宗を以て爲さんや、堯舜  
の道は極めて簡にして煩ならず、要を得て迂ならず、至易にして難ならず、只末世の學  
者は通曉する能はざるのみと答へたり。一日講席終りて群臣退くや、帝は安石を留め  
て對話を重ね、唐の太宗は魏徵を得、漢の昭烈は諸葛亮を得、然る後に初めて爲す所あ  
りたり。二子は誠に不世出の人傑なりと。其の時安石はそれに答へ、陛下まことに能  
く堯舜たらば、敢て二子の如き云ふに足らんや、天下の道は大にして人の能く治を助  
くべきものなきを思ふるなり、陛下術を擇ぶこと未だ明かならず、誠を推すこと未だ至  
らず、將に小人の蔽ふ所とならんと。既にして安石宰相となる。

宋は建國以來篤く功臣の族門子弟を優遇し、加ふるに北遼西夏に對する歲幣年毎に加はりて、内外の歳費多かりければ、財政最も困乏を告げしが、前代の諸帝は皆之れを憂ひ、其の救済方法に就きて焦慮せしも、その効なかりき。安石は時人の爲す所を見て流俗なりと斥け、別に非常を創建し前代を突過せんと欲したり。神宗即ち此れを容れたり。元來安石は古を好みて事を論するに多く周官を引いて據としたり。乃ち建言して曰く、周には泉府の官を置きて兼併を制し、貧乏を救済し、天下の財を變通せり。又人生は民と利を争ふべからずと、今財を利せんと欲せば、宜しく泉府の法を修め以て利權を收むべしと。此に於て制置三司條合司を立て、邦計を経畫することを掌り、舊法を變じて以て天下の利を變せんことを議せり。是れより先き呂惠卿は任滿ちて都に歸りけるが、安石と經義を論するに及びて、意見合致せしかば、遂に修交を結びたり。帝又いたく呂惠卿の賢明なること、儒者と雖も及ばずとなし、先王の道を學んで能く用ふるものは、獨り惠卿あるのみとし、寵愛斜めならず。遂に惠卿及び蘇轍を檢詳文字となし、事大小となく悉く安石は惠卿と謀り、其の建請する所の章奏は、皆な惠卿の筆に成

欠

# 欠

はんことを願ふもの、聽すに皆な監牧の見馬を以てこれに給し、或は官其の價を與へて自ら買はしめ、毎年一度其の地の肥瘠を調査し、死病者は補償する法なり。

以上の法は必ずしも皆な新法と云ふを得ず、中には従來行ひ來りしもありき。又急に之れを一時に行ひたる譯にもあらず、熟慮したる後、經驗に徴して良しと認めたる上にて、始めて行ひたるなり。併し此の新法の精神は、概して民利と云ふよりは、先づ官府の庫を富ましむるに在りければ、下僚の官吏は専心上官に媚びて收斂を事としければ、政府部内にも民間にも新法に對する非難の聲を放つもの多く、遂に新舊兩法黨の紛争を來すに至れり。

之れより先き王安石の新法なるもの漸く其の端を啓くや、青苗法は最も其害多く、祖法に違ひ、民情に背くの故を以て、上下共に便利なりと認めず、怨議の聲漸く起るに至れり。始め參知政事唐介は、政府に在りて王安石と屢々議論を闘はしけるが、帝常に玄石の説を主としたりければ、介は其の憤に耐わす病を得て没し、又富弼は議論合はずして病と稱し、其の他呂誨、范純仁、劉琦、蘇轍等皆な新法を非議して官を退き、陳舛之も

亦相となるに及んで漸く安石と意見の衝突を見るに至れり。

これより先き、呂公著は寺院中に在り、竊かに奏して天子軒に臨んで士を策し、而かも詩賦を用ゆる所以のものは、即ち賢を擧げ、治を求むるの意に非ず、請ふ宸衷より出で、以て治道を計られよと。此に於て熙寧三年帝は集英殿に出御して進士の試験をなし、葉祖洽以下三百人及第せり。其の時祖洽の策は祖宗因循の政多く陛下即位以來之れを改革するにありき。蘇軾等之を退けんとしたるが、呂惠卿は第一位に之を拔擢したり。されば軾は其の説を非難し、祖洽は祖宗を黜けて時君に媚びる者なりいかでか風教を矯すを得べきかと。即ち進士策に擬答して是れを献せり。帝之れを王安石に示せるに、安石は軾の才や甚だ高し、されど學ぶ所は正しからずと黜けたり。此に於て軾は其の後數萬言の書を上りて極論したる結果、遂に貶せられたり。

かくて安石は惠卿を薦めて崇政傳説書となし、又韓絳に命じて制置三司條例たらしめたり。越えて三年六月に至り河北安撫使韓琦は、表を上りて青苗法を罷められんことを奏請せり。時に安石は疾と稱して朝に出でず且去らんことを請へり。此に於て帝

は惠卿をして安石を論さしめて之を留めたり。時に安石は謝罪して且つ曰く、中外の大臣は朋黨を結びて、先王の道を破り、以て陛下を沮まんと欲す、爲めに世論紛々たるなりと。帝乃ち然りとなしければ、安石は之れより新法を視ること益々甚だしきに至り、一方琦等は安石が妄りに周禮を引いて上聽を惑はすものなりと論せり。

次いで呂陶、孔文仲は、新法に反對して皆な罷め、翰林學士范鎮官に仕へたり。司馬光は素と安石と親しき間柄なりけるが、新法を行ふに際し書を安石に贈りて諫めたり。然るに安石は却つて之れを忌む。帝は又司馬光を樞密副使に擧げんとせしが、光は新法の有害なることを反覆して力説し、以て固辭して受けず。又韓琦は遂に官を解かれ、知審官院孫覺、御史中丞呂公著等皆な排斥せられ、趙鼎も亦外に逐はれ名士の排斥せられしもの頗る多かりき。斯くて安石の味方なる韓絳は參知政事となり、安石門下の李定は、秀州判官より京に召されて監察御史裏行となりたり。かくの如く帝は安石をのみ信じて、新法の便なりと謂ふ者は之を拔擢して重く用ゐ、又高位高官の士と雖も、新法に對して不便なりと謂はざる皆な之れを罷免せり。宋敏求、蘇頌、李大臨、行程顥、石正

言。李常等は新法を非議して皆な罷められたり。

而して前朝の老臣中歐陽修は、文名一世に高く、風節を以て自ら持し、青州の守となるが、上疏して青苗錢を散するを止められんことを請へり。其の爲めに蔡州の知に貶され、富弼も亦亳州より汝州の知に移されたり。其の他新法を論議したる廉にて貶黜されし名士其の數を知らず、罪に問はれしものも少なからず、京城には選卒を置きて時政を諷るゝものを巡察せしめたり。

次いで安石は制置條例司を中書に移し、韓絳をして之れを掌らしめ、又青苗錢免役、農田水利等の法は、司農寺に附屬せしめ、呂惠卿をして之れを掌らしめたり。然るに惠卿父の喪に遭ひて辭職しければ、安石は曾布をして之れに代らしめたり。かくて新法布かれてより茲に一年、朝臣其の人を屢々代へければ、其の争論の劇烈なる、思ひ半ばに過ぐるものあらん。

又安石はかくして世の非難攻撃に反抗しつゝ、新法の維持勵行に努め、一層其れを固むるのみならず、更に前記の如き諸路更戍、保甲の法を勵行せり。始め太祖は五代の弊

に鑑みて趙普の策を用ひ、兵制を定め、以て天子の衛兵は京師を守り、更番、邊を守るものを禁軍と云ひ、諸州の鎮兵以て役使に分給するものを、廂軍と云ひ、又戸籍に選びて處在の防守をなすものを郷軍と云ひ、外に蕃軍あり、此等諸路の軍更戍するにあり。

かくて安石は政を視ること前後六年、其の間法度を更め、邊境を開き、老成の正士廢黜殆んど盡き、天下の怨恨を買ひけるが、一方帝の信任は愈々大なるものありき。時に太皇太后は帝に告げ、祖宗の法度は之れを輕々に附すべからざるなり、今民間青苗法に苦しめば、宜しく止むべきなり。安石は誠に才學あれど、怨むもの益々多し、今民を利せんとして却つて民を苦しましむるは、之れ法の精神に非ず。宜しく暫く安石を外に出すべしと説き、次いで流涕して國を亂るものは安石なりと謂ひければ、帝漸くにして疑を挾むに至れり。かくて鄭俠重用せらるゝに及び、安石は自ら安んぜずして位を去らんことを求めたれば、帝は觀文殿大學士として江甯府の知事となしたり。

幾何もなくして安石再び用ひられ、宰臣の更迭頻々として起り、政局の轉變此の時より甚だしきはなし。安石の新法は必ずしも古に拘泥して今に通せざるにはあらざりき

青苗・募役・市場の諸法は、富國の策として、保甲・保馬の諸法は是れ皆な強兵の道なりき。かくして安石は民を困窮より救ひ、團結を固めて民兵の制を確立し、内には財力を養ひ、外には國威を振はんとするに在り。然れども其の施行の急にして、且つ其の吏員に人を得ざりし結果は、其の法の精神を解知せしむるに至らず、加之民は皆な其の利を奪はるゝことを喜ばず、老成の臣は又其の古法に違ふを難じ、爲めに新法の行はるゝに至らざりしは惜むべき事なりき。

### 二 新法黨と保守黨

宋の代には政府に新法黨と保守黨との二黨派ありて、互に援引して他を排斥するこゝとに努めたるは、王安石の新法出でたるが爲めのみにあらずして、慶曆の黨議の如き、既に芽を萌せるものと謂ふ可きなり。而して此の黨争の最も激しくして、且つ又最も長く、遂に宋朝をして社稷を傾けしめしもの、之れ即ち新舊兩法黨の紛争なりき。新法行はれて以來、新舊兩法黨の盛衰に四變あり。即ち元祐の更化、紹聖の紹述、建中靖國の復舊徽宗の紹述是れなり。

### (一) 元祐の更化

元豐八年に神宗崩じて、太子煦位に即く之れ即ち哲宗なり、帝年僅かに十歳なりければ、皇太后高氏朝に臨みて、政を聴けり。先づ京城を修むること、軍器を製作することを止め、近侍の最も無狀なるものを出して中外に戒め、又苛斂なからしめ、民間の保甲保馬を寛やかにし、又司馬光を任用し、呂公著と共に政を輔けしめたり。司馬光は先きに新法を喜ばず、王安石と議合はずして、洛陽に退居せしが、洛に在ること十五年、天下以て眞宰相となし、田夫野人も皆な司馬相公と號し、婦人女子に至るまで其の名を知らざる者はなかりき。

神宗の崩せし時司馬光は入臨せんとせしが、嫌を避けて入朝せず、其の時程顥は洛陽に在りて光に行かんことを勧めたれば、是れに従ひて行く。時に衛兵等光を見て、皆な手を額に當て、是れ司馬相公なりと、到る所民は道を遮りて集り來りたれば、司馬光の馬は爲めに進むを得ず。かくて公に勸めて洛陽に歸ることなく、留まりて天子に相となり、以て百姓を活かせと迫られたり。彼が如何に天下の信望を荷へるかを知らざりきなり。

司馬光は相となりし時、保甲・方田・保馬の法は既に罷めしも、青苗免役の法と、西戎の事とは未だ存せしなり。而して光は病を得ければ、害未だ除かれざるに我れ死すとも瞑目せざるべしと嘆せり。然れども遼人は其の邊吏を戒めて、宋は司馬光を相となせり、軽々しく事を生じ、邊隙を開く勿れと。其の名外國にも轟けるを知るべきなり。かくて光は遂に青苗免役の二法をも罷めたれば、全く新法は除かるゝに至れるなり。王安石は、朝廷が其の法を變ずるを聞く毎に、不快に感じ居たりけるが、助役を罷むるを聞くに及び、愕然として聲色を失し、遂に天祐元年を以て怨を懷いて歿したり。司馬光は呂公著と心を併せ、蔡確・章惇・韓維等を斥け、文彦博・程頤等を進めて、太皇太后を輔けて善政を布きぬ。是れ即ち元祐の更化にして、實に新舊兩法黨争の第一變たるなり。

斯くて司馬光の宰相となるや、天子・太后共に己を虚しうして以て光に政を聽きたれば、光は身を以て社稷に殉せんと欲し、庶務を自らして晝夜の別なく、友人よりは心身の休養を勧められけるも、光は死即ち生命なりとして肯かず、益々力を盡くしけるが

庶政甚だ成らざるに先だち任八ヶ月にして病歿せり。

司馬光の死を聞くと、太后の落膽一方ならず、即ち慟哭して帝と俱に喪に臨み、太師・温國公を贈り、京師の民は皆市を罷めて往きて弔ひ、貧民と雖も、衣を賣りて香奠を致したるのみならず、又喪に哭すること私親に於けるが如く、皆な像を畫して以て祀りたりと云ふ。

當時呂公著は獨り國に當り、群賢皆な朝に在りて、類を率ゐて従はざるはなく、遂には洛黨・蜀黨・朔黨の語あり。洛黨は程頤を以て首となし、朱光庭・賈易等之れに屬し、蜀黨は蘇軾を首領として、呂陶等之れに屬し、朔黨は劉摯・王巖叟等を首領として、之を輔くる者頗る多かりき。

又舊法黨は首領司馬光を失ひて分裂せる機に乗じ、新法黨は散地に退休したれば、怨骨髄に入り、窃かに間隙を窺ひ居たり。然るに舊法黨は之れを悟らず、各黨互に比をなして二派に別れて相争ひ、舊法黨の危機將に瀕せるの時、元祐七年太皇太后高氏は崩せらる。后は朝政を視ること九ヶ年、清明にして内外を平定し、政事を力行し、外家私



恩を絶したれば、世人之れを女中堯舜となせり。

(二) 聖の紹述 太后の崩後は帝親ら政を掌りたるが、内外爲めに恟々として畏懼し、敢て言を發する者なかりき。時に范祖禹は、小人が間に乘じて政を害せんことを慮り、蘇軾と連名にて上書したるが用ひられず、内侍劉瑗等十人却て職に復せり。范祖禹更に之を諫めたれど聽かれざりき。是れより章惇・呂惠卿等の新法黨は、漸く仕途に進みて舊法黨は漸次退けられたり。かくて蔡京等の徒用ひられて新法を復し、紹聖元年司馬光等先朝の法を變更して道を拓き、理に逆へりとして、光と呂公著の塚を發きて棺を斷り、屍を曝らさんとの議ありしも、盛徳の世に行ふべき事にあらざるとして之れを止め、兩人の贈諡を奪ひ、建立されある碑を倒し、又王巖叟の贈官を奪ひ、且つ呂大防・劉摯・蘇軾等の官を貶したり。此の政局の變を名附けて紹聖の紹述と云ふ。之れ實に新舊法黨争の第二變なり。

(三) 建中靖國の復舊 哲宗は元符三年を以て崩じ、弟惲立つて位に即く。之れ即ち徽宗なり。時に太后再氏は朝に在りて政を聽けり。此に於てか章惇等退きて、韓忠彦

曾布等進み、文彦博・司馬光・呂公著・呂大防・劉摯等三十三人の官を追復し、元祐・紹聖共に失あれば、大公至正を以て朋黨を消釋せんとて、年號を改めて建中靖國と呼べ



り。中丞趙挺は之れを諷して、元祐諸臣を排撃せんとせり。時に供奉官童貫は、性巧媚にして能く人主の微旨を計り、事に先ちて順承せしかば、寵遇斜めならず。かくて幹忠

彦は罷められ、復た司馬光・文彦博等四十四人の官を追貶せられ、元祐、元符黨人の籍を作りぬ。幾何もなく曾布は蔡京と隙を生じければ、事を議するに當りて意見合はず、曾布は罷められ蔡京代りて宰相となる。かくて漸く新法を復し、州縣をして黨人の碑を建てしめ、蔡京は自ら姦黨と書したる大碑を作り、王安石を以て孔子に配比し、黨人子弟をして闕下に至るを得ざらしめき。是れを新舊兩法の第四黨争となす。

### 三 姦黨の碑

蔡京は逐臣より身を起して、翰林學士となる。而して既に一旦志を得るや、天下何れも目を聳てたり。かくて蔡京は陰に紹述の辭柄に托して天下を箝制し、熙寧條例司の故事を用ひ、都省に講議司を置きて自ら提擧となり、熙寧已行の法度及び神宗が爲さんと欲して其の暇あらざりしものを講義し、其の黨派に屬する吳居厚・王漢之等十餘人を僚屬となして、政の大なるものを取扱はしめ、又宗室・冗官・國用・商旅・鹽澤・賦調・尹牧の如きは、一事毎に三人を以て之れに當らしめ、施設の大方針は皆な是れより出づることとし、法制屢々變じて常なかりき。

時に元祐、元符の末、群賢貶竄して死徙せしもの略ぼ盡きたり。されど蔡京尙ほ是れにて満足せず、更に上官・餘宦及び内官・武臣凡て百二十人の罪狀を羅列して姦黨と稱し、御書を請ふて石を端門に刻み、又元符の末に上書せし人を籍し、正邪各三黨に別ち、鍾世美以下四十一人を正黨として悉く旌擢を加へ、鄧考甫以下五百餘人を邪黨となしたり。次いで又元祐皇后孟氏を廢し、又幹忠彦の官を貶し、豐稷・陳瓘等を遠州に貶し、黨人の子弟に詔して闕下に至るを得ざらしめたり。かくて司・光等、景靈宮の繪像を毀ち、范祖禹の唐鑑、三蘇・黃秦等の文集を毀ち、次いで州縣をして姦黨の碑を建てしめ、三年六月熙寧・元豐の功臣を顯謨閣に圖せしめ、辟雍初めて成るや、王安石を以て孔子に配享せり。王安石新法を創めてより茲に至るまで三世凡そ三十六年間、其の間幼主位に在り、太后常に賢にして政を聽く間は舊政に復し、正人位に在り、天子政を親ら視るに至れば年少氣銳の者と雖も、新法を用ひて姦邪と争ひ進めり。之れを一面より觀れば、保守と進取兩黨の衝突なれども、惜哉新法黨は皆な私利を營むに孜孜たる小人のみにて、意を國の興廢の爲めに注ぐもの絶わてなかりき。かくて朝廷は黨禍

に疲れて軍國の事に暇あらず、されば邊境は此の隙に乗じて起り、遂に後年南渡の止むなきに至れるなり。

### 第五章 金の興起

#### 一 女真起る

金は即ち女真にて黒水靺鞨なり。其の同種族なる粟末靺鞨が渤海國を建てし時、之れに附屬したるが、後ち二大部に別れ、松花江の南西のものは熟女真と云ひ、混同江の東に居るものは生女真と云ひ、前者は唐の勃興に際して之れに屬し、後者は半屬の姿なりき。

又函普と呼ぶものありて、高麗より來りて生女真の完顔部に居り、凡そ六傳して烏古廼に至り、稍々諸部を役屬せしに、偶々遼の五國の蒲靺部節度使拔乙門と云ふもの遼に叛しければ、烏古廼之れを捕へて遼に獻じ、遼より生女真部の節度使とされ、始めて官屬を得て紀綱漸次立つに至れり。

而して此の部内には、元來鐵なかりし爲め、隣國より甲冑を賣り廻る者ありければ、高價を以て之れを購ひ、鐵を得ること既に多く、因つて弓矢を修め、器械を備へ、兵勢稍々奮ひて附屬せんと請ふもの多かりき。宋の神宗熙寧七年に、五國沒撻部の謝野復た遼に叛し烏古廼之れを伐ち、謝野敗走しければ、自ら其の功を陳べんとて行きて來流水に至りけるが、疾を得て死し、其の子効里鉢後を嗣げり。効里鉢は嚴重にして智謀に富み、戰ふ毎に未だ常に甲を被らず、位を襲ぎし當初は内外潰叛せしが、彼は敗に依りて功を爲し、弱を變じて強となし、遂に散達等を破り、基業初めて成り、官屬を建て、諸部を統べ、其の長官を勃極烈と稱せり。

哲宗の元祐七年効里鉢疾篤く、弟盈哥に次子の阿骨打の能く爲すあるを告げ、之れを托して遂に死せり。母弟の頗刺叔は襲いで節度使となる。頗刺叔の死後弟盈哥嗣ぎ、遼の叛將蕭海里を撃ちて之れを斬り、遼兵の興し易きを知りて益々自ら恣にせり。時に高麗王は其の部族の日に強くして兵の愈々精悍なるを聞き、即ち使を女真に遣はして之れと通じ、爾來往來常に絶わざりき。

既にして遼帝は阿骨打の雄豪にして常に邊事を托すべきにあらざるを覺りければ之を誅せんと謀りて果たすを得ず。而して阿骨打は又遼帝が己が異志を懐けるを知れるを疑ひ、且つ遼帝の淫亂にして國政を觀ざるに乗じて兵を擧げ、先づ近傍の族を併せ、盈哥の死後は自ら達貝勒と稱したり。之れ實に徽宗の政和元年にして、女眞はこれより漸次強大となる。

これより先き遼の聖宗は、宋の天聖九年に死し、其の子宗眞立つ、これ即ち興宗なり。時に其の母蕭太后が國事を觀たり。遼の盛んなりし時期は、此の時代までにて、當時東は高麗を降し、南は宋と和して其の年幣を受け、西は河西のウイグルを破り、北は渤海の遺族を平らげければ、其の版圖たるや、實に東は日本海に至り、西は金山に境し、北は臚胇河に至り、南は白溝に至れり。其の幅員萬里に亘り、内に五京を建て、上京臨潢府。東京遼陽府。中京大定興中府。南京折津府。西京大同府と名附け、州郡に百五十六の城を設け、二百九縣と五千の部族と六十の屬國とを有したりき。至和二年に至りて興宗死して、其の子洪基即ち道宗位に即き、宋の神宗と境を議して

地を南方に廣めたりと雖ども、耶律伊遜を信任して、政を専らに任しければ、自然國を傾くるに至り、太后蕭氏の明敏なるを忌みて之れを罪に誣ひて死なしめ、又太子をも殺し以て、國政大に亂れ、西夏。黨項等皆な命を奉せざるに至れり。孫の天祚帝次いで立ちしも、淫にして、政を怠り、毎年使を遣はして名鷹の聞ね高き海東青を海上より買ひ求め、歸途、女眞を過れり。使者縦なりければ、女眞之れを厭忌し、嘗て盈哥の時、叛臣の遼にあるものを遣はさざるを以て辭となし、之を拒みたり。然るに阿骨打位を襲ぐに及びて、遂に兵を擧げて遼を攻め、寧江州を取り、遼軍を混同江に迎戦して大に之れを敗り、遼の東北諸州多く叛きて女眞に降れり。かくて阿骨打は屢々遼と戦ひて勝ち、諸將に勸められて帝と稱し國號を大金と稱せり。

二 金、遼を滅ぼす

太祖アボキ—太宗徳光—穆宗ジウル

△ 世宗ウユン—景宗賢—聖宗イエンジウヌ—

遼の世系

興宗アブチ—道宗ナリン—△—天祚帝イエンヒ

遼は講和の提議を金に求めしが、金肯かず進んで、黃龍府を陥れ、益州に迫り。達魯古城を陥れしかば、天祚帝は親征の師を起せしも、其の副都統耶律特末衍等叛旗を翻しければ、止むなく西に還りぬ。此に於て金の軍勢は之れを追いて、混同江の西なる護步塔岡に至り、大に遼軍を破り、遼將の高永昌が遼陽に據りて叛けるを攻め、悉く遼の東京の州縣を收め、遼の都元帥耶律淳等と戦を交へ、遂に遼の顯以下八州を奪ひぬ。此に於て初めて和を講じ、金は遼が己れに兄事せんことを求めしも、其の書冊、金の定むるが如くならざりければ、議成らず金兵進みて、遼の上京を降したり。

之れより先き女眞の人海に泛びて登州に至り、馬を買ふ。此頃漢人の高藥師と呼ぶ者海に泛び來りて、女眞國を建て屢々藥師を破れることを告げたり。登州の守臣王師中之れを以聞したれば、詔して蔡京・童貫等をして共に協議せしめ、人を募りて藥師等を同行せしめたるが、達せずして引返せり。宋帝又童貫に委ね、人を選んで使せしめ、武義大夫馬政をして、藥師と共に海上より金に赴かしめたり。かくて馬政は金主に告げて我が主貴朝の契丹五十餘城を攻破せしと聞く、與に好みを通じて共に伐たん、若し

許されなば將に使を遣はして來り議せしむべしと。之れより金と好を通することゝなれり。

其の翌年金主は使を遣はして、國書及び北珠・生金等を以つて馬政と共に、來りて好を修めんとせり。乃ち蔡京に詔して遼を夾撃せんとの謀をなす。此に於て更に馬政を遣はして、詔及び禮物を齎し、海を渡りて報聘せしむ。登州に至りけるに、謀者ありて遼は已に金主を封じて帝となせりと。此に於て呼慶をして金の使者を送り歸さしめぬ。時に使者呼慶に告げて、若し歸りて帝に見え、果たして修交を結ばんとすれば、早く國書を示すべし、もし詔を用ひなば決して行ひ難かるべしと。呼慶は金より還りて具さに金主の意を復命し、更に使を遣はさんことを請へり。時に童貫は密かに旨を受けて燕を圖り、依つて建議して右文殿修撰趙良嗣を遣はし、市馬を買ふに名を籍りて其の實遼を攻むるを約し、以て燕・雲の地を略取せんとせり。乃ち趙良嗣行きて金主に告げて曰く、燕はもと漢の地なり、遼を夾撃せんと欲せば、金をして中京大定府を取らしめ、宋をして燕京・析津府を取らしめよと云へり。金帝之れを許し歲幣を議し、

手札を以て良嗣に付し、金兵は平地松林より古北口に赴き、宋兵は白溝より夾撃するを約したり。

宋は當時蔡京専ら政を用ひ、切りに邊功を樹てんとして童貫等吐蕃を征せし頃なりければ、馬政を遣はして之に報じて約の如くにし、童貫をして相應せしめたり。彼我の兵鬪を過ぐるに能はず、歳幣の數、遼に同じからんとせり。かくて約既に成りて宋は睦州清溪の民方臘・左道に托して、衆を惑はして亂をなし、杭州等を陥れければ、童貫をして江・淮・荆・浙宣撫使となし、兵を發して之を討たしむ。爲めに北伐の議を罷めしが、又淮南の盜、宋江の京東諸郡を掠むるあり、諸軍躊躇して進まざりき。

而して遼は女眞の兵を興せし以來、郡縣を失ふこと殆んど半數に至れるに、天祚帝は淫に荒みて更に意に介せず、忠臣は多く退けられ、又都統耶律余都姑の叛旗を翻して金に降れることあり。此に於て金は遼主の徳を失して中外の離反せる機會に乗じ、宜しく襲撃して中京を屠るべしとなし、諸將を部署に就かしめ耶律余都姑を郷導として軍を進め、宣和四年に至りて遼の中京に迫りたり。時に遼兵は戦を交へざるに早くも

潰走し、金軍は更に進みて澤州に出でければ、遼主は大に懼れて衆望ある其の子晋王を殺したり。此に於て民心愈々離れたり。而して金軍は遼主の行宮に迫りければ、遼主は白水瀨に赴き遂に夾山に入れり。之れより先き遼主の雲中に走るや、燕京の留守李處温等は、耶律淳を帝と稱せしめ、遙かに其の主を廢して湘陰王となし、軍旅の事は耶律大石に委ね、遂に燕・雲中及び上京遼西の地に據有して、遼主の有する所は、沙漠以北と西南西北路・南都招討府・諸蕃族のみとなれり。淳は使を宋に遣はし歳幣を免じて修好を結ばんと云ひ、又使を遣はして表を金に奉じて附庸たらんことを請ひしも、金人之れに應せざりき。既にして金は西京大同府を攻め、西京西路州縣の部族は皆な悉く金に降りたり。

又童貫は屢々金が遼兵を敗ると聞き、乃ち兵を擧げて金に應せんことを請ひ、鄭居中は反對せしも、帝は遂に意を決し、蔡攸を童貫の副たらしめ、十五萬の兵を率ゐて北邊に出征し、金に應じたり。童貫の兵を進めて遼を討つや、却て遼將の爲めに破られ、退きて雄州を保ちけるが、遼の軍追撃して城下に迫りぬ。宋帝は部下の兵敗れしと聞き

て、怖れて師を還らしめたり。

時に遼は蕭氏皇太后軍國のことを掌り、遺命を奉じて遙かに秦王定を立て、帝となし、李處温は叛意ありしが爲めに誅に伏せり。初め宋の金と約せしは只石晋契丹に賂る故地を求むるのみなりけるが、趙良嗣は金の出兵期を失せるを責め、今更に前約を責めず、特に燕京以下六州を與へんと。良嗣は前約には山前山後の十七州を云ふ、信義何れにかあると抗辨すれども、金人従はず、良嗣乃ち金の使李靖と共に來りて山前六州を許さむと云ひ、宋は又良嗣を遣はして營平灤三州を求めぬ。然るに金主は宋にして、若し必ず營平灤の州を得んと欲すれば、燕京を併せ與へすと云ひ、答書中には燕京は金の兵力を以て攻めし所なれば、其の租税は當に金に輸すべしとさへあり。良嗣爲めに租税は地に隨ふものなるに、地を與へて租税を與へざるの理なきを争ひしが、容れられざりき。良嗣、燕に至り、租税を議したりしに、金主は燕租六百萬の中より一百萬を取るべし、然らざれば我が涿、易の舊地を還せとの提議をなす。良嗣又還りて奏す。かくて遼人に許すに舊歲幣四十萬の外に、毎年更に燕京代税錢一百萬を加へ、并に正月

生辰には祝賀の使を遣はして交易せんと云ひければ、金主大に喜び燕、涿等六州を歸し童貫等の師を還さしめぬ。

斯る交渉の間に於ても、金は兵を進めて燕京を陥れ、蕭太后は天祚帝の許に走りて殺され、金軍は更に天祚帝を雲内に走らしめしが、夏主李乾順は使を遣はして、遼主の其の國に臨まんことを請ひ、遼主之れを容れたり。之れを聞きて金は書を夏に送りて遼主を送還せしめ、且つ土地の割讓を約せり。これより夏主は宣和六年に使を遣はして藩を金に稱し、且つ遼の故地を割讓せり。然るに黨項の小解祿は、人を遣はして其の地に臨まんことを請ひければ、遼主は遂に天德に赴き、沙漠を過る。而して金兵忽ち到りて、一度は脱れしも應州新城に至る頃、金將の爲めに捕はれ、かくて遼は遂に滅亡せり。時に宣和七年なりき。遼は太祖國を建て、より天祚の捕縛に至るまで、凡そ九主合はせて二百十九年なり。

三 金、宋を侵す

金の太祖歿して其の弟吳乞買位に即き、天會と改元す、之れ即ち金の太宗なり。太

宗の初年に金將韓喇布人を宋に遣はし、亡命の客を索めしめけるが、宋の朝議之れに従はざりければ、恐らく後患あらんとなし、遼主を捕ふるに際して、意を決して南侵す。かくて諸軍八方より攻め、幾何もなくして燕山の州縣を屠れり。此に於て帝は援軍を組織し、又詔を下して位を太子に譲りたり、之れ即ち欽宗なり。當時天下は皆な蔡京等國を誤るものと知りけるが、敢て帝の爲めに直言するものなかりき。時に大學生等上書して蔡京・童貫等六人を誅し、首を四方に傳へて天下に謝罪せんことを乞へり。かくる間に靖康元年黎陽を守りし梁芳平の軍潰れて、金軍遂に河を渡るや、上皇は亳州に出奔し遂に鎮江に走りぬ。欽宗も亦敵の英鋒を避けて蒙塵すべしとの議ありしが、李綱固く諫めてこれを止め、禁衛軍をして死守せしめんことを誓ひ、金軍と力戦して能く防ぎけるが、李邦彥は地を割きて和を締結するに如かずと勸め、帝遂に此の説に従へり。偶々金の使吳孝民來りて和を促せしかば、乃ち和議を結ばしめたり。其の時金の要求は金五百萬兩・銀五十萬兩・牛馬一萬頭・表段百萬匹を輸し、金帝を伯父と尊稱し、燕雲の人にして漢に在る者を還らしめ、中山・太原・河間の三鎮を割き、宰相・親王等を

人質とせよと云ふにありき。帝は李邦彥等の説に動かされ、金の議に従ひ、急に殿を避け、勝を減じて都城の金銀を驅り集め、金二十萬兩・銀四十萬兩を得たり。李綱は飽く迄も主戦論者にして、今三鎮の國を割譲せば、立國の基なかるべきを論じたるが用ひられず、誓書茲に成りて、金を尊んで伯大金國皇帝となし、自ら姪大宋皇帝と云ひ、更に康王構及び張邦昌をして人質たらしめたり。

かくて宋朝は日々金を金軍に輸りけるが、而かも金軍の要求は止まざりき。時に勤王の師漸くにして起り、馬忠等の軍集るもの既に二十餘萬に達し、金兵は僅かに六萬なりき。元來李綱は主戦論者にて、金の要求日に多く、金人の貪慾飽くなきを憤慨し、師を用ふるに非ざれば不可なりとし、金人と慕天娥に戦ひて之れを敗れり。金は大に其の不都合を詰り、宋は李綱をして謝罪せしめ、更に肅王樞を金に質となし、康王構と張邦昌とは國に還りぬ。

其の後金は太原を攻め、平陽を降し、隆徳府を破りければ、即ち和議の臣派遣を罷め太原・中山・河間の三鎮は當に固守すべきを詔し、諸將をして金と對陣せしめけるが、



戰敗れて河を渡りて南に走りたり。かくて連戦連敗の結果、今や西京破れければ、金軍に使を遣はして和を講せんとせしも成らず。かゝる間に金軍は日々進撃し來りて青城に迫りければ、欽宗は進退谷まりて金營に赴きて軍門に降れり。此に於てか金主は帝及び太上皇帝を廢して庶人となし、以て異姓を立てんことを議し、張邦昌を立て、楚帝となしたり。此れが爲め宋は一旦中絶したれど、康王構は南京に位に即きて高宗となりたり、故にこれより以後を南宋と稱す。

### 第六章 南宋と金

#### 一、宋室南遷す

高宗は即位の初め恢復の念強く、和議を主張する者を斥け、主戦論者の李綱を擧げて相となしたり。李綱は帝に勸めて一度び京師に入り、宗廟に見て都人の心を慰めよと云ひ、又河北、河東は國疲弊し、如何ともなし難ければ、先づ之れを處し然る後に中原初めて保持するを得べしとの意見にて、河北には招撫司を、河東には經制司を置き、

以て全く州郡を恢復せんと奏請したり。



南宋の形勢

然れども帝の性怯懦なりければ、汪伯彥等の説を用ひて、東南に幸すべきを決意したり。李綱切に諫めたれど用ひられず爲めに李綱は官を罷めて去り、帝は揚州に赴きて其の企圖せし所皆な水泡に歸せり。其の時金は燕京を初め八路の兵を起し三道に別れて南侵し、遂に西京を破り、京西の州郡皆な破れしが、其の東京を侵すに及び、宗澤能く防ぎて金軍を敗走せしめたり。かくて宗澤は群盜を招撫して城下に集め、又兵を募り、糧を備へ、諸將を召して日を約し、將に河を渡らんとせり。諸將皆な泣きて

命を聽きたり。時に海は即ち上疏して祖宗の業は惜しむべく、陛下の父母兄弟は漢に蒙塵して日々援を望み、西京の陵は賊に占領せられて亦祭享の地あらず、兩河二京、陝右、淮、甸百萬の生靈は、まさに塗炭の苦みを嘗めつゝある時に際し、これをしも顧ずして南湖外に幸せんとするは、之れ第一に姦邪の臣が賊虜の方便に計れるものにして、第二には姦邪の親屬が南に在るが故なり。今や京城既に固めを増し、兵備已に整ひて、人氣己に勇銳なれば、宜しく陛下敵愾の氣を以て、東晉既覆の轍を踏む勿れと奏せり。此に於てか帝は、詔を降し、還京の日を撰ばんとせしが、汪伯彥等の爲めに遮られて又果たすを得ず、此に於て憂憤の極疾を得て死せり。されば折角城下に集りし群盜も、復た去りて剽掠をなすに至り、其の間に乘じて金は復た南侵したれば、宋軍は到る處に破れたり。かくて金軍は南楊州に迫りければ帝は蒼皇として江を渡りて鎮江に至り、復た杭州に走れり。金軍乃ち江東に入り、太平建康を陥れ、廣徳より臨安に赴き、帝は海に航して遠く難を避け、金人は更に越州、明州を陥れ、定海昌國縣を陥れ、舟師を以て帝を章安に追ひけるが及ばず。かくて中原は群盜機に乗じて州郡に割據し、或は

數郡に亘るもありけるが、岳飛、韓世忠等協力して之を討つて平定せり。

二 宋、金の戦

之れより先き金は張邦昌を建てしも、國內治まらずして宋に歸服し、誅せられしかば、更に劉豫を河南に立て、以て陝西の地を兼有し、汴京に都して齊京と稱したり。かくて劉豫は屢々將を遣はして宋を攻め、數州を侵せしも、宋將岳飛の爲めに恢復せられ、金は其の將婁室及び兀朮をして之を援はしむ。此に於て高宗は親征の詔を發し、張浚、岳飛、韓世忠をして防がしめしも、金の兵復た引返し、高宗は遂に臨安に都す。時に紹興五年なり。

これより先き宋の秦檜は徽宗及び欽宗に従ひて金に在り、金の宗族達懶と間善かりければ、和議を結ぶの約をして還り、後高宗の信任を得て相となり、大に和議を主張し、主戰論を排斥し、王倫を金に遣はして和議を結ばしむ。其の時金は屢々南侵を試みしが利あらず、次いで紹興七年劉豫を廢すると共に使を遣はして和を議し、其の後二年にして陝西、河南の地即ち東西南の三京及び壽春、府、毫、曹、單の諸州並に京西、陝

西諸州の地を歸せり。

然るに兀求是地を割くの不利を唱へ、熙宗に告げてこれ蒲魯虎等の陰謀ならんと云へり。茲に於て熙宗は盟に叛きて入寇し、悉く歸する所の土地を奪ひければ、岳飛・劉琦・韓世忠等諸將を遣はし、宋軍連戰連勝し、兩河の民又響應して敵の將帥來降するに至り、兀求是汗を捨て、去らんと謀り、岳飛追うて河を渡り、黃龍に至らんと期せり。時に秦檜は専ら和議を説へ、高宗に勸めて岳飛・張浚等を召還し、次いで罪を設けて岳飛を斥け、和を講じ、かくて徽宗の梓宮及び高宗の母章太后は金より還され、京西の二州と陝西の地を割き、東は淮水、西は大散關を以て界となし、歲幣は銀絹各二十五萬を贈ることとし、土表して臣屬することせり。此に於てか宋は僅に兩浙・兩淮・江の東西・湖の南北・西蜀・福建・廣東西十五里を有し、京西南路は只襄陽一府、陝西路は只階・成・和・鳳の四州あるのみとなり、金は既に五京を建て、上京會寧府・東西遼陽府・中京大定府・西京大同府・南京大興府と稱し、十四總管府を置きて以て天下を十九路に分ちたり。

秦檜は政を恣にして帝の耳目を蔽ひ、文字の學を起しければ一時獻言するもの檜の功德を誦するにあらざれば、奸人の語言以て善類を傷くるものなり。されば言ふものは皆な忌諱に觸れんことを怖れ、國士・大夫の名望あるものは、悉く之れを遠方に斥け、齟齬として働ける匹夫も一言若し契合すれば政府に登用し、而して一語を出せば忽ち又斥け去らるゝこと恰かも奴隸に異ならず。斯くて宋朝には一人として戰を敢て口にする者なき時に當り、金も亦内訌漸く盛んにして岡南の暇とはなかりき。金の熙宗は即位の初めに當り、名將名相ありて國威中外に輝きしも、晩年には皇后に制せられ、爲めに讎を散せんとして酒を従にし、遂に其の弟胎王常勝等を殺し次いで皇后を殺し、帝の弟亮は帝を弑して之れに代りぬ。かくて亮は宗室の大臣以下を殺し、又稍々經史を修めたるより漢土の衣冠人物を慕ひて、密かに遷都の意あり。遂に紹興二十一年詔を下して直言を求む。上書する者多くは上京會寧府は一隅に僻在せる爲め、燕に移りて以て天地の中に應ずるに若かずとなす。是れ亮の意にかなひければ、大に宮室を燕に營み、以て専ら汴京の制度に依らしめたり。

斯くて二年の後ち都を燕に移して中都大興府となし、汴京を南京となし、上京の名を削りて只會寧府とし、又中京大定府を改めて北京となし、東京遼陽府、西京大同府は従前の通りとせり。亮は此に於て南侵の志あり、曾て書工に命じて臨安湖山を寫して屏風となし、己れの像を圖し、馬を吳山の絶頂に立つる所を作り詩を其の上に題して馬を吳山第一峰に立つと云へり。又戰船を通州に造り、使を諸路に遣はして二十四萬金を集めしめ、又中都・南都・中原・渤海の壯丁二十以上五十以下の者を集め又使を遣はして諸道總管府に至り、兵器を督造し、諸路に命じて古く貯へ置きたる軍器を集めしめたり。

宋も之を疑ひ王綸を遣はして窺はしめしも、隣國順恭なりと復命せしかば、敢て備へを設けざりき。

かくて金主亮は遂に都を汴に移し、紹興三十一年に遂に道を分ちて宋を侵し、渦口より淮を渡り、兩淮悉く陥り、和州に軍し舟師を遣はして采石に渡る。宋將虞允文は能く諸將を督勵し金軍を敗走せしめたりしに、江に死せざるものは亮悉くこれを殺

せり。時偶々金の曹國公烏祿は東京に位に即き、大定と改元せりとの飛報ありければ、乃ち北に還る。

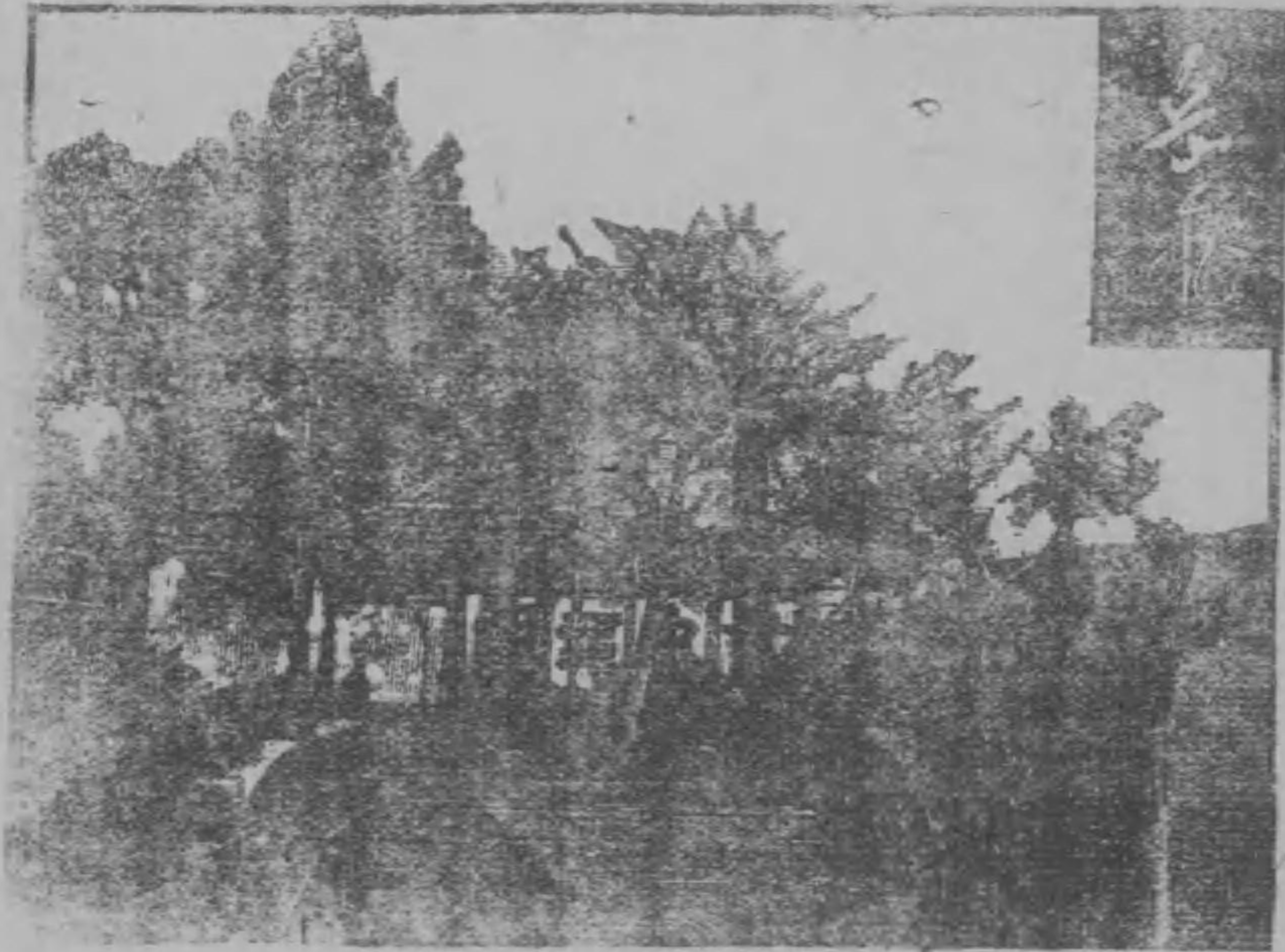
亮の瓜州に至りたる時、諸將亂をなして之れを弑し、烏祿位に即きて世宗となりぬ。翌年宋の高宗は臨安に還り、位を太子に傳へて自ら太上皇と稱し、太子位に即きて孝宗となる。高宗は銳意恢復を圖るの念ありて、張浚と謀り、李顯忠等をして道を分ちて北伐せしも其の甲斐なく、乾道元年初めて敵國の禮を正し、君臣の關係を改めて叔姪の關係となし、歲幣銀絹各五萬宛を減じ得たるが、地界は紹興の時の如くしたり。

時に南北共に名君を戴きて互に兵を用ひざること三十餘年、生民爲めに漸く休養を得たり。孝宗は南宋の賢主にして英明の聞ね高かりしが、不幸にして宰相其の人を得ざりし爲め、恢復の志を遂げ得ざりしと雖も、金人の宋を侮る心は稍々減じ、内治も能く舉りて南方學術の極盛を見たり。世宗亦賢明にして仁恕、北方の小堯舜と稱せられたり。女眞の舊風の純直なるを喜びて之れを代ふることを欲せず、遂に女眞人にして南方の衣飾を學ぶことを禁じ、又學士に命じて女眞文字を以て經史を譯出せしめ

女眞の大學をも建て、外には西夏・高麗の亂を濟ひ、金室中興の英主と仰がれたり。此の兩明君は、共に西紀千八百八十九年を以て歿し、宋は光宗、金は章宗後を嗣ぎたり。

三 岳飛の誠忠

はじめ岳飛の勤王軍を起して金を伐つや、宋、金の合戦は遂に金の敗となりければ、兩河の豪傑李通等は衆を率ゐて岳飛に歸參しぬ。かくて岳飛は金人の動靜及び山川の險惡等實地を見聞したれば、日を期して更に兵を興し、其の旗に岳の號を掲げしめたり。父老・百姓は我れ勝ちにと争つて車を輓き、牛を牽き糧食を齎し義軍を迎へ、或は香を焚いて歡迎頗る篤し。かくて燕より以南は金人の號令行はれず、かくて金の將士續々來降す。飛は大に喜び黃龍府を一舉に衝いて將士と共に痛飲せんと號し、日を期して河を渡らんとせり。時に秦檜は淮以北を畫して金と和議を結ばんと欲し師を還されんことを求めければ、即ち飛の軍を召還す。岳飛兵を治めて歸るに際し、民は皆な馬を遮りて號哭し、相公去らば我等まさに金人の爲めに、類を擧げて殺されんと絶りければ、飛も亦悲泣し詔を取りて之を民に示し。哭聲野に振へり。かくて飛は五日間滞在して



岳飛の廟

民の離散するを待つ。飛還るに際し、金兵又河南新復の府州を占領したり。時に秦檜は講和論者の急先鋒なりければ、諸將の制し難きを慮りて、其の兵權を己れの手に收めんことを欲し、韓世忠及び張浚を樞密使となし、岳飛を副使となす。然るに飛は恢復を己れの任となし、講和に賛せざりければ、檜は張浚等と密かに謀り、飛を殺すに非ざれば和議を締結する至難なりとし、遂に雲と共に投獄す。かくて檜は遂に飛を殺したり。金人は兵飛を非常に畏敬して

父と稱し居たるが、今殺されたりと聞くや、酒を酌んで祝賀の宴を張れりと云ふ。

岳飛は頗る怪力あり、又親に仕ふこと至孝にして家に姬侍を置かず、其の忠義は彼の天性なりき。吳玠は日頃飛に服し、與に交驍せんことを希ひ、名珠を飾りて之れを贈りたり。然るに飛は今や天下多事の時、何んぞ安樂に耽るを得んやとてそれを退けて受けざりければ、玠は益々飛の人格に敬服せり。又帝は飛の爲めに第宅を營み與へんとしたるに、飛はそれを辭し、金敵未だ亡びざるに、何んぞ家を爲すの暇あらんやと答へたり。時に或人は天下何時の日が泰平なるべきと勸めけるも、飛は文臣は錢を愛せず、武臣は死を惜まざれば天下泰平ならんと、其の部下の卒に民家より麻一縷を取れるものありけるが、飛忽ち之れを斬りたり。然るに兵卒の病める者ある時は、飛は自ら藥餌を調製してこれに與へたり。かくて飛は軍規を嚴にし、豫め謀を定めて戰に臨み、常に小勢を以て大勢の敵を破り戰ふ毎に連勝したり。されば山を撼すは易けれども、岳飛を敗るは難しと謂はれたり。

張浚嘗て用兵の術を問ひけるに、岳飛答へて仁信智勇嚴是れなり、而して其の一を欠

かは、不可なりと云へり。飛は賢を好み士を禮し、經史を覽て一見書生の如し。戰功を論ずる毎に、飛何の功があらんと、皆な將士の功を擧げたり。然れども飛や忠憤激烈にして、議論正しからざれば正を持して常に曲げず、爲めに遂に禍を招きて斃れたり。其の誣ひられて庭に下り、反狀を詰らるゝに及び、飛は裳を裂いて示せり、飛死する時に女あり、銀瓶を抱いて井戸に投じ、以て飛に殉せり。其の脊に跡ありたりと傳ふる盡忠報國の四大文字は、實に飛の人格を代表せるものと云ふべきなり。

### 第七章 宋代の文化

#### 一 學藝隆興

支那の思想界は漢唐を経て宋に至り、面目を一新して其の盛んなること殆んど春秋戰國時代に比すべきものあり。其の理由は種々複雑なるべけれど、要するに學風の根本的刷新にありき。換言すれば訓詁に對する反抗なりしなり。

學風一變の結果として、宋代には哲學的思索の風起り、茲に所謂理學者なるもの生じ

ぬ。これ即ち魏・晉以來道教・佛教の隆盛につれて、自然と之を研究する者多く、遂に儒學の上にも及ぼしたるものならん。

宋朝に於ける儒學の盛んなりしは仁宗の代に始まれり。而して胡瑗・周敦頤等出で、先づ其の氣分を作れり。周敦頤は字を茂叔と云ひ、生地に因みて濂溪先生と稱し、深く易理を窮め、博學力行にして易通及び大極通説を著はし、天地の根源を明かにし、下物の始終を究め、其の文は質にして義は精孔・孟の本源を得、大に學者に功ありき。其の門下生に程頤及び程頤の兄弟ありき。兄程頤は神宗の代に呂公著の推薦に依りて朝に召され、進説甚だ多く、王安石が新法を行ふに際し、常に從容として其の不便を指摘したれば、安石も之れには少なからず愧屈したりと。頤は早く弟と共に周敦頤が道を論ずと聞きて、遂に科業の業を厭ひ、慨然として道を求むるの志あり。未だ其の惡を知らず、諸家は泛濫し、老釋に出入するもの殆んど十年、返りて之れを六經に求め、而して後之れを得たりと傳ふ。其の資性人に過ぎ、充養道あり、常に純粹の氣其の面に溢れたり其の友人及び門弟等、親しく其の動靜に接するも、未だ忿怒の容を見しことなかりき。

如何なる難事に遭ふも面容を變へず、又深く意を經濟に用ひ、司馬光召さるゝに當りて頤も又召されけるが、遽に卒し、士丈夫識ると識らるざるとを問はず、何れも哀傷せざるはなかりき。明道先生と呼ぶ即ち之れなり。

弟・程頤は元祐の初め呂公著・司馬光の勸に依りて、經筵に召されしが、蘇軾と議論合はずして出て、西京の國子監となり、後紹聖中黨禍に罹りて涪州に貶せらる。頤は書に於て讀まざるはなく、其の學識博く、大學・論語・孟子・中庸を以て標摘となし、能く六經に達せり。又聖人を以て師となし、常に孔・孟不傳の學を待、諸儒の爲めに易・春秋傳を著し、平生人に教へて倦まざりき。故に學者の其の門を潛る者最も多く、劉絢・張釋・大鈞等あり、世に伊川先生と稱するは程頤のことなり。

又邵雍は字を堯天と云ひ、天性高邁にして溫厚、更に圭角を見はさず。當時王安石の新法世に現はれて、世論沸騰したりけるが、雍は之れ正に賢者の力を盡くすべきの時期、新法は固嚴なれば、能く一分の寬を以てすれば、民も亦一分の賜あらん、排撃するも何の益こそなからんと云へり。雍は智慮人に勝れば、事に當りてよく前後を察知

せり。世に康節先生と呼ぶ即ちこれなり。

當時尙ほ二程子の講友に張載あり、道に志して未だ須叟も精思を止めず、其の學は易を以て宗となし、中庸を以て禮となし、孔孟を以て法となし、呂太望の推薦に依りて、同知太常禮院となりしが、疾を得て歸り死したり。横渠先生と呼ぶ即ちこれなり。

以上は何れも北宋の學者にして、南宋に至りては朱熹あり、陸九淵あり、一は宋學を大成し、一は之れに對して一家の學を立てたり。次に宋の初めに於ては、其の文尙ほ六朝の餘波を脱せざりしが如く、柳開、穆修等出でて古文を説き、韓柳を唱へしも未だ之を改むるに足らず、歐陽修出づるに及びて、宋の文章は大に面目を改め、三蘇、曾王諸家相次いで表はれ、宋代の文章は遂に唐代の文章を凌駕して餘りあるに至りぬ。

歐陽修は字を永叔と云ひ、韓文公の遺稿を得て大に之れを慕ひ、苦心探赜寢食を忘れて遂に文章を以て天下に冠たるに至り、學者爲めに翕然として之れを師と仰ぎて尊敬するに至れり。自ら六一居士と號し、文忠と諡せらる。

蘇洵は字を明允と云ひ、老泉と號せり、世の老蘇となす所なり。其の審勢及び審敵の



蘇東坡とその其の書

如きは、自らも許せる文章にして、當時の時事に觸れて論議せるものなり。

蘇軾は字を子瞻と云ひ、東坡居士と號せり、世の大蘇と云ふこれなり。父の老泉も師の歐陽永叔も、彼の文名には一着を輸せざるを得ざりき。實に宋代第一の文章家たるなり。其の性質直言を喜び、苟くも己れを枉げて流俗に阿附せず、而かも其の襟懷

たるや淡如雪の如かりき。王安石と新法を争ひて屢々貶せられたるも、決して屈せざりき。その文章は行雲流水の如く才を以て勝てり。又蘇轍は字を子由と呼び、父兄共に文明あり、小蘇と呼ばれる。其の父は恬澹を以て勝り、殊に論策に秀でたり。詩は宋代は遂に唐代に及ばざること遠かりき。北宋には蘇軾、蘇舜欽、梅堯臣、黃庭堅あり。又南宋には陸游、范成大なるのみありき。就中蘇軾の詩は、一代一人の詩にあらずとまで



いはれ、雅健骨力、風韻共に並び勝れたり。

當時史書に名あるものは、歐陽修の新唐書、五代史、司馬光の資治通鑑、朱熹の通鑑綱目等ありき。當時又書畫に秀でたるものも多く、太宗、黃庭堅は共に書の名家として知られ、徽宗は大に畫を好み宣和書院を設けて古今の名畫を集むると共に、廣く妙工を招待する等のことありき。宋畫の盛んなりしは蓋し此の種の獎勵に基因せしものなるべし。李公麟は宋朝第一の畫家にして、釋巨然も亦畫名を馳せたり。蘇軾亦其の英才を畫に馳せたり。

### 二 司馬光と資治通鑑

宋の特徴は文にあり、事を記すの煩勞を辭せざりける結果として、史料の如きも發達し、其の種類多く従つて史學の進歩を促せり。而して編年體歴史の編纂として最初のものは、實に司馬光の資治通鑑となす。

曩に王安石の新法世に現はるゝや、司馬光は新法を喜ばず、安石と議合はずして遂に洛陽に退居せるの人。かくて洛陽にあること前後十五年の久しきに亘り、當時世上

りは司馬相公と尊稱せられ、眞の宰相となされたり。神宗崩御に際し、出で、相となり新法の改革をなさんとせしか、謀未だ成らざるに先ち、半途にして病を得て歿したり。これより先き司馬光は神宗の勅命を奉じて劉恕等と共に拮据經營十九年の歳月を費して資治通鑑を大成せり。編年體の組織を撰び特に政治の沿革を主とし、事實精確、文章も亦壯麗にして而かも嚴正に前後を貫通して一絲亂れざるなり。

朱熹



朱熹の理學に於けるや、獨り宋代の翹楚たるのみならず、其の思索の精密にして而かも規畫の大なることは古今に獨絶し、決して歐洲の哲學者に譲らざるものあり。熹

### 三 朱熹と道學

は幼にして夙に道を求むるの志ありければ父の遺命を受けて崇安に赴き、胡憲、劉勉之等に從つて學を受け、進士の試験に及第して同安主簿を主り、後罷めて歸るや、延

平の李侗は楊時の門人なる羅從彦に業を受け隱居して道を楽しむと聞きければ、即ち行きて之れに従ひ遂に其の傳を得たり。

孝宗言を求むるや、熹は封事を上り、修攘の大計を陳べ、其の後ち屢々起しも却つて罷められ、正を持して譲らざりければ、帝に合はざりき。其の南康郡の知たる時、餓饉に逢ひけるが、よく内政を處理したれば、丞相王淮に認められ、推されて浙東の常平茶鹽を提舉せり。

幾何もなくして淮も亦其の切直を怨み、陰に人をして道學を排撃せしめたり。淮一日道に要して、天子は誠意正心の論を聞くを厭ふと告げけるが、熹は承知せず我が平生學ぶ所のものは此の四字にて盡く、我れ緘黙して君を欺くことはなし能はざるなりと、依然として改むる所なかりき。

寧宗位に即くや召して侍講となす、然れども誣劾に遭ひて職を落し、祠を祀ることも罷められたり。此の時より偽學の禁は起れるなり。熹や登第してより五十年、外に仕ふること九考、朝に立つこと僅かに四十日にして七十二にて歿したり。其の著作は

頗る多く、易本義・詩集傳・四書集注・小學・近思錄・通鑑綱目の如き最も著明なるものなり。然れども其の學の觀るべきものは、文集・語類・語錄等にあるなり。其の根本は大抵周張二程に本づくものなりと雖も、巧妙なる綜合を以て體系の整を成せり。

即ち其の所説の大要を述べれば、太極は陰陽の動靜を兼ねると同時に、單複を包括し現象界の萬物は氣の精粗に依りて品を成し、就中人は氣の精を得たるものにして最も秀でたりと。此に於て性に本然氣質の別を設け、心性情才を別ち、大要格物以て其の知を致し、又身以て其性を養ひ、而して居敬を以て主となせり。

四 佛 教

佛教は五代の末周の世宗が多く寺院を廢し、僧尼を度することを禁せしが、宋の新に勃興するに際して、太祖は又廢寺を修め、佛像を造ることを許し、僧行勤等百餘人を印度に遣はし、又大藏經を開板し、且つ西城に遊びて歸れる僧侶少なからざりし爲め、死灰再び燃わて、其の勢又盛んになれり。

かくて太宗の端拱二年には開寶寺の塔を作りて中に佛舍利を藏めたるが、塔の高さ

三百六十尺、其の費用億萬に上り、八年の歳月を費して漸く竣工せり。而して帝の在位中は前後十七萬人の僧尼を度し、譯經傳法院を東都に立て、西僧をして經論を譯せしめたり。眞宗の時、其の費用嵩みたる結果、院を罷められんことを請ふものありけるが聽かず。却つて其の業を盛んにしたるを以て、當時譯出せしもの凡そ四百十四卷に達し、其の僧尼の數は四十六萬餘人を算せり。

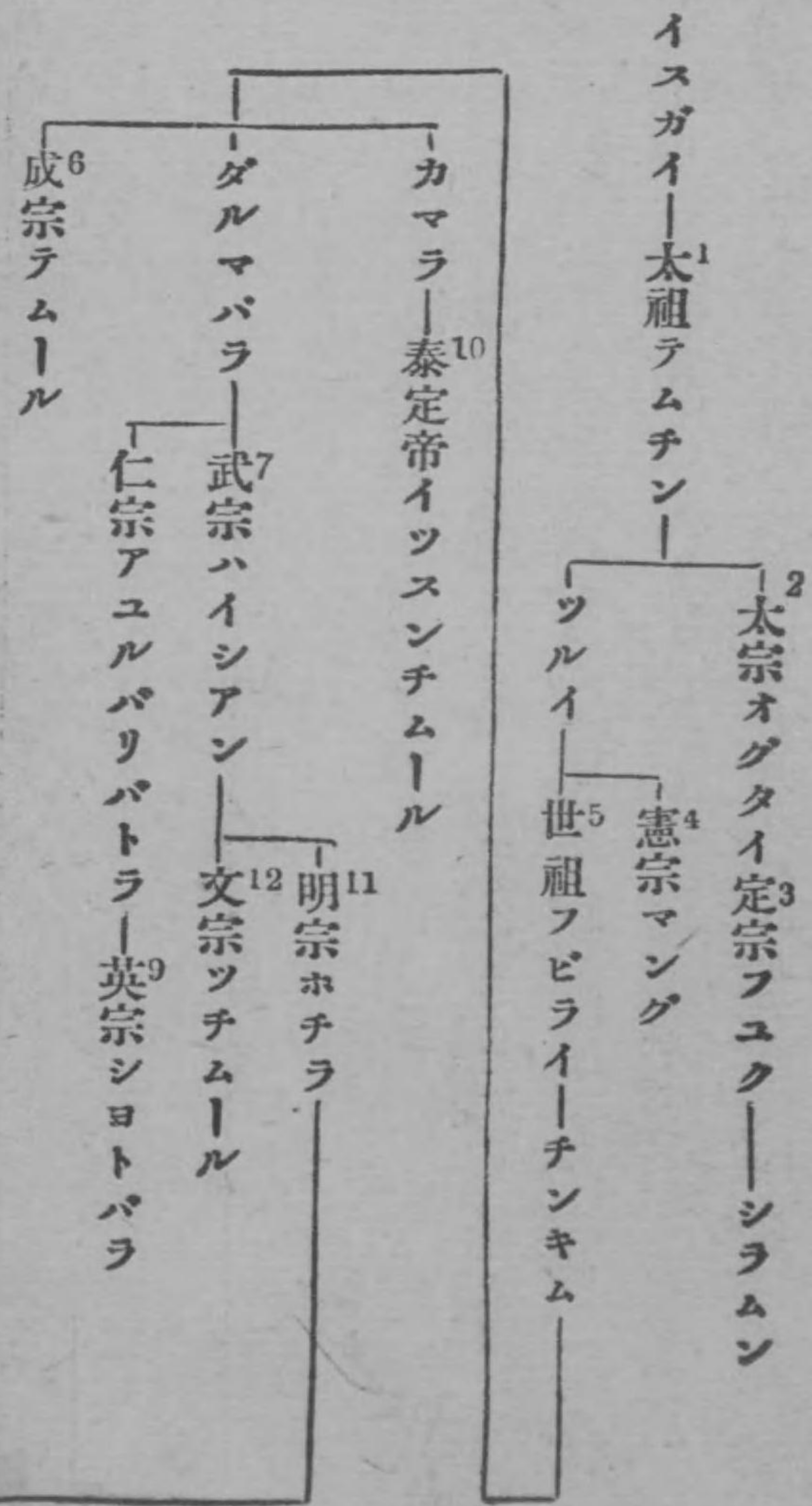
佛教の隆盛此の如くなりけるが、八宗の中禪の一派は最も世に行はれ、仁宗の時禪寺を汴京に設けて僧懷璉を主となし、祖印・契嵩の如きも亦名高かりき。神宗・哲宗の代に至りては、名僧の輩出するもの愈々多く、就中淨源は華嚴宗中興の祖となり、又慧龍は禪宗黃龍派の祖となれり。かくて當時の縉紳學士は皆な僧と交りて禪書を編きしが故に、其の思索に其の創作に、佛教の影響を受け、益をなせしこと少なからざりき。是等も亦佛教の流布を助成せしものあるが如し。徽宗の時道教を崇奉し、寺院を改めて宮觀となし、佛を太覺金仙となし、僧を德士とし尼を女德士となせしが、幾何もなくして舊に復せり。南渡の後は國用多端なりけるを以て、僧尼に勅して丁錢を納め!

め、或は僧牒を賣つて軍資に充てければ、其の勢又以前の如くならず。元に至りては政府自ら之を尙びしが故に、甚だ盛んなりき。

第十五編 元明史

第一章 元

元世の系



14 順帝トハンチムール  
 15 アユルチクダラト  
 16 トグスチムール  
 13 寧宗イリンチバン

20  
コンチムール

一 蒙古の勃興

蒙古は一にモンゴルとも云ひ、唐の室韋の一部にして女眞の北に在り、二大部に分れ  
 たり。一はニルンと稱し他の一をヅルルキンと云へり。前者には二十姓あり、後者に  
 は六姓ありき。就中乞要孛兒只斤なるもの最も尊ばれたり。其の原住地は詳かならざ  
 れども、或はカスピ海方面より來れるものなりとの説もあり。西紀第八世紀の中葉頃  
 エルゲネクンの險山を發して、幹難、客魯連及び土拉三河の水源地方不兒罕山附近に移  
 住し、布爾特齊諾を長として遊牧の部落をなしけるが、其の民は慄悍にして善く戦ひ、  
 夜中と雖も能く物を視、鮫の皮にて甲を作り、以て流矢を防ぎたり。

其の後八世を経て朶奔蔑兒干に至り、其の種族漸く多く繁殖し、其の子孛端察兒は西

紀十世紀の初めに生れ、其の孫茂年土敦の死後國勢一時衰へしが、幸ひ一子海都生存し  
 ありければ、僅に國祀を續け得たり。海都の後ち伯齊豁兒多黑申を経て、合不勒汗に至  
 り、勢ひ強大なりければ、金の爲めに忌まれて殺されぬ。其の子把兒塔把阿禿兒に四子  
 あり。第三子を也速該把阿禿兒と云ふ。其の時國勢益々盛大にして附近の諸部落を併  
 せ、殊に塔々兒部と善からざりし爲め、殺されて長子鑣木眞其の後を襲ぐ。

鑣木眞は時に年漸く十三なりければ、父に服屬せし諸種族も概ね離散したるが、母の  
 盡力に依りて漸く歸還する者多く、次いで自ら一萬三千の兵を隨へ、未だ服屬せざる十  
 三部三萬の兵と荅蘭巴勒陽平原に戦ひて大捷す、之れ即ち十三翼の戦なり。其の後  
 數年の間は鑣木眞は種々の手段を以て其の勢力を土耳其・蒙古・タタールの間に扶殖し  
 以てゴビ沙漠以北のケルラン・セレンガ兩河の間に於て南は沙漠、北はインゴダ河畔ま  
 で、大に其の領域を進めたり。

光宗の紹熙四年に、偶々タタール部の金に叛きけるが、豫て當時の形勢上、金と結ぶ  
 の得策なるを知りし鑣木眞は、直ちに金師と會約してタタールの會長蔑古眞薛兀勒國

を滅ぼし、此に於て金は其の功を嘉し、札兀忽里の號を授けたり。札兀忽里は即ち招討使の義にて、鉄木眞は年三十二なりき。これより西方セレンガ河畔の蔑兒兀部を破つ、次いで又北方バイカル湖附近の泰赤烏を亡ぼし、又南の方、沙漠附近の客列亦部を亡し、汪罕を殺し、更に其の翌年には、西の方、乃蠻の太陽汗を杭海山の麓に殺したり。

斯くて蒙古は附近の遊牧諸部落を征定して、悉く皆な自國の法律の下に服従せしめ、其の新たに得たる權威に對しては、相當の稱號を帶ぶるの必要あるより、西紀千二百六十年即ち南宋の寧宗開禧二年の春、ナオン河の上流近くに所屬の各長を集め、大集會を催して大汗の位に即き、成吉思汗と號せり。時に成吉思は年四十四、元の太祖と稱するは即ち之れなり。

成吉思汗は、其の後數年の間に或は黠曼斯を諭して來貢せしめ、或は西夏を攻めて其の主李安全を降し、次いでウイグル及びカルルクを併有したり。かくて附近の諸部落は悉く其の有となりければ、此れより力を傾注して金の征伐に志したり。

其の時金は章宗既に死して第五世、世宗の子にて後の廢帝、濟位に即き、使を成吉思汗に遣して其の即位を報じ來れり。然るに濟は柔弱にして將士の心を失ひ、金の國勢漸く衰へたるを知りければ、成吉思汗は其の使節を辱め、其の君を罵倒し以て挑戰したり。かくて其の子求赤、察合台、窩淵台、拖雷を從へ、道を分ちて兵を進め、野孤嶺を破り、西京を抜き、東は平澤より南は青滄に至り、臨潢より遼河を過ぎ、忻代に至るまでの諸州を降し、遂に居庸に入りて其の守將を走らし中都に迫りて河北、河東の諸州郡を取る。

時に遼東の契丹は、耶律留哥の下に叛きて蒙古に降り、タンギーは西方より攻めて金の境を侵しければ金の諸將は成吉思汗の威名を聞き、争ひ來つて降りたれば、金の領土は餘す所僅に直隸省に在りては大名、公定、山東省に在りては青鄆以南の降らざるものあるに止まりき。

寧宗の嘉定七年に、金は蒙古に使を遣はして和を請ひ、廢帝永濟の女及び童男女五百と馬三千、並びに金銀帛各萬匹を蒙古に贈りければ、成吉思汗は師を還し、居庸關の北に赴きて俘虜を放てり。

此くて講和成立せしと雖も、金は國傾きて兵弱く、財用頗る乏欠せり。かくて中都の守備困難なりければ、大赦を令すると同時に都を汴に移す。其の時大臣等は北地を捨つるに等しければとて、之を諫めしが聽かざりき。成吉思汗は魚兒深湖に在りて夏を過さんとせしが、金の遷都を耳にして大に怒り、既に講和成れるに遷都するとは、之れ正しく疑心あるが爲めなるべし、偕ては講和と見せかけて我れに款を通じ、其實體は南侵を圖れるなるべしとて、一舉にして中都を衝きて之を陥れ、別に木華黎を將として金の遼西の諸州郡を下して北京以下を抜き、更に他の將サムハは進みて汴京附近を侵略せり。

金は大に驚き和を請ふこと切なりけるも許さず、成吉思汗北歸するに及んで、木華黎を留めて征金都督となし、太行の北、朕自ら經略せん。太行の南卿勉めよと命じたり。これより木華黎は連年兵を用ひて、大に金の諸州郡を占領し、死するまで兵を解かざりき。されば今や金の領土は北は正定を保ち、東は黄河を境し、西は潼關を扼して僅かに衛り、蒙古は殆んど黄河以北一帯の地を領有するに至れり。



代時興物の古蒙

### 二 成吉思汗の西征

これより先き契丹の滅亡せし時、天祚帝の一族耶律大石は遺族二百餘人を隨へて、陝西省の北西地方に入り。此地は素と遼の版圖なりければ、國人喜び迎へ、従ひてトルキスタン方面に向ひぬ。此に於てウイグル・ホラスム等の諸國を服屬せしめ、ゴビ大沙漠ジフン大河、西藏・西比利亞の間に國を建て、西紀千百十二年にグルハンの號を取り、ペラサグンに都を築め、佛教を奉じて國教となし、心を文教に用ひければ國力



蒙古軍の陣

次第に充實して、特に金に對して報復の師を起さんと謀り、志遂げざるに歿したり。之れ即ち西遼の徳宗天祐帝といふ。ハラヒタイ國此處に起れり。

其の孫、天禧帝直魯台は政を親ら執りしが、恰かもナイマン最後の君タイヤンハンの子屈出律は此の時代に來り投せり。當時西遼は國威振はず、屈出律がナイマン及びメルキの遺族を以て帝の爲めに盡くさんことを請ひたるは、有力なる援助なりければ、大に喜びて之れに公主を妻はし、クチウルクハンの號を授けて頗る款待せり。

然るに屈出律は勢力強大なるに及びて、西遼の帝位を奪はんと志し、ホラスムの君スルタンムハツメトと謀を通じて西遼を挾撃し、遂に之れを亡ぼせり。此に於て西遼は帝を稱すること四世、八十八年餘にして亡びぬ。

屈出律既に西遼の禪を受け、將に蒙古を侵して舊怨を報せんとせり。此に於て成吉思汗は其の將哲別を遣はして討伐せしめ、屈出律を巴惕客薛に捕へて其の首を刎ねたり。此れが爲め成吉思汗の領土は西遼の故土に及び、カシウカル・ヤルカント・ホタン等何れも實業的人民にして、イスラム教の信奉を許されたれば、孜孜として農商工の業を勵み、蒙古地方の産物を以て、支那及び印度の産物と交換し、國勢頗る隆盛を極めたり。而して其の西方を望めば、其の境は直にホラスムのスルタンムハメツトの領域に接せり。野心勃勃たる成吉思汗は、即ち此に西征の師を起す。

ホスラムは、セルチウク、トルコ帝國敗餘の地に起れるものなり。西域諸國は宋代に至りて幾度か、革命をなせり。唐時代のベルシヤ即ちササン朝はサラセン即ちアバス朝に代りしが、西紀九世紀の末、サマン朝其の東境に割據し、ブハラを都として北は天



山の西麓より、南はベルシヤ灣、印度の北境に達する地を領し、次いで西紀十世紀の末に其の臣セベクテキンと叫ぶ者ガスンに據りてガズニ朝を創め、北はシフンより南は印度のグジエラト、カノージに至るまでを占領し、西紀十一世紀の中頃セルニウク、トルコは部會にトクルルベクを推戴して、ブハラ、サマルカンド附近に據り、ホラサンを取りて都をニシヤブルに定め、バグダットのハリファアより、エミール、アル、オムラの稱號を賜はり、切りに軍兵を進めて、東は支那の西境より、西は希臘帝國の首都に達する迄の大版圖を領有するに至れり。これをセルチウク朝と呼ぶなり。

由來ホラズムはセルチウク朝の一領土たりしも、ヌシユテキンと云ふもの始めて此地に知事となり、其の子クトブウツチンムハメトに至りてホラズムシアアの稱號を得、更に孫のタカシウの時、イラク、ア、デエミを取り、其の子アライウツヂンムハメトの時班勒紇及び也里を奪ひ、呼羅珊の主となり、マザンデラン・ケルマンを降參せしめ、貢を西遼に入れたりしが、其の後クチュルクと共同し、西遼の地を分割し居をサマルカンドに移し、其の他オクシヤナを併せ、グルを奪ひ、其の領土東北はシルダリアより、東南

はインドス河に至り、北はアラル・カスピ兩海より、西北はアデエルハイヂヤンに達し、其の西隣はベグダットに境し、南は印度洋に濱するに至り、中央亞細亞の殆んど全部を包含するに至れり。

ムハメトは其後イラクアデエミを鎮定し、破竹の勢にてアツハス家のハリファアをバグダットに攻めんとしけるが、時恰かも蒙古との交渉を生じて、其の進軍を留めたり嘗てムハメトのボハラに在陣するや、成吉思汗の使者來りて、爾今汝を最愛の子となさんと云ひ、父子の關係を結ばんとせしが、ムハメトは之を喜ばず。偶々蒙古の隊商四百五十人來りてシフン河畔の訛打刺に入りけるが、此の地の知事之を抑留してムハメトに告げ、蒙古の間諜なりと云ふ名義の下に、悉く之れを殺害したり。

成吉思汗はかくと聞きて大に憤慨し、直に馳せて山上に至り、三晝夜の祈禱を捧げ、神明の加護に依つて此等の不幸なる民の爲めに仇を報じ、暴虐なる君主を膺懲せんことを誓ひたり。かくて西征の口實既に備はりたるも、當時未だ屈出律の鎮定されざるありければ、先づ使を遣はしてムハメトの罪を問へり。時にムハメトは其の使者を殺

し、自ら兵備を整へて待ち構へり。

雖て蒙古は屈出律を征服して其の地を收め得たれば、金征討の事はムフリに委ね、更に西紀千二百十八年即ち南宋の寧宗嘉定十一年に、諸子諸將を集めて大評定を開き、以て西征の議を謀り、金山以西の險路を開きて軍用道路を通じ、準備全く整ひければ、其の翌年親ら兵を率ゐて西域に進軍したり。

斯くて總軍實に六十萬、イルチシウ河源の地を發し、金山を踰ね、沙漠を経て所謂陰山を攀登し、サイラム湖畔、ボロタラ河谷間の不刺城河を過ぎ、阿力麻里を経て亦列河を渡り、チユイ河畔なる西遼の故都フズオールド・タラス河附近の塔刺思城シフン河畔の苦蓋城を過ぎ、西北してオトラル城に到達したり。

乃ち軍を分ちて四隊となし、第一軍はチアカタイ・オクタイ之を率ゐてオトラル城に向ひ、第二軍は右翼にしてチウナ之を率ゐて既的に進撃し、第三軍は左翼にしてアラクスクツドカイを將としてベナケトに向ひ、第四軍は即ち中軍にして成吉思汗自ら之れを統率し、直に蒲華を衝き、ムハメトをして外オクシアナとの聯絡を絶たしめ、以て

他の諸城の援に赴くを妨げしめんとせり。

斯くて諸軍の向ふ處風靡せざるはなく、ブハラ・サマルカンド相次いで陥落しチエベスペタイの二將はムハメトを追うてカスピ海中の一孤島ペラサグン島中に死なしめたり。ムハメトの長子ヂエラルエツチンは遁れて、ガニズに退却せり。

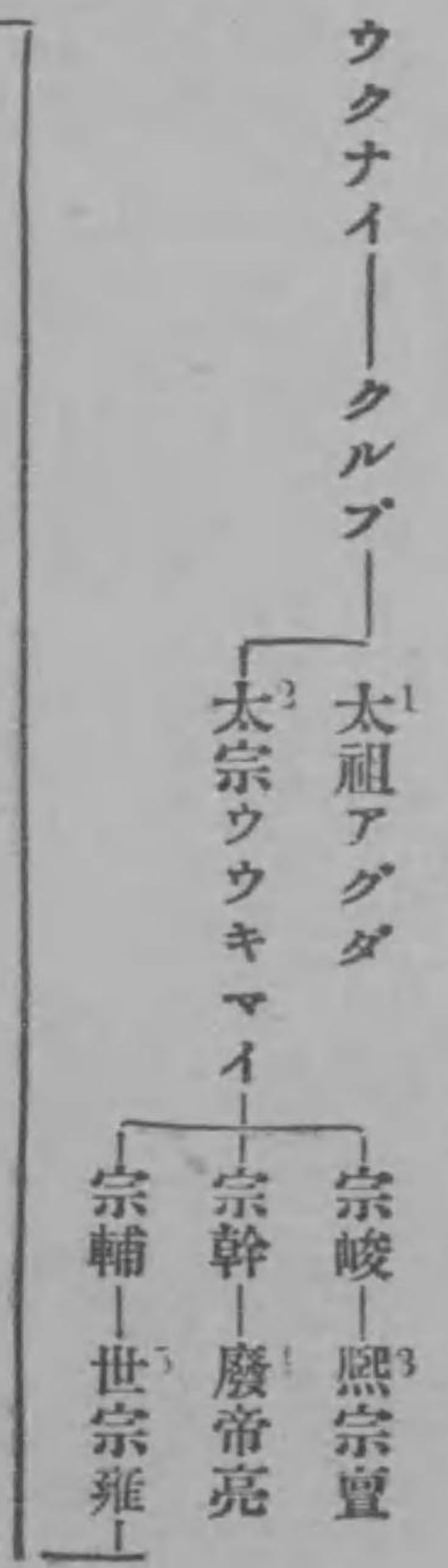
かゝる間にチウチ等は兵を率ゐてホラズムの一都城烏爾韃赤を圍みて之を水攻にして陥落せしめ、以てホラズムの各地を平定し、ツルイはメルフ・ニシアブル・ヘラト等を陥れてホラサン地方を鎮定し、チウチ其他の諸子は兵を成吉思汗に併せらる。

成吉思汗は更に兵を動かして、チエラルを追ひて、ヒンヅウイシユを越えて印度に入り、インドス河畔に於てヂエラルの軍に迫りて之を遙かに彼岸に追へり。ヂエラルは單騎テークに奔りて其の奴隸王朝に依りぬ。成吉思汗は敢て敵を追窮せずして振旅の途に上り、ボハラに於てチエベ、スプタイ兩將軍の深く露西亞に入りて、南方露西亞を征定して歸るに會へり。兩將はムハメトを竄死せしめて、其の目的は達したりと雖も、更に波斯のイラクアヂエミ・アチエルバイチアンを平定して、打耳班を経てア

ランの諸部を破り、又當時南露西亞に割據せしキブチャクの軍及び、露西亞の聯合軍をカルカ河に破り、クリム地方に入り、西紀千二百二十三年即ち寧宗の開禧十六年に露西亞の東北、ブルガンを侵し、轉じてカスピ北岸にあらはれ、キルギスの草野を過ぎて師を旋せり。かくて成吉思汗の西征は終りを告げ、更に東方に師を動かすに至れるなり

三 窩淵台金を滅す

金の世系



成吉思汗は六十六歳を以て疾んで死し、第三子窩淵台襲ぐ、之れを太宗と云ふ。太宗位に即くや、太祖の遺圖を奉じて世界征服の雄志を遂行せんとし、其の準備怠りなく、

先づ三軍を發して、第一軍は綽兒馬罕之れを率ゐて波斯に入り、當時印度より還り來りて故國を復せんとせしチエラルウツチンを討ち、他の一軍はギユクタイ、スノタイ之を率ゐ、チウチの征定すべかりしキブチャク、サカシン、ブルカルを征定し、他の一軍は太宗自ら之れを統率してツルイ以下宗族諸將と共に、金を征服するの途に上れり。

時に金は蒙古と難を構へてより二十餘年に亙り、西紀千二百二十八年即ち南宗の理宗の紹定元年に勇將完顔陳和商が一度び蒙古兵を撃退したれば、其の後二年を経て太宗の軍兵既に陝西に入り、鳳翔を抜き、潼關を降し、長驅して汴京に向ひけるが、城固くして容易に抜くべくもあらず、即ち紹定五年に金に降伏を勧め、金は曹王を遣はして人質たらしめ、かくして蒙古軍は河洛に退きぬ。

然るに金の飛虎卒等蒙古の使者三十餘人を捕へて殺害したるに、金帝は其の罪を問はざりければ、和議忽ちにして又破れぬ。當時汴京は糧食盡きて救援絶わ、勢益々危態に瀕し、加ふるに清銳なる將卒俱に盡きて又如何ともすべからざるを以て、金帝は汴を捨て、河北に走れり。蒙古が宋と約を結びて金を挾撃せんとせしは、恰かも此際な

りき。

蒙古の使者は宋の京湖に來りて、金を挾撃せんことを議し、京湖の制置使史嵩之は直ちに之れを容れ、朝臣又皆な復讐の軍を擧ぐべしとなせしが、獨り趙范のみは喜ばず、宣和海上の盟は、其の初め甚だ堅かりしを、遂には禍を招けり、省みざるべからずと奏しけるが、理宗は之れに耳を藉さず、此に於て蒙古は河南の地を與ふることを約せり。宋は約によりて其の將孟珙を遣はして兵を進め金帝は逃げて蔡州に入り、兵勢一時稍々振びしも、蒙古・宋の聯合軍之れを圍むに及びて遂に陥落せり。かくて金はアグダの帝號を稱してより以來、九世二十年にして亡ぶ。

四 蒙古歐洲を征す

太宋は金より凱旋するに方り、支那の技術家を伴ひ還りて新都を營み、之れをオリヅハリクと名附けたり。周圍十四五丁に互りて土壘を築き、其の内に新宮殿萬安營の壯麗なるを造營し、太宗は此處に盛宴を張りて、前代の遺臣耶律楚材の功を頌したり。斯くて太宗は今や専ら力を養ひて大に西征の師を起さんとするの時に際し、東の方

高麗の離叛せるありき。高麗王高宗旺は、權臣崔竦の爲めに國政を亂されて國威失墜したるが、蒙古の部將哈眞の爲めに威服せられて太祖に降りぬ。然るに紹定五年に及び、太宗の使者を斬りければ、蒙古の將撒里塔兵を進めて殆んど其の四十城を抜き、守備隊を置きて還りぬ。然るに其の翌年に至り、高麗又其の守備兵を殺しければ、撒里塔又兵を進めて戦死し、太宗は又別に使を遣はして其の罪五ヶ條を數へて之れを詰れり。高麗王これに應せず、唯邊境の守將は、形勢非利なるを見て、みな蒙古に降を乞へり。此に於て會議の結果、蒙古・支那の聯合軍は高麗に攻め入り、京城を陥れければ、高宗は難を江華島に避けけるも、遂に降りて入貢を約せり。此に於て蒙古は王子を人質となし、臣と稱せしめたり、此れにて東方漸く平鎮せり。

次いで太宗は日頃の雄志を果たさんものと、西征の大評議を開き初めは、太宗自ら師を率ゐて遠征の途に上らんとせしが、諫止せられ、チウチの子拔都は家族の中年長なり、ければ推されて總督となり、スプタイ將軍は太宗代理と云ふ名目にて軍を監し、幹魯察昔班・邦答兒・貴由・蒙哥等皆な從軍せり。其の總勢實に五十萬と稱せられ、西紀千二百

三十六年愈々出發せり。

拔都の所領はヤイクに至れるを以つて、先づ其の近傍を討ちしもの、如く、翌年にはブルカルの國都焼かれ、同年末には烈野贊を陥れ、當時の一寒村たりしモスクバを取り、又北露西亞の大都會たりしウラジミウルを陥れ、大公を殺し、以て其の地方を平定したり。かくて大都會を降せしもの十有四ヶ所に及び、更にシタの役に露西亞の勇將等を殺し、又北北西に進みて、ノブゴロド・ウエルスト附近に迄至りたり。此の附近一帯は沼澤多くして猛獸野に充ち、軍頗る困難なりければ、更に方向を轉じて東南に退き、北露西亞略平定したれば、更に轉じて南露西亞に向へり。此處には先きに歸服したるキブチャクフバ叛せりとの報ありければ、マング等ウオルガ河畔を搜索して其の會長バチウマンを河口の島に攻めて之れを殺し、アストラハン近邊の廣原にては、大にキブチャクの軍を敗りて其の大半を歸順せしめ、或はホンガリアに入りてキリスト教を奉じて其の國人となり、又は死せり。而してマングはフユクと共に召されて本國に歸りたりしが、拔都の本際は南露西亞征定の爲めに進軍し、ペレヤスラウル・ヂエル

ニゴルを攻めて遂に乞瓦綿客兒綿を圍み、矢は天を蔽ひて暗く、槍は相接して折るとも形容せらるゝ如き激戦をなし、守將ドミトリウを捕虜となせり。

斯くて蒙古兵は、今の露西亞地方を去りてポウランドに進軍したり。蒙古入寇當時に於けるポウランドは國勢頗る振はず、ピアスト朝の君ボレスラ五世君臨しクラカウに都して僅に其の附近サンドミエシウを領有するに過ぎざりき。蒙古軍は進みてクラカウを陥れ、國王を初め國人皆なホンガリア若くは獨逸地方に隠れしかば、蒙古は更にシレジアに入り、ラチポールにてオウデル河を渡り、リウグニツツに向ひて此處に集合せる歐羅巴の聯合軍三萬とオウデル河の支流なるナイス川の原野に對陣し、大に之れを破りてモラビアを攻略するもの八日にしてポヘミア・オウストリアに向つて進軍せり。

かゝる間に別働軍はルウマニア・トランシルヴァニアを平定して來り會し、全軍匈牙利に侵入す。かくてマジアル人の王アルバト朝の君ベラ四世とブタベスト附近のサヨラ河に會戦して敗走せしめ、遂にドナウの水を渡りてストアゴニウムを攻め、内城未だ

全く陥らざるに、西紀千二百四十一年太宗の訃傳はりて蒙古軍は師を還すの止むなきに際會したり。

かくの如く蒙古軍の西征は、歐羅巴を震撼せしめけるが、幸にして蒙古本土の凶事は、歐洲諸國の禍を輕うせしめたり。されど十三世紀の頃には、歐羅巴人は常に其の來襲を怖れ羅馬法士の如きは、屢々蒙古に對して十字軍を起さんと欲し、諸侯伯又之に應せんとしたることあるが如し。

五 宋亡び元興る

旭烈兀が西征の事に當れる間、憲宗は弟に命じて漠南を總治せしめ、府を金蓮川に置き、姚姬の謀に依りて經略司を汴に置き、兵を分ちて屯田せしめしが、遂に兵を別ちて三道より並び進んで大理を撃てり。かくて西紀千二百五十三年臨洮より山谷を經行し、二千餘里にして楊子江の上流なる金沙江に至り、進みて大理城に迫つて大に其の兵を破り、其の王、段智興を虜となし、兵を別ちて進んで吐蕃に入り、其の酋長を降す。かくて兵威加はりければ皇弟忽必烈は師を還して諸夷の未だ歸順せざるものを討てり。

西紀千二百五十五年にはスプタイの子兀良哈台は、吐蕃より進みて白蠻・烏蠻・鬼蠻の諸部を攻め、到る處靡靡せざるはなかりき。かくて戰勝の餘勢に乗じて西南夷は悉く鎮定し、五城・八府・四郡・蠻部を併せて三十七を獲得したり。

西紀千二百五十七年には、ウリアンカタイの兵交趾に侵入し使を遣はして降伏を促しけるが、皆な囚はれたり。此に於て兵の洩江を渡るに及び、交趾人は敗走し、其の王、陳は海島に走りければ、其の城を屠りたり。かくて滞在すること九日に及びけるが、炎暑燬くが如くにして耐難く、師を引還せり。

此に於てか西南諸國は概ね平定したれば、憲宗は其の弟阿里不哥をして、ハラホルムを守らしめ、南宗の理宋の寶祐五年に自ら將として南侵を謀れり。四川省の諸城は相次いで降り、ウリアンカタイは南より靜江を掠めて遂に潭州を侵し、一方憲宗は合州を圍み、守將王堅力戰して防ぎ、爲めに蒙古兵は屢々激戰を交へたるも、勝つ能はず。憲宗は陣中に病歿したり。

時に忽必烈は全軍を擧げて淮水を渡り、鄂州を圍みければ、宋は荆湖の宣撫使たる賈

似道を遣はして救援せしめたり。されど蒙古軍の攻撃愈々急にして、城中の死傷者實に一萬三千に上りければ、似道は大に懼れをなし、即ち密に宋京を遣はし蒙古の營に至りて臣と稱して幣を納れんことを請はしめたり。されど忽必烈は許さざりき。時に合洲の守王堅は使を遣はして憲宗の死を報じ來りければ、似道は再び宋京を遣はせり。忽必烈も亦アリクブカの諸將士に推されてハラホリムに帝位に即かんことを知り、腹背敵を受くるの非なるを悟りて、宋と和議を結び、江南の地を割きて臣と稱し、且つ毎年銀絹各二十萬を納れんと云ふ提議に應じ、兵を解きて北に歸れり。されば鄂州、合州の圍解けてウリアンカタイ亦潭州の圍を解きて北に歸りければ、賈似道は和を議して臣と稱し、歲幣を納むるなどのことは隠くして上表し、諸路の大捷を云ひて鄂の圍み始めて解け、危き宗社も復た安きを得たり、實に萬世無疆の體なりと奏せり。帝は似道の功を嘉し、召して朝に返らしめ、似道はこれより眷々として至らざるなく、相となるに及びて權勢中外を傾け、多くの群小を用ひて法制を變更せり。

○**忽必烈は景定元年に、開平に至りて自ら大汗の位に即き、郝經を遣はして前約を**

促せり。似道は謀の洩れんことを恐れて、遂に之れを眞州に幽し、入見歸國共に之れを許さざりき。かゝる間に忽必烈はアリクブカの亂を平定し、都を燕京に移して大都となし、開平を上都となして遂に又南侵の謀を巡らせり。

○**其の時宋の理宗は在位五十一年にして崩じ、度宗位に即きしが、賈似道專政の振舞多く、爲めに正人は日々に斥けられて、群小並び進み、國勢頗る振はざりき。先きに瀘州を以て叛き、蒙古に降れる劉整は、蒙古に告げて曰はく、宋人は只呂文德を恃めるのみなり、されど利を以て誘ふことを得べしと。乃ち蒙古之れに隨ひ、鄂に赴きて文德に互市を通せんことを請へり。文德は朝許を得て之を許しけるに、蒙古兵は進んで城内に入りたれば、文德大に驚きしも、後悔先きに立たず。劉整は又忽必烈に策を進め、若し襄陽を復して漢江に浮ばゞ、忽ち宋は平らぐべきなりと。即ち其の說に隨ひ、征南都元帥阿求に命じて襄陽を経略せしめ、險に據りて築城せしめ、水陸の便を通じて、宋人の糧食を斷つのを講じ、七萬の精兵を率ゐて襄陽に迫る。**

○**次いで蒙古は史天澤を遣はし、兵を率ゐて攻圍軍を援けしめけるが、宋は張世傑、夏**

貴・范文虎の諸將を遣はしたるも皆な敗走し、襄陽の守將呂文德は怨を抱いて死したり。かくて襄陽は包圍せらるゝこと五年に及びけるが、賈似道は巧みに往援を避け、守將呂文煥遂に蒙古に降れり。

これより先き蒙古は咸淳七年に、其の大保劉秉忠の請に依りて國號を攻めて元とな

# 忠孝

天 文 祥 の 筆 蹟

し、更に詔を下して賈似道の背盟と信使を拘執せし罪とを詰問し、其の將史天澤は伯顔をして大舉南侵せしめたり。天澤は途に病みて歸りけるが伯顔は大軍を分ちて兩道と

なし、襄陽より漢に入りて江を渡り、更に呂文煥を舟師の將として前鋒たらしめ、又別將博羅觀をして淮西に出て、揚州に赴しめ、又劉整をして騎兵に將として先行せしめ

たり。

既にして伯顔は鄂に入りて復た軍を分ち、荆湖南を取り、宋將范文虎を降し、賈似道は罪を以て免せられ、天文祥・張世傑等諸國勤王の師を集め、入援せしも、徳和元年に至りて伯顔遂に建康に侵入し、張世傑等能く戦ひしと雖も防ぐこと能はず。かくて元軍は遂に江を渡りて兵を三隊に分ち、以て三道より同時に東に下り、水陸並び進みて臨安に會することを期したり。

其の時宋將李庭芝は、揚州に在りて死守し、文天祥は説をなして曰く、淮東は壁固く城全けれど未だ必ずしも智謀完からざれば、宜しく勝に乗じて長驅するに若くはなし、若し最初の一戦に於て敵の鋭鋒を挫きなば、彼や畏懼して退却すべし、淮師に命じて其の後を断たば國尙ほ保すべきなりと。

然るに陳宜中等の廷臣は此の説に従はず、遂に表を奉じて元に降り、元の三路の師皆な會し、臨安に入りて恭宗及び理宗・度宗の兩后を捕へて北に去れり。此に於てか、兩淮・江西・湖南及び四川・陝西の諸州郡は相次いで皆な陥りぬ。かくて宋は亡びたれど



恭宗の兄益は弟、廣と共に先きに温州に走り、陸秀天、蘇劉義等相次いで道に追ひ、陳宜中、張世傑等を召し、益王を奉じて府を福州に開き、宋人の兵勢稍々振ひければ、西紀千二百七十六年益王を立て、端宗となし、元を改めて景炎と稱したるが、元の兵尙ほ來り迫るに會し、海に浮びて潮州の淺灣に遷り、更に秀山に走り、後轉々して占城に逃れんとせり。

かゝる間に文天祥、張世傑等は、屢々兵を出して恢復を謀りしが、遂に元軍を支持する能はず、景炎三年に至り帝は硯州に墜りて崩じ、群臣多く離散せんと欲しけるが、陸秀夫は尙ほ衛王の存するあるを説き、衆と共に之を立て、帝となせり。次いで新會の厓山に移りしが、元將張弘範來りて攻むるに會し、張世傑の兵潰走し、陸秀夫は帝を負ひて海に赴きて死し、世傑は復た兵を收めて占城に赴かんとして海陸山に至り、舟覆りて死せり。而して文天祥は既に五披嶺に捕はれて遂に又宋朝の恢復を謀るものなし。此に於て宋は太祖國を肇めてより十八代、三百二十年にして滅亡せり。

## 第二章 世祖忽必烈

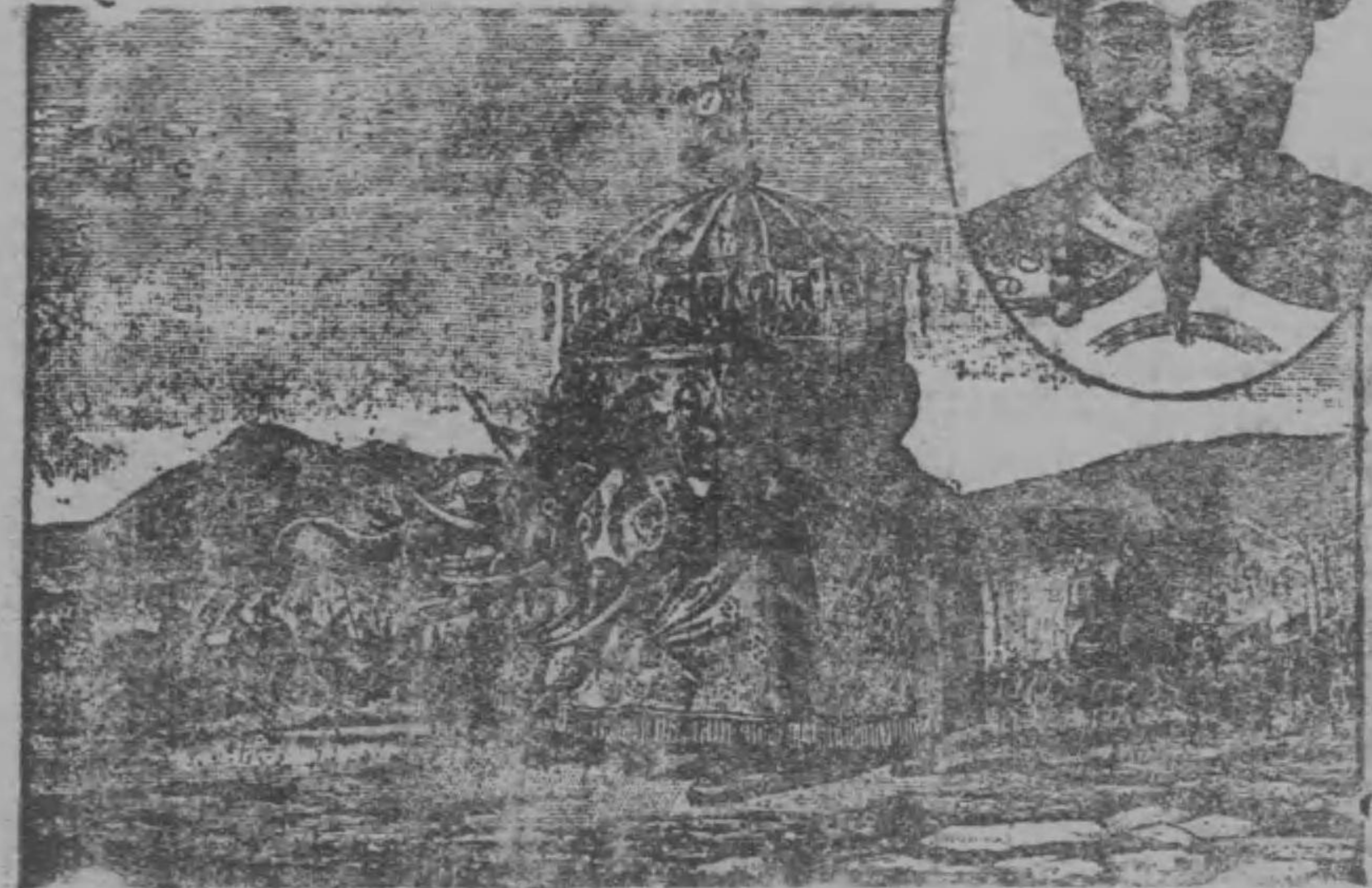
### 一 領土擴張

當時朝鮮は高宗既に死して、其の子煥は世祖に依りて立てられたり、これ即ち元宗なり。然るに至元六年に至りて、權臣林衍と云ふもの之を廢して弟安慶公温を立てたり。此に於て世祖は趙壁を遣はして其の罪を問はしめんとしけるに、衍既に死したりければ、止むなく慈悲嶺以西の地を收めて元の領有となし、元宗を復して衍の子及び其の親族を誅せり。至元十一年元宗歿して其の子忠烈王即位に即き、世祖は己れの女を之に妻はせて遂に外藩となし、以て之を介して我が日本國を招致せんと試みたり。并は後に詳記する處の如し。

世祖は又憲宗の遺旨を奉じて、常に南征の事を怠らざりき。即ち先きに征服したる大理國の南に緬甸あり、古の西南夷にして、當時阿羅漢、白古、暹羅を併せ、南方に雄飛せしかば、元は屢々使を遣はして朝貢を徵せんと試みしが應せざりき。加之衆を



應必烈と其の出陣



率て屢々邊境を脅やかせり。此に於てか世祖は兵を遣はして之れを討ち、其の共二百餘を降して還りたり。

世祖は日本に志を得ざるの時、納速丁は緬より還り、貝さに討伐すべき意を言ひければ、遂に諸王相吾答兒をして諸軍を督せしめ以て緬を討つ。相吾答兒等道を分ちて緬の江頭城を攻め、之れを破り、遂に使を遣はして其の王を招諭せんとしたるも應せず。此に於てか更に攻めて大公城を抜き、又

豫て元に降らんと欲せし金齒以下西南夷十二部のもの、緬に制せられて達する能はずりしが、此の二城に勝ちしかば、遂に共に來降せり。其翌年緬甸王來降しければ、蒲甘緬城に邦牙宣慰司を置き、兵を以て守備せり。之れと前後して交趾占城以下の南諸方國を降服せしめたり。

占城は交趾の南に當り、一度び元に附屬せしが故に、峻都をして其の國に就き、省を建て、これを撫治せしめしに、後使臣の其の國を經る者皆な捕へられければ、世祖大に怒り、峻都に命じて之れを討たしめたり。

時に占城は表面歸服を求むるが如く見せて師を欺し、私かに其の捕へし使者阜甫傑等百餘人を殺せり。峻都等聽て其の詐りなるを覺り、兵を遣はして之れを攻め、轉戦して城下に至りしも、阻隘にして進撃する能はず、賊兵其の歸路を絶てり。此に於てか死を決して奮戦し、漸く血路を開きて出づることを得、峻都等遂に引き返せり。

斯くて世祖は彼等が叛服常なきを大に怒り、至元二十一年第九子脱歡を往かしめて峻都の兵と會ひ、進みて之れを撃たしめたり。時に安南は謀を占城に通せるを以て

道を其の國に借り、且つ其の糧を徴して軍に給せしめたり。既にして脱歡は安南に達せんとしけるに、安南王は道を別ちて防備せり。脱歡は屢々書を送りて道を假らんことを求めけるも聽かず、益々兵船を修めて却つて敵に備ふるの準備をなせり。脱歡は間に乘じて橋を急造し、富良江の北を渡りて、安南王と戦を交へて大に之れを破りたり。而して此の戦に安南王は何れにか逃走し、其の弟益稷は來降せり。

かくて安南兵は敗れけれども、其の勢尙ほ未だ盛んにして、偶々盛夏の候軍中惡疫起りて、占城に到底達し得べくもあらざりければ、兵を回さんことを謀れり、然るに安南兵は此の機に乗じて追ひ來り、元の將李恒は毒矢に中りて斃れ、唆都の軍は脱歡と相去る二百餘里に及び、爲めに脱歡の軍は歸れるも、唆都の軍は未だ之れを知らざりき。かくて唆都は安南の陣營に突貫して戦死せり。

至元二十四年に至り、又脱歡に詔して諸軍を督して、兵を分ちて三道水陸より並び進撃せしむ、合戦已に十七合にして連捷し、餘勢に乗じて、深く其の境に入り、安南王(陳白)は遂に海に走りぬ、其の翌年脱歡復た兵を遣はして安南王を海上に攻めしむ、

時に安南王は復た使を遣はして降を請ふ。然るに安南王は來降せずして海口に據りければ、アバチ衆を率ゐて之れを攻めたるが、惡疫に罹る將士多くして進むこと能はざりき。

時に安南王は三十萬の兵を集めて東關を守りて脱歡の歸途を遮りければ、日に數十合の合戦を續け、敵は天險に據りて盛んに毒矢を放ち、アバチ以下戦死し脱歡は間道より還りぬ。

されど安南王は使を遣はして入朝し、金人を貢して己が罪に代へんことを請ふ。世祖は脱歡功なくして還れるを以て、出で、楊州に鎮せしめ、終身入覲することを許さざりぬ。

世祖は大に怒りて自ら安南を征せんとせしが、諫止せられ、張立道を遣はして貢を急がしめたり。時に安南王陳は既に死して其の子位に在りしが、張立道の説に感じ、至元二十九年上表して罪を謝し、以て歲貢の禮を修めたり。

それより先き招討使揚庭璧を遣はして、三度び但藍國を招かしめ、至元十九年に至り

て使をして寶貨及び黑猿を貢げり。かくて南海の諸蕃は凡そ十ヶ國、馬八兒、須門那、僧急里、南無力、馬蘭丹、那旺、丁呵兒、來來、急蘭亦解、木刺蘇刺集、な子弟又は使を遣はして上表して來觀し、入朝するに至り。但し爪哇のみは命を聽かざりければ、至元二十九年に亦黑迷失等を遣はし、兵三萬を以て之れを討ち、其の隣國なる葛郎國をも奪ひぬ。琉球は其の以前に服して、元の國威は殊に南方に輝きしが、成宗の代に至り、緬甸の叛者を援しといふ名目にて雲南の西なる蠻族八百如婦を征して國威を失墜せり。其の蠻族の酋長は八百人の妻女ありしと云ふ。

二 朝鮮を征す

朝鮮高麗の仁宗恭孝王は、先きに金と和を結びてより後、其の子毅宗莊孝王は淫虐なりければ、普賢院の變に遇ひて廢せられ、其の弟明宗光孝王群臣に樹立せられたりしが、郡縣の守將等、前王の爲めに義軍を起すもの多く、内亂日々に甚しかりき。既にして前王毅宗は獄せられ、武臣無權を弄するや、其の跋扈に堪はずして之を除かんと謀るものありしが、謀成らず、罪軍崔忠獻、政を執るに及びて、遂に明宗を廢して、其

の弟神宗肅孝王を立てたり。

此の間、金は常に國事に干渉して高麗の國威は日々に衰頽せり。かゝる間に神宗の子熙宗成孝王に至り、崔忠獻は又樹立の功勞に依りて恩門相國と稱せられ、興寧府を立て、便服に蓋を張つて宮禁に出入し、侍從門客殆んど三千人を算したり。されば熙宗は其の制肘を受くるを憤慨し、之を除かんと謀りしが、謀洩れて紫燕島に流され、明宗の子康宗元孝王を立て、次いで其の子高宗安孝王に至る。時に忠獻ひとり國政を専らにし弊政既に年久しく、荒淫にして又政を省みず、金も亦衰へしが、大遼忽ち入寇せり。

これより先き崔忠獻既に死して、其の子瑒父の後を襲ぎしが、其の專恣なること父よりも甚だしく、政治堂を私邸に設けて政柄を掌握し、百官を免黜し、其の妻鄭氏の死するや、王后の例を以て之を葬りたり。而して蒙古に對する反覆常ならず、嘗て其の使珠古を殺せしかば、宗の紹定四年蒙古は遂に兵を起して高麗を討つ。

かくて蒙古の薩里臺來襲し、龜州を圍みければ、高麗は兵馬使朴犀及び分道軍等を

遣はして之れを防がしめけるも、蒙古の大軍殺到し來りて遂に平州より京に入り、京城四門外に迫る。此に於てか高麗は大に驚き、閔曠を遣はして和議を結ばしめ、又上將軍趙叔昌を遣はして、上表して臣と稱して方物を獻せしめたり。既にして崔瑀は王を脅かして都を江華島に遷して亂を避けんとするや、忽ち物議を招き、蒙古兵を以て來寇せしこと幾回なるを知らず。かゝる間に崔瑀は晋國侯となり、勢ひに依りて威を作り、無頼の惡僧を集めて貨殖の事を講じ、宗室の佞臣を其の私邸に集めて宴を張り、亂舞飲至らざるなし。瑀死して其の子沆後を襲ぎ、暫くにして又權威を弄しければ、國內爭擾甚だしく蒙古の侮を招きしこと少なからざりき。

高宗の晩年に至り、蒙古の車羅大復・散吉大王等又兵を率ゐて來寇し、古和州の地に屯して守將慎執平を殺せり。當時崔氏は三世立つて父祖の如く權を弄し、國內疲弊し、蒼生塗炭の苦に陥りければ、却つて蒙古の來寇を歡迎するものあり、故に和州は概ね蒙古に附屬せり。此に於て蒙古は和州に總管府を置きたり。宗の淳祐元年高麗又蒙古に入貢して和を請へり。此に於て蒙古は高麗王をして親ら入朝せしめ、其の子を質と

なして和漸く成れり。此の年蒙古の太宗崩じ、次いで高麗の高宗も又薨じ、其の子元宗順孝王立ち、蒙古に對する和親はこれより漸次繼續し、其の命の儘に服從して兵戈を交へざりしが、同時に我が國との交渉は生じたり。

三元兵の大敗

世祖は即位前に於て、既に交趾・大理・吐蕃を服從せしめ、西は中央亞細亞の叛亂を鎮定し、今又支那の四百餘州を略せしを以て、尙兵を諸方に出し、東南亞細亞を統一せんことを圖れり。これより先き高麗は太宗の時既に降りけるも、叛服常ならず、憲宗の晩年に高宗は太子悧を遣はし、表を奉じて蒙古に赴かしめ、高宗の死後は還つて位に即き元宗順孝王と稱するや、世子諶の爲めに婚を元室に約したり。間もなく權臣林衍は元宗を廢して、其の弟安慶公淳を立つるや、衍を誅するを名として叛する者多かりき。此に於て元は趙璧に命じて東京に行省たらしめ、兵を平壤に集めて其の罪を問はしめたり。璧の東京に至るや衍は已に死したれば、元宗を位に復したり。高麗王かくて元に服屬したれば、其の兵を導いて我が日本を攻め、以て舊怨に報ゐんとせり。

我が國の邊民は、早くより高麗の沿岸に來寇し、其の患止むべくも見わざりければ、高麗王之れを元主に訴へたり。又咸安の人趙彝と呼ぶもの、始め僧となりて諸國を遍歴し語學に通じける爲め、元に至りて詳細に其の狀を告げたり。此の時元は恰かも宗を滅したる際なりければ、餘勢を驅りて我が國をも服屬せしめんとし、黒的、殷弘等を高麗に遣はして、高麗を嚮導たらしめんとせり。此に於て高麗王は宗君斐及び金贊をして黒的と共に往かしめけるが、巨濟島の松邊浦に至りて引返し、君斐をして黒的に隨ひ往かしめ、詔旨を奉じ、謹んで陪臣宗君斐等を遣はし、使臣を伴ふて巨濟縣に至らしめしが、遙かに洋上の我が對馬島を望ましめ、萬里の大洋は、風濤高くして天を蹴るあり、かゝる危険を冒して上國の使臣を奉じ、輕々に進むべきにあらずと奏せり。此に於て元主は之れを責め、又黒的を遣はして高麗に諭す所あり、高麗王は即ち其の臣潘阜を遣はし、元書及び國書を齎して我が國に遣はせり、潘阜等筑前に來り、之れを太宰府に上れり。此に於て少貳覺惠は之れを鎌倉に送り、鎌倉幕府は又之れを朝廷に奏したり。此に於て後嵯峨天皇は五秩の賀宴を中止し、二十二社に奉幣して國難を告げ、執權

北條時宗は、令を下して關西沿岸の守備を嚴重にしたり。

潘阜等已にして歸るや、元主は高麗に諭して軍備をなさしめ、次いで脱朶足を遣はし其の戰艦軍備を閲し、海中の水道を黒山島に視せしめたり。其の後潘阜・黒的等對島に來りしが、土人之れを拒んで上陸せしめず、此に於て島人二人を捕へて歸り、以て我が國情を訊したり。幾何もなくして之れを還し、以て我れに通せんとし、元は南良弼を國信使に任じ、我が國に來らしめしも又答へられず、高麗に還るや、其の王張鐸をして我が民十二人を拉して共に元に還らしめ、僞つて日本の使者と稱して謁見を求めしめたり。既にして張鐸又我が國に來り、高麗の書を致しけるが、報せられざりし爲め、高麗は遂に我が國交を絶てり。此に於て元主は鳳州經略使錫都に命じて、初めて日本を伐たしめ、其の軍二萬五千、戰艦九百餘隻、高麗兵八千を合はせて慶尚道の昌原即ち合浦を發し、十一日にして壹岐對馬に來寇せり。かくて二島の兵に防ぐ能はずして死するもの頗る多く、元軍破竹の勢にて松浦を掠め、以て太宰府に迫れり。然るに一夜俄かに暴風雨となり、戰艦覆没して溺死するもの三千五百餘人に及びたり。

幾何もなくして高麗の元宗順孝王薨じて、新烈王新に位に即く。東征の師は既に功なく、其の軍費は皆高麗の負擔なりければ、高麗は出征の師を止められんことを奏せり。此に於て元主は禮部侍郎杜世忠等を使として、高麗の譯語郎將徐贊之れを導き、以て我が太宰府に来る。然るに其の辭禮を失しければ、執政北條時宗は、之を鎌倉に召して龍の口に斬殺す。

高麗王かくと聞て大いに驚き、郎將池瑄をして元に赴かしめて、此の状を告げしめたり。元主大いに憤り、至元十七年十月、阿樓罕に命じて右丞相となし、范文虎、洪茶邱を右丞となし、李庭、張巴圖を參知整事となし、並に中書省事を行はしめ、高麗王と議して征東行中書を其の地に置き、王をして軍務を司らしめたり。其の軍兵十四萬に達し、高麗の將金方慶等、兵一萬、梢工一萬五千、糧十餘萬を以て之れを助け、其の先鋒となり、數千隻の艦船舳舻相啣み、海を蔽ふて來寇の途に就き、先づ壹岐に向ひたり。而して船軍及び梢工等は風に遭ふて行く所を知らず、方慶等力戦して多く島兵を殺したるも、軍中大に惡疫起りて死するもの三千餘人に及ぶ、范文虎は江南より直に進みて諸軍と日

本に會するの約ありしも未だ至らず、軍中士氣沮喪しければ、止むなく兵を回さんことを議せり。

幾何もなくして文虎は戰艦三千五百隻と、蠻軍十餘萬を以て至る。時に阿樓罕は軍中に歿したれば、詔を發して右丞相塔哈を以て代らしめしが未だ至らず、文虎の軍は壹岐對馬の二島を取り、五龍山及び能古志賀島に據りて、平壺に迫りたり。

元軍來寇の飛報一度び我が京都に到達するや、龜山上皇はいたく宸襟を惱まし給ひ、親ら石清水に祈念を籠められ、又伊勢の太廟に手書の願文を捧げられ、身を以て國難に代らんことを祈らせ給へり。其の他全國の神社佛閣に告白して戰勝の祈を捧げらる。時に鎮西の探題北條實時は兵を督して海防の工事を沿岸に築き、弓矢を配して守備頗る嚴重なりき。されば元兵容易に近づくを得ず、草野七郎は夜陰に乗じて敵船を襲ふて之れを焼き、自ら二十餘人を殺せり。元兵は鐵鎖を以て船を繋ぎ、弩を外前に向けて守を戒しめたり。河野通有は輕舸を以て挺進し、橋を倒して賊船に梯渡しとす、跳つて之れに登り、元兵數十人を殺す。大友貞親及び九州の兵は、相次いで進みければ、

元兵驚きて皆な逃げて鷹島に退けり。

范文虎は大に懼れ、單身先づ逃げ去りけるが、一夜大颶風起りて糧軍皆な溺死し、屍は潮に移つて港浦口に漂着し、海上を埋めたり。殘餘の兵は皆な鷹島に在り、木を伐つて船を作り以て歸還の道を講せり。少貳景資之れを探知しければ、直に衆を率ゐて殺倒し、殆んど戮殺し、降るもの一千餘人を捕へて博多に送りて皆な斬殺せり。かくて其中二人を殺して元に生還せしめ、此の状を詳さに元主に告げしめたり。即ち此の役に於て元軍の死せる者は十萬、高麗兵の死者七千餘人と謂はる。元軍敗滅の報京に達するや、後深草・龜山二上皇は、いたく喜ばせ給ひ、使を太廟に立、報賽せしめたり。之れ實に我が弘安四年に當れるを以て、世に弘安の役と呼ぶ。

元主は積年我が國を侵略せんとの雄志ありて、今漸く出征の軍を向はしめ、脆くも一朝にして敗滅したりければ、其の怨恨骨髄に徹し、一時征東行省を罷めしめしに拘らす屢々高麗に命じて戰艦を修理せしめ、又衆囚をして水戰を練習せしめ、次いで征東行省を復せり。高麗王は元の徵發頻繁にして國內頗る疲弊したるが、叛く能はざりければ、

兩國の交を調停せしめんと欲し、其の臣金有成を宣諭使となし、太宰府に來りて、元の爲めに講和を結ばれんことを説けり。其の時北條貞時は、之れを鎮西に拘留して歸らしめず、至元二十三年に至り、元主又洪茶邱等に命じ、再び日本を討たしめ、各所に詔して海船を造り、漕船を集め、水手を募り、糧食を貯へ、三月出發して、八月高麗の合浦に會することを期し、吏部徵斂大に姦利を恣にせり。時に安南は又屢々兵を用ひ、元の國內頗る騷然として群盜蜂起したれば、吏部侍郎劉宣は上書して諫め、元主又其の言を容れて日本への入寇を絶てり。後成宗の元貞三年に、江浙平章政事伊遜偁爾又帝に勸めて兵を日本に用ひんことを告げけるも、帝は其の時機にあらずとて之れを退けたり。

かくて四面海を繞らせる我が日本は、その面積大ならずと雖も、天孫武を以て建國の基を開きてより、頗る勇強にして流石驕主元帝も其の膽を塞からしめ、我が日本の武威赫々として中外に輝けり。其の後幾何もなくして鎌倉幕府倒るゝや、南北の大亂となりて餘憤を海外に漏らさんとするもの、往々にして集つて群をなし、連りに大陸の沿岸



を脅かし、三百餘年間元明の患をなせり。かの八幡賊といひ、倭寇と云ひ、胡蝶軍と呼ぶもの皆な是れなり、而して後に豊公征韓の擧あり、東亞三古國の争闘は、朝鮮の地に於て前古無比の一大變事を起すに至れり。

### 第三章 元の四大藩

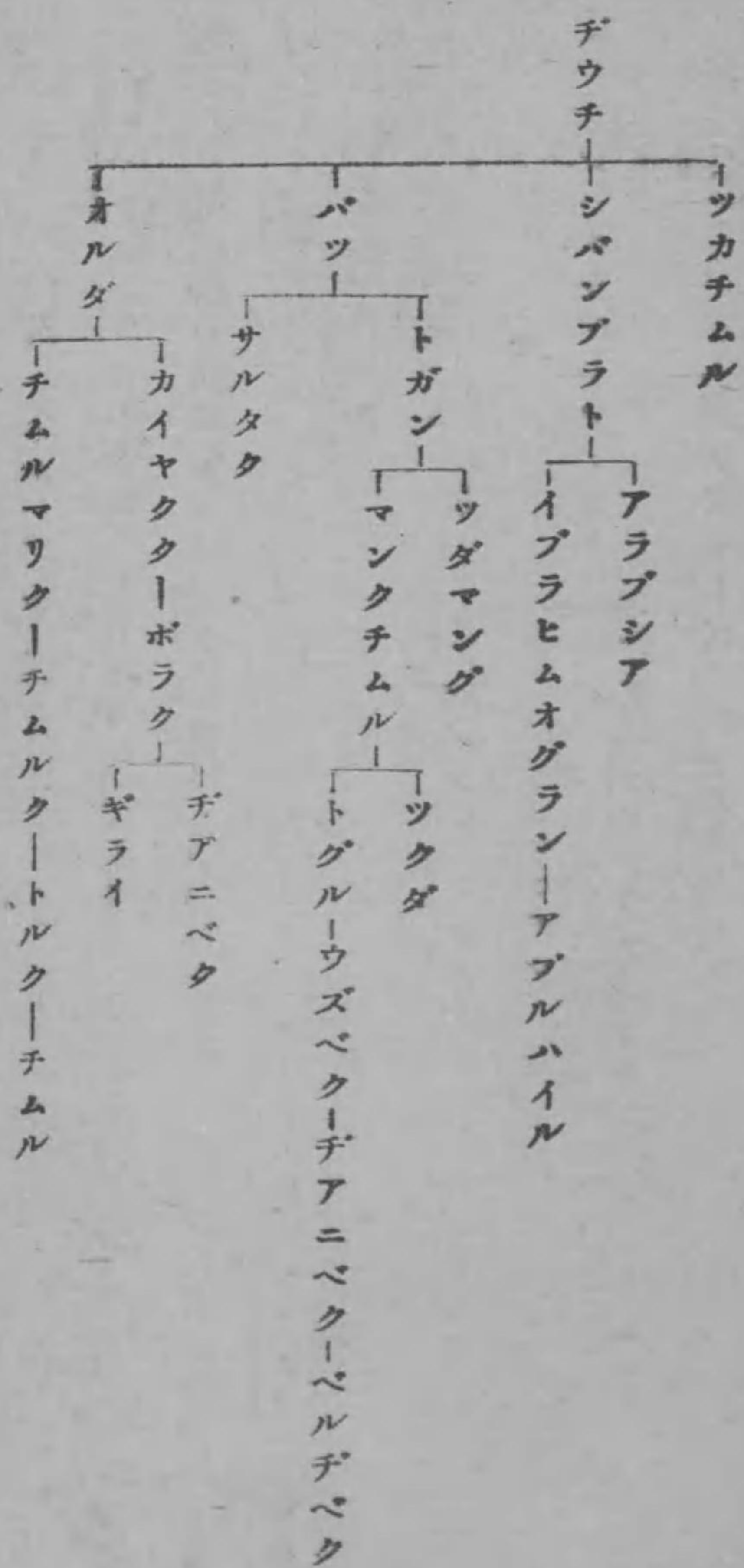
#### 一 ギブチャクハン國

蒙古は實に世界史上比類なき大征服を遂げ、其の領土は、亞細亞に在りては殆んど其の全部を、又歐羅巴に在りては殆んど其の半部を包擁したり。而して此の大帝國は五大部に分れ、元朝は支那本部を中心として、他の四大部の上に位し、名義上に於ては、四大部の君長は元朝の命する所なり。即ち四大部とはキブチャクヤハン國、イルハン國、チアカタイハン國、オグタイハン國是れなり。

キブチャクハン國はヂウチの子拔都の子孫が領有せる所にして、拔都西征の時、蒙古が馬蹄を印せし諸地にして、即ちポーランド・露西亞の殆んど全部に加ふるに、東はキ

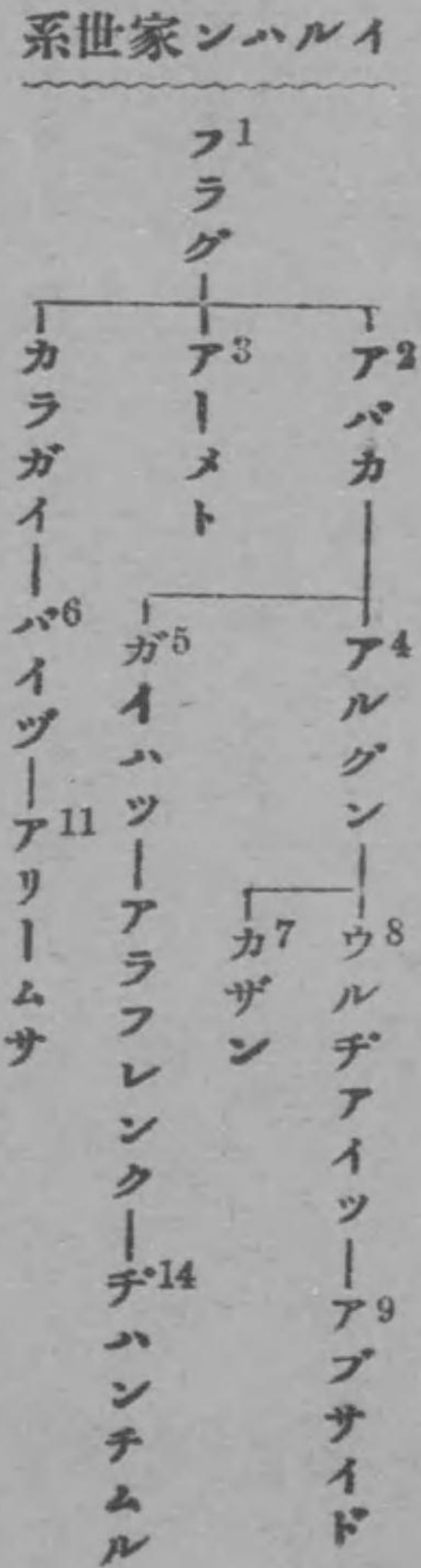
ルギスの荒原に至るまでの大領土なり。都を薩來に奠め、世に之れを金帳國といふ。拔都の兄弟にてツカチムルは後のクリム・カサン兩汗の祖となり、シバンは所謂青帳汗にして、後のウズベクハンの祖となり、オルダは所謂白帳汗なり。

#### ヂウチ家世系



二 イルハン國

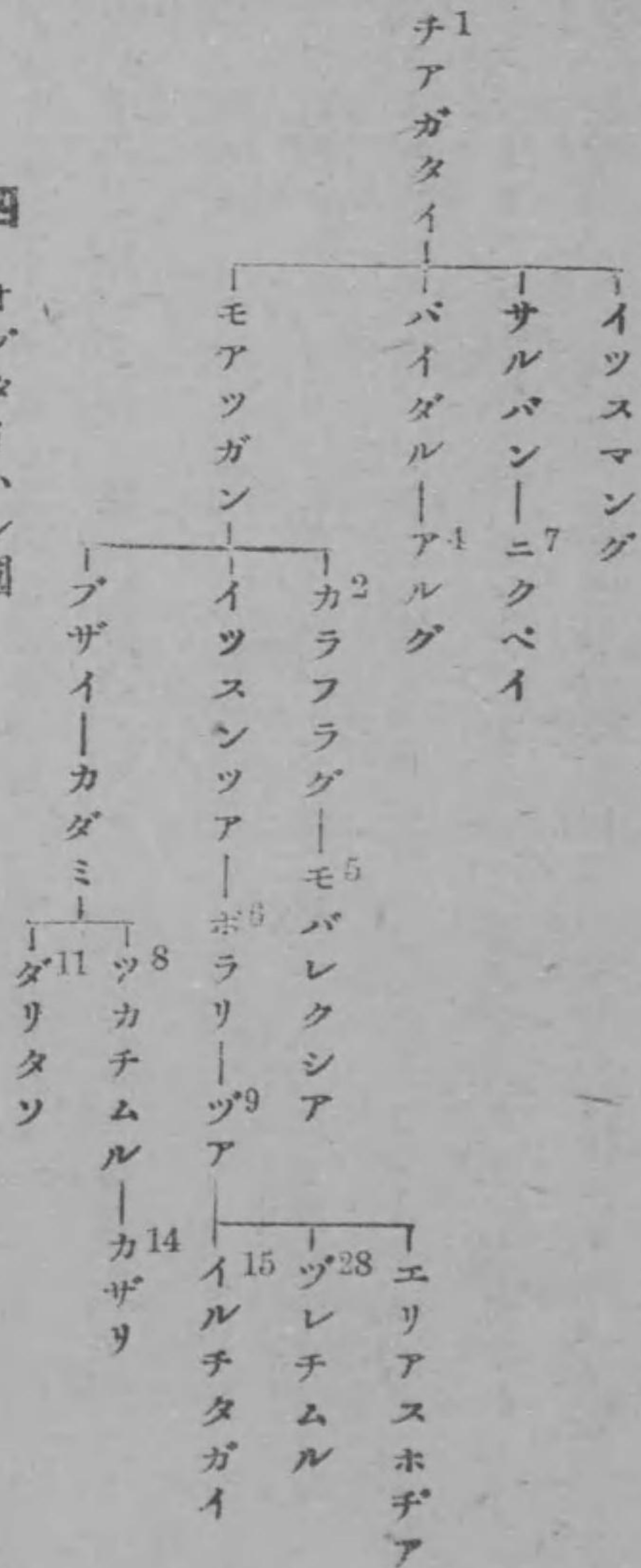
イルハンはフラグの子孫が領有する所にして、フラグが西征して平定し得たる區域  
即ち阿姆河以西の亞細亞なり、國名は波斯人が其の蒙古朝を呼びたる稱より起りしもの  
にして、即ち君主といふが如き意味なりといふ。ウルミア湖畔のマラグアに都を奠  
めたり。



三 チヤカタイハン國

チヤカタイハン國はチアガタイの子孫が領有せし所にして、先きに太祖がチヤガ  
タイに與へたるシール河外の天山附近、西遼の故地を中心として、都をアルマクに奠  
めたり。

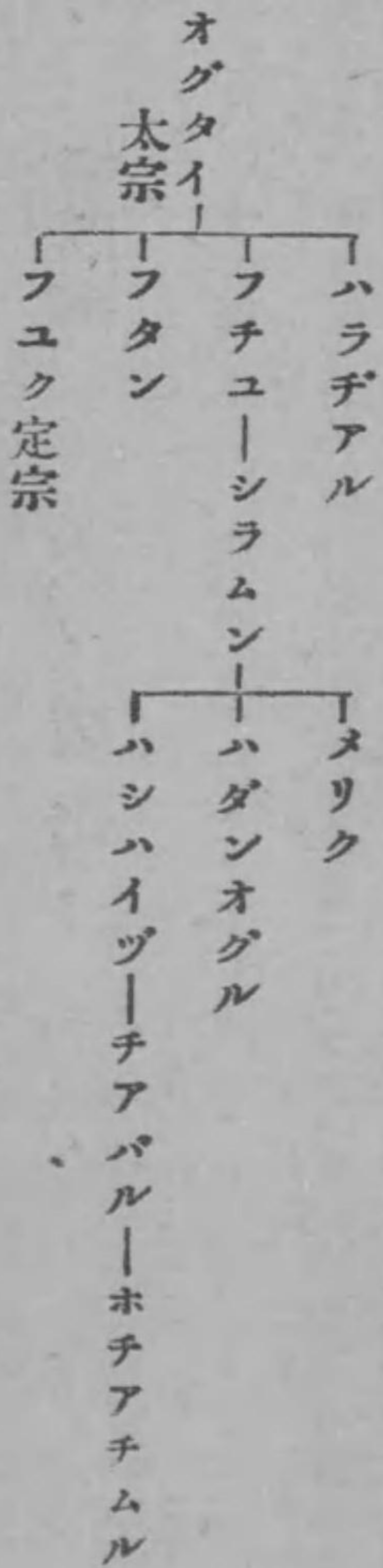
系世家イタガヤチ



四 オグタイハン國

オグタイハン國はオグタイの子孫が領有せし所にして、先きに太祖がオグタイに與  
へたるアルタイ山附近のナイマンの故地を中心とし、都を也迷里河上に奠めたり。

系世家イタグオ



## 第四章 元代の文化

## 一 東西の交通

蒙古の領土は歐羅巴、亞細亞の兩大陸に跨れることゝて、東西の交通は頗る開けたり。此の大版圖に臨むに當りて、蒙古は其の初め宗教上極めて寛容主義を執りければ、當時十字軍によりて信仰の擴張を企圖しつゝありし羅馬の法王廳にては、之れを以て蒙古が基督教を信奉する心あるものなりと誤解、爲めに使僧を態々派遣せり。即ち伊太利僧のビヤノ・カルビニ及び佛蘭西僧のウイルレム、ルフルキ等最も著名なるものなり。

西紀千二百四十五年、リヨンに催されたる結集に於て、東方に宣教師を派遣することゝせしめ、『ドミニカ』派の僧アンセルモ等は、蒙古の波斯前營の將バイヂウの許に至らしめ、『サンフラチエスコ』派の僧、ビヤノ、カルビニ等は蒙古本土に遣はされたり。かくて兩派の使僧は、共に西紀千二百四十六年を以て出發し、『フランチエスコ』派はボヘ

ミア・シレシア・ポーランド等を経て、レンヂツシウに出で、キエフに至り、ドニエプル河畔の蒙古營より三十九日にして、ボルガ河畔の蒙古本營に達し、法皇の書を呈せしに、拔都の手にては之を決すること能はざるより、更に大汗の新選舉場に至るべきを命じたり。

此に於て旅を急ぎて七月二十二日ハラホリムに着し、定宗に謁しけるも、更に要領を得ず。此に於て止むなく十一月末に此處を辭し、西紀千二百四十七年の五月末に拔都の營に達し、急ぎ歸りて法皇に此旨復命せり。而して此の時の紀行文は後世實に貴重なる史料なるなり。

又アンセルモの一行は西紀千二百四十七年バイチウ將軍の營に至りけるが、法皇の書中に汝等多くの人を殺せりと認めありければ、不穩なりと憤り、其の貢物を齎さざるを詰責され、遂に布教は拒絶されたり。

其の拔都の子サルタクが基督教を信奉すとの聞ありければ、法皇イノケト四世及佛蘭西王ルイ九世は、西紀千二百五十三年を以てルブルキを遣はせり。然るに蒙古は

之れを以て佛蘭西王の入貢にあらざるかを疑ひ、且つ拔都の手にては宣教師在國の許可を與へ難きに依り、ルブルキ親ら、マンダの廷に至つて請ふべしとのことにて、九月十五日拔都の營を發し、十二月二十七日大汗の廷に達したり。

ハラホリムにてはルブルキ等如何に辯解するも、佛蘭西王の請和使ならんと認めたりき。かくてルブルキは滞在すること暫にして好めて大汗以下の基督教徒「イスラム」教徒、佛教徒に對する待遇は何れも厚薄なきを知るに至りぬ。五ヶ月の後、西紀千二百五十四年の六月ルブルキは歸途に就きぬ。而して拔都の營を過ぎり、カフカスの途を取り、サンジアン・ダクルに到りしに、ルイ九世は既に其の地を出發せる後なりき。ルブルキの紀行文も亦重要なる史料なり。其の他イルハンの使者として歐羅巴に至りしものは數多あり。佛蘭西・英吉利の王は或は法皇との往復ありしも、此は西伯利亞地方の基督教徒が、歐羅巴人の往援を得んが爲めの詐計なりしが如し。

世祖の時代は蒙古の版圖頗る大なりければ、外人の來るもの又頗る多く、モンテ・ブルビの如きは、大都の僧正に任せられて教會堂の建許を許され、マルコポロの如きは十

七年間も世祖に仕へて、重要な位置を占め、楊州の知事となれり。其の他伊太利の僧オドリクも海を航して支那に至り、北京に赴きて陸路より還りて十數年間旅行をなし、阿弗利加タンチールの人イブン・バツタは當時の大旅行家にして、三十年間に七萬五千哩の足跡を印し、西紀千二百四十二年支那に遣はされて、泉州に上陸し、南支那の各地を旅行して北京に赴けり。

されば海陸兩路共に彼我の往復頻繁にして、陸路に依るものは、中央亞細亞より天山南路を経て、和林一京に通ずるものと、又西伯利亞の南部より、天山北路を経て、和林一京に達するものとあり。又海路に依るものは波斯印度の沿岸より泉州・福州等に至るものにて、此の兩港に住する外人は實に數萬人に及びしといふ。

### 二 マルコポロの探險

當時歐羅巴人にして東洋に來れる遠客頗る多かりしが、マルコポロは特に我が日本の名を歐洲人に照會したる第一人者たるなり。ポロは伊太利のベニスの名門に生れ、其の父ニコルは兄のマフェオと共に商用を以て西遼鞏の境に入りしが、兵亂起り道塞